

ART AWARD
IN THE 清流の国ぎふ芸術祭
CUBE 2017

目次
Contents

- 004 ごあいさつ
Foreword
- 006 開催概要
General Information

審査員・講評
Juries・Comments

- 009 O JUN
O JUN
- 010 十一代大樋長左衛門(年雄)
OHI Chozaemon XI (Toshio)
- 011 高橋 源一郎
TAKAHASHI Genichiro
- 012 田中 泯
TANAKA Min
- 013 中原 浩大
NAKAHARA Kodai
- 014 三輪 眞弘
MIWA Masahiro
- 015 鷺田 清一
WASHIDA Kiyokazu



第1章 - 図版
Chapter1 - Catalogue

- 019 佐藤 雅晴
SATO Masaharu
- 023 柴山 豊尚
SHIBAYAMA Toyohisa
- 027 谷本 真理
TANIMOTO Mari
- 031 中村 潤
NAKAMURA Megu
- 035 平野 真美
HIRANO Mami
- 039 堀川 すなお
HORIKAWA Sunao
- 043 松本 和子
MATSUMOTO Kazuko
- 047 三枝 愛
MIEDA Ai
- 051 三木 陽子
MIKI Yoko
- 055 水無瀬 翔
MINASE Sho
- 059 耳のないマウス
Earless Mouth / Mouse
- 063 宮原 嵩広
MIYAHARA Takahiro
- 067 ミルク倉庫+ココナッツ
mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts
- 071 森 貞人
MORI Sadahito
- 075 安野 太郎
YASUNO Taro

第2章 - 展評
Chapter2 -Review

- 080 キューブのゆくえ／島 敦彦
- 081 清流の国からの問いかけ／住友文彦
- 082 県展のゆくえー岐阜モデル／中村政人
- 083 清流のさざめきから大きなときめきへ／馬場駿吉

第3章 - 記録
Chapter3 -Document

- 086 募集から審査までの記録
- 089 作家支援
- 091 関連プログラム
- 102 展覧会概要
- 104 オープニングセレモニー
- 105 学校団体鑑賞
- 106 ボランティア

第4章 - 資料
Chapter4 -Data

- 110 スケジュール
- 112 広報
- 115 来場者アンケート
- 116 運営体制
- 118 企画委員長・総評
Project supervisor • Comments



ごあいさつ

69回続いた岐阜県美術展を刷新し、3年に1度開催する全国規模の企画公募展として「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」を初開催したところ、3万7千人を超える方々にご来場いただき、心から感謝申し上げます。

本県には、ユネスコ無形文化遺産に登録された「本美濃紙」をはじめ、関の刃物、東濃の陶磁器などの匠の技、そして「高山祭・古川祭・大垣祭」や千年以上の歴史を誇る鶺鴒などの伝統文化が、脈々と受け継がれています。こうした伝統文化や匠の技同様、本展が「清流の国ぎふ」の新たな魅力として、文化芸術の新たな源流の一つとなることを期待しております。

最後に、本展の開催に際し、ご尽力いただいた方々、またあたたかいご支援を賜った皆様に深く感謝するとともに、2020年に開催する「Art Award IN THE CUBE」が一層素晴らしいものになることを心から願っています。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
名誉会長 古田 肇

初開催となった企画公募展「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」に、3万7,579人の方にご来場いただきました。また、目標を大きく上回る790件ものご応募をいただき、心から感謝申し上げます。

本展は、世代、ジャンルを問わず、キューブ(4.8m[幅]×4.8m[奥行]×3.6m[高さ])を無限の小宇宙に見立て、決められたテーマを自由に表現(制作・展示)していただくとするものです。

第1回となった本展では、選ばれた15組が実際に作品を制作し、岐阜県美術館に展示しました。入選者の皆様には、今後のさらなるご活躍を祈念するとともに、岐阜県の芸術文化の振興にお力添えをいただければ幸いです。

この岐阜の地で生まれた小さな一滴が、やがて大河となり海へと注ぐように、全国そして世界へ発信し、「清流の国ぎふ」の新たな魅力と活力の創造に繋げてまいります。

最後に、本展の開催にあたり、ご支援ご協力を賜りましたすべての皆様に、深く感謝申し上げます。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
会長 土屋明之

Foreword

I would like to thank all of the 37,000 people who have come to see this first hosting of the ‘Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2017’ exhibition, a new three-yearly exhibition which accepts entries from all across the country. I would also like to extend my deepest appreciation to all who helped to make this exhibition successful. In Gifu Prefecture we have been handed down a wealth of continued heritage, including Hon Mino-washi paper, registered as UNESCO Intangible Cultural Heritage, the cutlery of Seki, the porcelain of the Tono region, the Takayama, Furukawa & Ogaki festivals as well as the cormorant fishing which has been performed for over a thousand years. Just like these traditional cultures and crafts, I expect that this exhibition will become a new source of cultural arts and further the appeal of the Gifu Land of Clear Waters.

I offer my deepest gratitude to everybody who has worked so hard to create and support this exhibition, and also my most sincere wishes for the future success of the 2020 Art Award IN THE CUBE which will build upon this exhibition.

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2017
Executive Committee

Hajime Furuta
Honorary Chairman

The ‘Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2017’, which has been held for the first time this year as a special exhibition open to general entries, has been visited by 37,579 people. I am also sincerely thankful for the over 790 submissions we received, a number which far exceeded expectations.

In this exhibition we ask participants to freely express a set theme, with no restrictions on genre or age, imagining the 4.8m(w) x 4.8m(d) x 3.6m(h) cubic area as a manifestation of limitless space.

In the first exhibition, 15 selected artists created works and exhibited them in the Museum of Fine Art, Gifu. From here on, I wish them every success in their future efforts and would be most happy if they would continue to help us promote Gifu’s artistic cultures.

Just as a small flow of water from Gifu eventually merges into a great river and flows into the sea, we will continue to develop the appeal and efforts of the Land of Clear Waters, conveying them to both Japan and the world at large.

Finally, I offer everybody who has supported us and cooperated in the hosting of this exhibition my profound gratitude.

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2017
Executive Committee

Akiyuki Tsuchiya
Chairman

開催概要

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017

第1回テーマ

「身体のゆくえ」

現代社会はコンピュータの発達・普及にともなって発展し、また複雑化してきました。社会を写す鏡である現代アートも、コンセプト、素材、表現方法などあらゆる要素について既存の枠を取り払い、複雑化、多様化の一途をたどっています。

アートはあらゆる可能性を追求すべきですが、その展開のあまりの速さ、広さに、発信者である人間が置き去りにされてしまっているのではないかと、多様化そのものが目的化されているのではないかとさえ思われます。

私たちは、美術作品は人間の生の結晶であると考え、今一度、人間そのものである自らの「身体(肉体、精神)」に着目し、その中に何を発見し、何が生まれるのかを問い、現代社会全体をアートの視点で読み直してみたいと考えます。そこで生成される情熱や才能が、丈六のキューブという空間を通して発露される結晶体(作品)を、この「Art Award IN THE CUBE 2017」は大いに歓迎します。

作品条件

4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)の空間(直方体のキューブ)内で展示できること。

目的

- ・新たな才能の発掘と育成
- ・アートに関わる人材の育成とネットワークづくり
- ・新たな形のアートの鑑賞機会を提供

会期

2017年4月15日(土)から6月11日(日)まで

会場

岐阜県美術館(岐阜県岐阜市宇佐4-1-22)

主催

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会、岐阜県

General Information

Gifu Land of Clear Waters Art Festival, Art Award IN THE CUBE 2017

Theme for the 1st installment

“Whereabouts of the Body”

With the advancement and popularization of computer technology, the development of contemporary society has become increasingly complex. Contemporary art as a mirror of society has abolished conventional frameworks in terms of concepts, materials, styles and other aspects, and is therefore getting more and more complex and diverse as well.

Art is supposed to explore all kinds of possibilities, whereas it seems today that the human subjects behind it are being left behind due to the speed and breadth of its expansion, and that diversification has become the actual purpose of art.

Understanding a work of art to be a crystallization of human life, our intention is to focus on the very “body” (in a physical and spiritual sense) that is a human being, and explore what can be found or created within it through a reconsideration of contemporary society at large from the viewpoint of art. The “Art Award IN THE CUBE 2017” provides a cuboid space as a setting to expose crystallizations of such power and passion in the form of various artworks.

Conditions

Submitted works must be displayable in a cuboid space measuring 4.8m (w) x 4.8m (d) x 3.6m (h) .

Purpose

- To discover and nurture new talent.
- To train people related to art and to create a network.
- To offer opportunities for appreciation of new forms of art.

Exhibition period

April 15 - June 11, 2017 (58 days including days on which the museum is closed)

Venue

The Museum of Fine Arts, Gifu (4-1-22 Usa, Gifu City)

Hosts

Art Award IN THE CUBE Executive Committee, Gifu Prefecture

審査員・講評

Juries・Comments

**0 JUN**

画家／東京藝術大学教授

0 JUN

painter, professor at Tokyo University of the Arts

15人の作品を見て思ったこと。展覧会条件の規定されている空間とどう向き合うか、あるいはそれらを軽々とまたいでゆくものとの静かなバトルになっていたように思う。場、空間、イメージの手に負えない自由度をもっと獲得して欲しいと願います。

When I saw the works created by the 15 applicants, I found that there was a quiet battle between the artists those who struggled to find out how to deal with the conditions of the limited space in the exhibition and those who stepped over such conditions easily. I hope they will more deeply understand and manipulate the unruly freedom of places, spaces and images.

1次審査講評

ジャンルにとらわれない場処からの思考や
豊かな表現行為が試される

絵画、平面での応募が少なかったのはこのコンペの空間条件によるものと推察されますが、たとえば、絵を“描く身体”から、その絵を観る人の“見る身体”にリレーされることは画家にとっても鑑賞者にとっても愉しく深い体験です。「身体のゆくえ」は作品を仲立ちにして両者に架かって現れるものと思います。私としては、そこに届いている絵画表現もわずかではありますがあったと思いましたが、残らなかったのは少し残念でした。ともあれ、最終審査に進んだ作家のこれからの健闘を祈ります。こちらの予想を超える作品が生まれることを期待します。

また、展示空間が「丈六」というサイズの条件があるためか、それを意識した立体やインスタレーション形式の作品を構想したものが多くありました。それに伴いマケットを作った人もかなりいましたが、空間や作品を単に縮尺しただけのものがほとんどで、かえてスケールや魅力を損ねているように思いました。身もふたもない「巨人の視点」ではない、想像力をかき立てるようなマケットを試みてほしいのでは。今回審査が様々な表現領域の方々によって行われましたが、作品もまたジャンルにとらわれず、いろいろな場処からの思考や豊かな表現行為が試されていることの証となるようなコンペになることを願っています。

2次審査講評

キューブ（箱）のゆくえを見せてくれ

個々の作品を観てそれぞれに思うことと、このコンペの条件であるキューブの設定をどう引き受けて、あるいはどう引き受けないで作品をつくっているかということが重なり見えてくるという、これまで前例の無い特異な展覧会だと思った。キューブの中に入ってしまうとキューブを忘れることが出来て中のモノや設えを楽しむことができるけれど、外に出るとキューブが置かれているフロア全体が一望でき、しかしその眺めは決して楽しくはない。箱の中(美術館)にまた箱があるじゃないか！キューブの点在の仕方、そのためのレイアウトとコンストラクションを眺めるもう一つの眼が必要か。それぞれの作家たちはこのことは気にしているのだろうか。ここにある全ての作品は、いずれも誰かの躰のどこかにどのようにか触れている。寝言なのかそうでないのか？この臨床実験は笑いながら尾根を歩くように油断がならない。

屋外に持ち出された箱は、その行為だけで風光を獲得し、更に実寸を見誤らせる錯視もこちらの身体に起こさせ痛快だ。どれも手応えを感じた。そう、「身体のゆくえ」は、見た。なので次は「箱のゆくえ」を見せてくれ。空っぽの箱(躰)でもいいからその佇まいを見せてくれ。



十一代大樋長左衛門（年雄）

美術家、陶芸家／ロチェスター工科大学、金沢大学などで客員教授

OHI Chozaemon XI (Toshio)

artist, ceramic artist, guest professor at Rochester Institute of Technology and Kanazawa University

キューブ空間の捉え方、アートの概念を再考させられた。大賞作は人の脳と身体バランスを問いかけている。素材は、現代社会に当たり前に在るものをツールとしている。審査員賞作は、人が古来必要としてきた自然の恵みである木を時に廃材ともしてしまう人への警告でもあり、好印象をもった。

The process of this selection made me rethink a cubicle and the concept of art. The work that won the Grand Prize asks the audience what a human brain is and what body balance is. The artists used materials commonly present in modern society as their tools. The work to which the Ohi Chozaemon XI Prize was awarded is a warning to people who sometimes waste trees, which are the blessings of nature and have been necessities for human beings since ancient times. This approach impressed me.

1次審査講評

我々は作品に同期して深く考える。
貴方は何処にいて、何を観ているのか？

800点近い応募があったことに驚いた。それぞれの作品に、真剣に向き合わせていただいた。

プレゼンテーション：高齢の出品者は、手書きのものも多く、一見、古い表現方法だが、逆に明快なものもあった。若い出品者はPCを用いたプロポーサルが多く、一見、わかりやすく感じるが、コンセプトの弱いものが多々見受けられた。

コンセプト：題名と表現が一致していない。説明が長すぎて本意が伝わらない。簡潔明瞭な表現からは意味の深さを逆に感じやすい。

総論：大半にコンセプトと表現のズレを感じた。しかし、優れた企画には強いメッセージを予感することもできた。テーマ「身体のゆくえ」をいかに捉えているのか？が伝わるものに、我々は目を向けた。世界中が現代アートの洗礼を受け、様々な地域の異文化が、同一化されている。作品から発せられるメッセージが、何かを語りかけてきた時、それに同期して深く考えさせられる。貴方は何処にいて、何を観ているのか？素材や技術はコンセプトともなる。現代アート、伝統工芸、すでにジャンルでない。静かに座して、外面から自らの存在を考えれば体内までもが見え、内面からは限りの無い視界が体を通じて外に向かっていくはずだ。「天地人」「時間と空間」「神と人」「地球と宇宙」「生と死」—太古からのテーマは、思考の自由を与えながら深く脳裏に刻まれていく。この公募展は、新たな才能の発掘と育成を目的にしている。残念ながら選外となった方々には、更なるチャンスとなれば幸いだ。

2次審査講評

再考させられたアートの概念

いま、クラウド化したネット社会によって、感情を伝える言葉の技術だけが巧みになり、身体言語が失われつつある。昔ほど泣かなくなった人、笑わなくなった人、感情を内に秘めるその姿は、時に危うい病的な現象を引起こしている。

テーマ「身体のゆくえ」の捉え方は自由だった。しかし、取り残された感情、怒り、哀れみなどを表現する作品が多かったことは特徴的であった。喜びや楽しみが希薄となり、我々は何かに憂いているのかもしれない。

コンセプショナルには、人の脳と身体との不可思議な関係、人と人の感覚を繋ぐことから新たなコトが生まれる可能性、生死を問うことからの命の尊厳、多くはそんなメッセージ性の強いものだった。

また、産業廃棄物、自然の恵みである木の存在、マンメイドや古来からの素材を問い直す作品からも好印象をもった。私はほとんどの作品に同期し、深く考えさせられた。次回の展覧会を開催するころには、人の喜びや楽しみが多く表現される社会となっていることを願っている。



高橋源一郎

小説家、文学者／明治学院大学教授

TAKAHASHI Genichiro

novelist, literary scholar, professor at Meiji Gakuin University

楽しくも苦しい最終審査だった。一次審査の企画を見て期待していたものが、実作になってみると意外に面白くなく、逆に、企画では半信半疑だったものが、目の前に実物で現れて圧倒されたりもした。最後に素晴らしい大賞作品を選考できて満足している。

The final selection was enjoyable but painful. Some works lost the attractiveness that they had when they were still in their planning stage and that had raised my expectations in the first selection. However, when presented as final works, they were not interesting anymore and were just boring pieces of work. On the other hand, there were pieces that I found not so convincing in the first selection, but thought were overwhelmingly impressive when I saw them in the form of finished works. I'm very satisfied that we were able to select the most wonderful piece of work for the Grand Prize.

1次審査講評

まるで自分がその作品の設計図の共作者、
いや、共犯者になったみたいだ

詩や小説の審査はずいぶんやらせていただいた。だが、美術（と限定できない、もっと広がりのある空間を表現する）作品の審査は初めてで、とまどい、驚き、そして、とても新鮮な衝撃を受けた。まずは、応募作品の多さ。その多様さ。さらに、作品を審査するプロセス自体に。最終的には、4.8m × 4.8m × 3.6mの空間を占めることになる作品だが、それはまだ、現実には存在していない。最初の審査は提出された「設計図」だけで行われる。文学の審査では、もちろんそんなことはありえない。「美術」の審査では、審査員もまた、その作品の制作に加わらなければならない。しかも、800近くも作品（のようなもの）があるというのに！ 正直なところ、楽しみよりも不安な気持ちの方を多く抱えて始めた審査だったが、進むうちに、どんどん楽しくなってきた。まるで、自分が、その設計図の作者の共作者になったみたい。というか、共犯者になったみたい。ぼくはふだんから、小説をほんとうに楽しみたかったら、まず自分で書いてみることだ、とっている。読むためには、書くのが実はいちばんの近道なのだ。気がついたら、いままで、純粋な観客以外にはなったことがなかった「美術」という場所で、それを「つくる」という秘密に接近させてもらっていたのだ。こんな楽しいことはありません。最高です。たいへんだけど。

2次審査講評

議論の果てに

どんな選考会でも、議論が激しくなるほど楽しい。みんなの意見がまとまらないほど嬉しくなる。今回は特にそうだった。賞の一回目、対象は美術、話し始め、考え始めると、きりがな、終わりがない。その「終わりのない」白熱した議論を産んだ、素晴らしい作品と作者たちに感謝したい。大賞の1作と審査員賞の7作、ほとんど差はなかったと思う。もし、大賞の「cranky wordy things」と他の作品とに違いがあるとするなら、この作品には、わたしたちの無意識に潜む禍々しいものへの視線があったような気がする。わたしたちが作品を見る、のではなく、わたしたちが作品に見られている。そんな作品であるようにわたしには思えた。また、わたしが審査員賞に推した「THE MAUSOLEUM -大霊廟-」は楽器であるのに、なぜかわたしには原子炉に見えた。そこにも、やはり不穏なものがあるようにわたしは感じた。そんな作品が生まれた理由について考えること、それがわたしたち審査員や鑑賞者に与えられた責務なのかもしれない。



田中 泯

ダンサー

TANAKA Min

dancer

カラダで作品に向き合うこと、がどの位、苦痛を伴うことか、分かってもらう必要はない、が、キューブの空気に僕のカラダの超部分達は間違いなく反応しておった。ライブな生こそが作品性の根拠だと、今、思った。

It is not necessary to make an audience understand the pain of an artist who creates a work of art and faces and feels it with his/her body. But, surreal parts of my body did definitely react to the atmosphere of the cubes. I realized at that moment that the value of a work of art lies in its “real-time” freshness.

1次審査講評

不在や不明にこそ愛こそが表現の基本だ

「身体のゆくえ」という如何様にも処理できそうな言葉が主催者から世界に投げ出されてしまった。歴史は常にカラダのゆくえを整理し始末してきた筈だ。僕なんざお蔭で今だに行方不明だ。師・土方巽は「時代に添寝するようなオドリは要らないヨ!」と言っていた、いや逆だったかも知れない。

ユクエという時と場所、カラダという現実と嘘。カラダは見せない物事、見えない事態、語られない言葉、現わせない言動、飛び出さない衝動に満ちている。他人はどうか知らないが、僕はカラダとともに育ってきた子供だ。大人はまだない。……等々。世迷い事を考え、表と裏をくっつけ、考える。

八百もの応募者の、あまり野望を感じなかったのが残念だが、計画・企画・希望・夢を読み見する僕が、分かりたくない事がある、どうして歴史に残る物や事を作ろうとするのだろう。不在や不明にこそ愛こそが表現の基本だと思うのだけれど。

2次審査講評

へい!キューブ

審査に関わって、現在何を感じ思っているかを語ることはムズカシイ、だから意見の市場の一例として話してみよう。僕の予想以上に、募集に応じた多数の人々の多数の思い考えに接して自分の脳内の言語達が乱運動を始めた、混乱よりは喧騒という感覚か、面白い!と思った。審査をしながらの不審も許す僕自身、時空のどっか辺で僕が今暮らしているかという表現、評価が定まるということに興味を断った事もあった。今思うから成立する人生、歴史の歩行のどこでもライブな作品性、ダンサーという生にとって決定は決意だ。カラダという個人の事実から発した因果に表現は停留し出発する、と思う。こんなグズな思いでも僕には面白い。型こそ違え僕達は皆カラダという箱壁の中に居る、居場所はそこにしかない、キューブという美術館に表現の未来は参集するのだろうか?



中原 浩大

彫刻家、美術家／京都市立芸術大学教授

NAKAHARA Kodai

sculptor, artist, professor at Kyoto City University of Arts

予想は、良くも悪くも裏切られて、期待を込めて大賞を贈り、敬意を表して個人賞を選ばせていただきました。

My expectations were betrayed for better or worse. I selected the winner of the Grand Prize based on expectations for the future and selected the winner of the Nakahara Kodai Prize out of respect for the artist.

1次審査講評

お前にこれがわかるかとばかりにオルタナティブなクオリティがつきつけられる展示となれ

「身体」ではなく、「身体のゆくえ」なのであって、大切なのは「ゆくえ」についての回答だろう。（ちなみに審査を依頼された時点で既にテーマは決定していたので、この解釈は私見だが。）だから、応募書類に目を通した段階でまず私が判断に迷ったのは、「ゆくえ」についてはよくある話だけれど、いわゆるオーセンティックなクオリティを予想させるプランの位置づけだった。これらは一次審査会場での選考プロセスの初期段階ではかなりセレクトされていたが、選考が進むにつれて姿を消していった。私自身もこの機会だからこそ取り上げてみたいと思ったプランを優先したかったので、この結果には納得している。その一方で、人間の死や終末の現実について取り上げようとする内容のものをプッシュしきれなかったことは後悔している。現場に向かい合う立場からストレートにアプローチしようとするもの、抽象化することのリアリティをつかもうとするものなど、いくつか興味深い内容があった。

一次審査の結果について高慢さを怖れずに言うとするれば、角が丸くなってしまったというのが率直な感想だ。最終的には私の感想が見事に裏切られて、お前にこれがわかるかとばかりにオルタナティブなクオリティが突きつけられる展示となってくれると期待している。

2次審査講評

「ゆくえの兆し」への期待

応募のためのプランニングから、昨年夏の一次審査を経て今回の展示の完成までの長丁場を悠然と前進し続けた方もいれば、時間の経過とともに起きる心の動きに抗うべきか身をまかせろべきか悩まれた方もいらしたように感じながら展示を拝見しました。お疲れ様でした。

私にとっての大賞選考の最後のキーワードは、やはり「ゆくえ」でした。もう少し詳しく言えば「ゆくえの兆し」、もう少し率直に言えば「ゆくえの兆しへの期待」です。実際のところ心を決めたのは、議論の終盤に「それは触ってしまっているからだよ」（触っているからだよだったかな）と田中泯さんから腕をぐっと掴まれた瞬間でした。（その瞬間まで、「私のことを考えてほしい」ではなく、「あなたの考えが聞きたい」と思っていたので。でも「あなたの考えが聞きたい」なんだけど、今でも。）

体が反応してしまう展示が一つだけありました。実は予想外の反応で、その事実をどう受け入れるかしばらく自問しました。この展示を個人賞とさせていただきます。



三輪 眞弘

作曲家／情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 学長

MIWA Masahiro

composer, president of Institute of Advanced Media Arts and Sciences [IAMAS]

プロポーザルだけで選んだ一次審査の印象から、想定以上の作品になっていたかが結果となったと思う。大賞を一つだけ決めることはとても難しかったが審査員にとってもエキサイティングな議論が交わされ満足はいく結論が出せたと思う。

The final decision was made based on to what extent each work exceeded our expectations from when the proposal submitted for the first selection. While it was very difficult for us to narrow down the winner of the Grand Prize to one finalist, I think the juries were able to reach a satisfactory result through exciting discussion.

1次審査講評

未来の「芸術」を根本から再定義するヒントとなるか

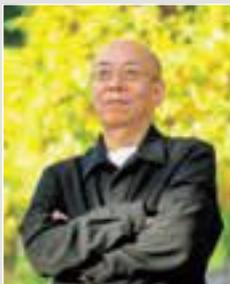
「自分が高く評価したプランの少なからずが選ばれた。しかしすべてではなく、結果的に選ばれなかった秀逸なプランもあった」というのが第一次審査を終えた今の感想である。おそらくこれは他の審査員も同様だろう。しかし、審査を終えても多くの緊張感は変わらない。選ばれたプランが本当に期待したものをを見せてくれるのか、自分が評価しなかったプランがその予想を裏切ってくれるのか。ぼくにとっては、これから実現される作品の「質」や「わかりやすさ」ということより、それらが未来の「芸術」を根本から再定義するヒントとなるものなのかが最大の関心事なのである。つまり、ぼくの「評価」とは作品の出来 / 不出来を判定することではない。そうではなく、無数の提案の中から血眼になってその新しいヒントを探し出し、占う作業に他ならない。今まで「芸術」が人間にとってかけがえのないものだったとしても、人工知能が絵を描き始めたこの時代に、これからもそうであり続けるのかは決して自明なことではないのだから。

2次審査講評

覚めた「物の怪」

大賞の「cranky wordy things」も、審査員賞の「移動する主体(カタツムリ)」も、それぞれが、今回のテーマである「身体」に対して、きわめて特異な形で切り込んだ作品だった。どちらの作品も少しだけ「ものが動く」ものであり、しかも「タネも仕掛けも」よく見ればすぐ分かるようなものであるということも共通点である。同時に、ただそれだけのことで、これほど不思議な「何か」を感じさせることができるというのは、ぼくにとっての発見でもあった。

両作品においてそれは、不気味な何かの気配のようであり、ぼくに「物の怪」という言葉を思い出させたものの、決してそれらは呪術的な意匠を凝らしたものではない。むしろ正反対とも言える、クリーンなCUBEの中で起きた、日常化したテクノロジーによる「覚めた」体験なのである。そして、それこそが、作品プランの段階では想像もできなかった、現実空間の中に置かれた作品の力なのであり、現代を生きるアーティストからの、この芸術祭への応答だったと思う。



鷺田 清一

哲学者／京都市立芸術大学学長

WASHIDA Kiyokazu

philosopher, president of Kyoto City University of Arts

身体の深淵を探るもの、現代の身体状況と格闘するもの、身体へのこだわりに見切りをつけるもの(?)など、身体とはこんなにも^{くろ}暗い問題かとあらためて思いました。身体はほんとうはいやというほど社会にからまれていて、それが陰に陽にひしめていました。

The works included one that explored the abyss of the body, one that fought against the modern-day status of the body, and one that has lost respect for the body (?). These works reminded me that the body has such dark aspects. The body is intensely intertwined with society. In their works, there were so many issues thronging with each other, positively and negatively.

1次審査講評

身体をもつということ、身体であるということの悲痛、ひりひりするような痛みがそのまま見る者を巻き込むような空間へ

800点ほどの作品プランの審査は、一つ一つ、文章から、ラフスケッチから、立体的な仕上がりを想像しなければならないので、アタマがぐんぐん熱を帯びて爆発しそうでした。さすがにこれだけの数の作品プランとなると、ああこれかという既視感をともなうもの、あまりにおかしくてしばらく笑いが止まらないものから、アタマではかろうじてわかっても実際にこの空間の中に身を置けばどんな感覚が発生するのか、想像もつかないようなものまで、中身はまことに多彩でした。《身体ゆくえ》を、すこし距離をおいて批評的・対象的に捉えようとする作品が多かったように思いますが、与えられたキューブの空間そのものを、じぶんでもよくわからない未来の身体ないしは身体感覚として、不可解なままに表現する作品がもっとあるかと想像していました。

身体をもつということ、身体であるということの悲痛、そのひりひりするような痛みがそのまま、見る者を巻き込んでしまうような空間の呈示として。べたべたと貼りついてくる、ちりちり刺してくる、あるいはふわっと、あるいはぎゅっと包まれて窒息してしまいそうな、そういうちょっと薄気味わるいほどの空間にも、このあとの実作で出会えるのを楽しみにしています。

2次審査講評

身体は世界をつくる生地

「在る」ということは、見えるということ、聞こえるということ、匂うということ。つまりは知られ、感じられているということ。その意味で、世界は身体という生地できています。だけど、その生地である身体のごくわずかをしか、わたしたちは知りません。身体はわたしたちにとって深い謎でもあります。

世界はどうしてこんなふうであるのか、それをわたしたちは、身体に射す影をとおしてしか掴めません。そこにはもちろん歴史の^{くろ}暗い影も射しています。出品者たちはそういう影をたよりに、それぞれに独自の感覚で、世界の今を、そしてそのゆくえを察知しようとしています。最終的に選ばれた作品も、物質としての身体に執拗に向きあうもの、おのれの身体感覚を掘り下げるもの、身体の記憶を、いのちの触感を、他の生きものとの連続を探るもの、身体を組み立てている無言の制度を暴くもの……と、現代の身体状況と格闘するものばかりです。

アートとは、身体という、世界のこの生地に仕込まれるふくらし粉のようなもの。それがこのように多様にあるかぎり、世界はまだ大丈夫だと思いました。

ART AWARD IN THE CUBE 2017

清流の国ぎふ芸術祭

身体
の
ゆ
く
え

不在や不明にそそぐ
愛こそが表現の基本だ
——田中 泯

我々は
作品に
同期し
て深く
考える。
貴方は何
処にいて、
何を観て
いるのか？

——十一代
大樋長左衛門 年雄

未来
根本から

身体をもつということ、
身体であるということの
悲痛、ひりひりするような
痛みがそのまま、見る者
巻き込むような空間へ

——鷺田清一
哲学者 / 京都市立芸術大学学長



Chapter

1

図版
Catalogue

ジャンルにとらわれない、
いろいろな場処からの思考や
豊かな表現行為が試される

高橋源一郎

まるで自分が
その作品の設計図の
共作者、いや、共犯者
になったみたいだ

高橋源一郎

審査員メッセージ

お前にこれが
わかるかとばかりに
オルタナティブな
クオリティが
突きつけられる
展示となれ

中原浩大

中原浩大

来の「芸術」を
再定義する
ヒントとなるか

三輪真弘

三輪真弘

を

凡例

Notes

- ・清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017の出品作品を掲載した。
- ・制作年は、すべて2017年である。
- ・図版解説、第2章のレポートは鳥羽都子が担当した。

Title

HANDS

HANDS

Artist

佐藤 雅晴

SATO Masaharu

人が手を使って世界と関係をつなぐ実写と、手の部分だけをトレースしたアニメーションが混在する映像作品。作家にとってトレースとは、対象を「自分の中に取り込む行為」。膨大な枚数の作画は、デジタル機器を駆使する身体／手によって生み出されています。

A video work mixing actual footage of people using their hands to make a connection with the world, and animation tracing the hands alone. For the artist, tracing is the act of taking the subject “inside oneself.” The vast number of pictures have been created by the artist using both digital devices and his own body through his hands.

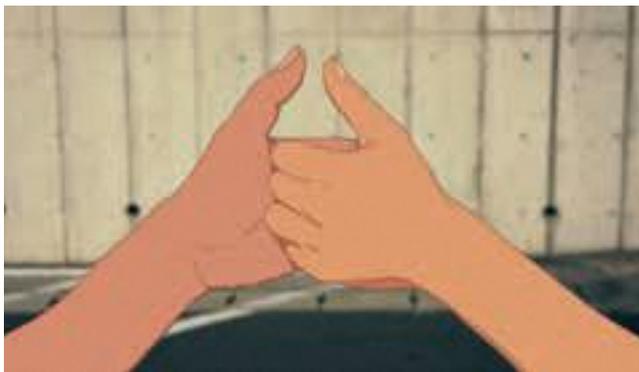




牡丹と手



空と手



指相撲の手



夫婦の手



佐藤 雅晴
SATO Masaharu

1973年大分県生まれ。茨城県拠点。

Born in Oita Prefecture in 1973 / Based in Ibaraki Prefecture

東京藝術大学美術学部油画学科卒業、東京藝術大学大学院修士課程修了。

2000–2010年、ドイツのデュッセルドルフに滞在。

2009/City_net Asia 2009 (グループ展) / ソウル市立美術館 / ソウル

2012/ 第15回文化庁メディア芸術祭 / 国立新美術館 / 東京

2013/ ナイン・ホール (個展) / 川崎市民ミュージアム / 川崎

2014/ 日常 / オフレコ / 神奈川芸術劇場 / 横浜

2016/ 東京尾行 (個展) / 原美術館 / 東京

Artist's Comment

「やはりどこかで地方の公募展として認識された感がある。岐阜駅の前のシャッター商店街などの空きスペースを利用するなど、公募展という雰囲気から脱却したもっと大きな視野で展覧会をつくってほしい。学芸員やスタッフ、ボランティアの方々は、作家に対してしっかりとサポートをしていたと思います」



Title

ニョッキ(如木)2017

Nyokki 2017

Artist

柴山 豊尚

SHIBAYAMA Toyohisa

この世に存在するすべてのものは、留まることなく常に移り変わります。その無限に広がる一瞬を、木の積層材を使った造形を鏡に映すことで表現。「身体とは、精神を伴って初めて成り立つ」という作家のテーマが空間に結実した作品です。

Everything in this world is constantly changing. The infinitely expanding moment is expressed by reflecting structures created in laminated wood in mirrors. This work creates a space bringing to fruition the artist's theme that "the body is something that only comes into being along with the spirit."









柴山 豊尚

SHIBAYAMA Toyohisa

1955年岐阜県生まれ。岐阜県拠点。

Born in Gifu Prefecture in 1955 / Based in Gifu Prefecture

武蔵野美術大学造形研究科修了、中学校勤務。「彫刻村」(郡上市)に1985年から参加、「歌となる言葉とかたち展」(郡上市)に2011年から参加。

1978/ 第12回日本国際美術展 / 群馬県立近代美術館賞 / 東京都美術館

2002/ 彫刻村2002展 / 岐阜県美術館県民ギャラリー

2015/ 歌となる言葉とかたち展 / 岐阜県郡上市

2016/ 第76回美術文化展 / 新人賞 / 東京都美術館

Artist's Comment

「キューブのための制作を通し、空間の捉え方と表現の仕方を学ぶ貴重な経験となった。今後の制作の方向も明らかになってきた。岐阜県内の作家との交流や美術関係者との繋がりができた。また、(地元各務原市の)情報誌などに特集をしていただき、地元の方々に活動の様子を知っていただくことができた」



Title

この部屋とダンス

Dance with this room

Artist

谷本 真理

TANIMOTO Mari

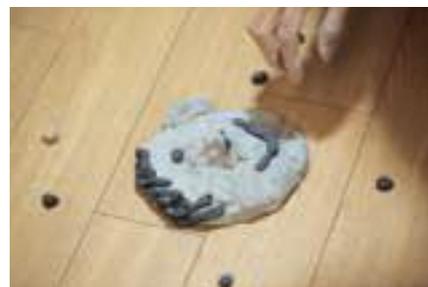
粘土で形を作り、柔らかいうちに壁や床に投げつける。心地よい身体感覚を探す振る舞いと、作為を無にする行為とが作家自身の意図を崩し、空間を変化させます。空間内のすべてがまるでダンスの軌跡のような変化の予感に満ちていきます。

The artist creates shapes out of clay, then throws them against the wall or floor while still soft. Working in search of a comfortable bodily sensation and acting so as to render another action meaningless both destroy the intentions of the artist herself and change the environment. The entire space becomes filled with the anticipation of change, as if it were the trajectory of a dance.









谷本 真理
TANIMOTO Mari

1986年兵庫県生まれ。東京都拠点。

Born in Hyogo Prefecture in 1986 / Based in Tokyo

京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻卒、

京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。

2011/ 新・陶・宣言 / 豊田市美術館 / 愛知県豊田市

2013/ 黄色地に銀のクマUスーパーホームパーティー / 神戸アートビレッジセンター / 兵庫

2014/ Under 35「谷本真理 個展」 / BankART studio NYK / 神奈川

2015/ 中身のパノラマ / コーポ北加賀屋 / 大阪

2016/ こわすための壺と落ちていく絵 / 波さがしてっから / 京都

Artist's Comment

「『岐阜の陶土を使いたい・ワークショップをしたい・滞在制作をしたい』と希望をだし、マッチングをうけました。岐阜県現代陶芸美術館でのワークショップでは、子供達のパワーがすごくて、あれくらいパワーに溢れた空間を私も作らねば!と思いました」

Title

縫いの造形

The shape of sewing

Artist

中村 潤

NAKAMURA Megu

紙を糸で縫ってキューブと同寸の巨大な紙袋をつくり、キューブの壁と縫い合わせます。そうすることで生まれる不確かな形、縫い目、上部からさす光、糸、運針の感覚、縫う行為が溶け合い、見えているものを通して、身体の少し先にある「記憶」や「経験」を呼び起こします。

The artist has sewn paper together to make a gigantic paper bag with the same dimensions as the cube, then sewn this onto its walls. The resulting uncertain shapes, stitches, light passing through from above, and threads, as well as the sense of the movement of the needle and the actual act of sewing all blend together so that what is seen evokes “memories” and “experiences” a little in advance of the body.









中村 潤
NAKAMURA Megu

1985年京都府生まれ。京都府拠点。

Born in Kyoto Prefecture in 1985 / Based in Kyoto Prefecture

京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。

2011/ゲンビどこでも企画公募2011展 / 谷尻誠賞 / 広島市現代美術館 / 広島

2012/バン・マリー(個展) / ギャラリー SUZUKI / 京都

2014/Art Court Frontier 2014 #12/アートコートギャラリー / 大阪

2014/AMI AMI ～トイレットペーパーを編む～(個展) / 美濃和紙の里会館 / 岐阜

2015/アートの秘密基地展 / 浜田市世界こども美術館 / 島根

2017/めいめいの重なり / アートスペース虹 / 京都

Artist's Comment

「個人的に起こったことと、作品制作を結び付けてみようとした初めての試みであった。技法や素材の持つ『構造』『社会的背景』『個人的事象』をさまざまにつないでいき、作品として成立する方法を今後探っていきたい。

また、これまで一人で大体の作品を制作していたが、初めて二人でないと難しい状況になったのは驚きであり、新しい発見であった」

Title

蘇生するユニコーン

Revive the unicorn

Artist

平野 真美

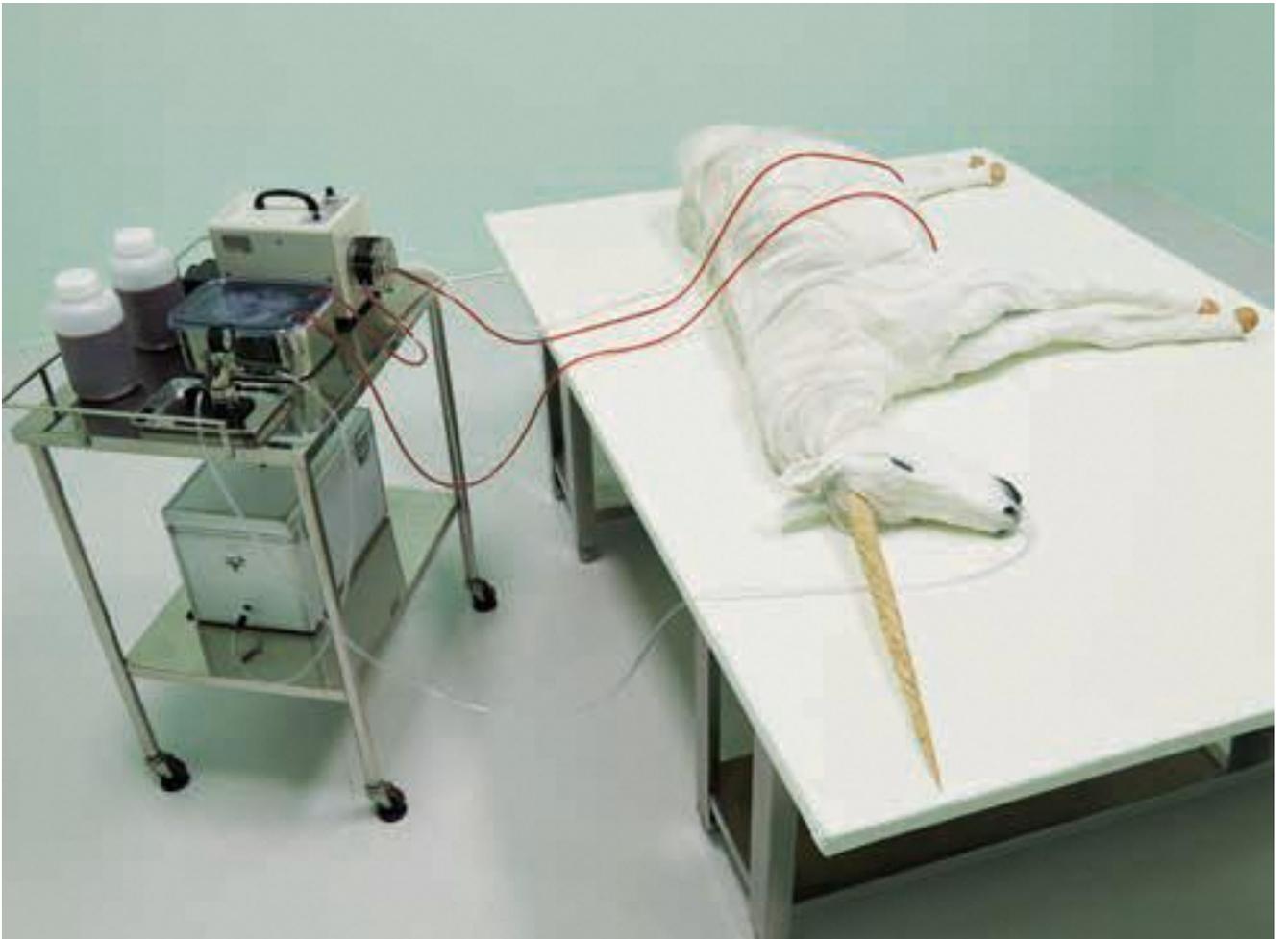
HIRANO Mami

人々の脳内に屍となって横たわる非実在生物を実際に出現させます。骨格・内臓・筋肉・皮膚などをかたちづくり、肺に空気を送り、血液を循環させ、純真さの象徴であるユニコーンに生命を吹き込みます。それは失った夢や希望・幻想を蘇生させる瞬間でもあるのです。

This work brings to life an imaginary animal from where it had been laid to rest as a corpse in the human mind. Creating the forms of its skeleton, internal organs, muscles, skin, and other body parts, pumping air into its lungs, and giving circulation to its blood, it breathes life into the unicorn - the symbol of purity. This also serves as a moment to revive our lost dreams, hopes, and imaginings.









平野 真美
HIRANO Mami

1989年岐阜県生まれ。東京都(2017年4月まで)、岐阜県拠点。
Born in Gifu Prefecture in 1989. Based in Tokyo (by April 2017) ,Gifu Prefecture.

名古屋造形大学造形学部造形学科情報デザインコース卒、
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端藝術表現専攻修了。
2014/トーキョーワンダーウォール公募2014入選作品展 / 東京都現代美術館
2015/REN-CON ART PROJECT 一連茎する現代アートー / 名古屋市芸術創造センター
2015/ 大名古屋電腦博覧会2015/ 名古屋市民ギャラリー矢田

Artist's Comment

「作家としての自分が、自分が目指しているものと比べてどの位置にいるのかが分かり
何が必要なのかを考えるきっかけを得たことが一番大きな収穫でした。また、多く
の方と関わって制作することや、他の出品作家との交流の内に、自分の作品のどんな
部分を特化していくべきなのかを考えることができました。
このコンペではキューブという展示方法が一番の特徴として語られていますが、丁寧
な作家支援も作家にとって大きな特徴だと思います」

Title

モノについて

About an object

Artist

堀川 すなお

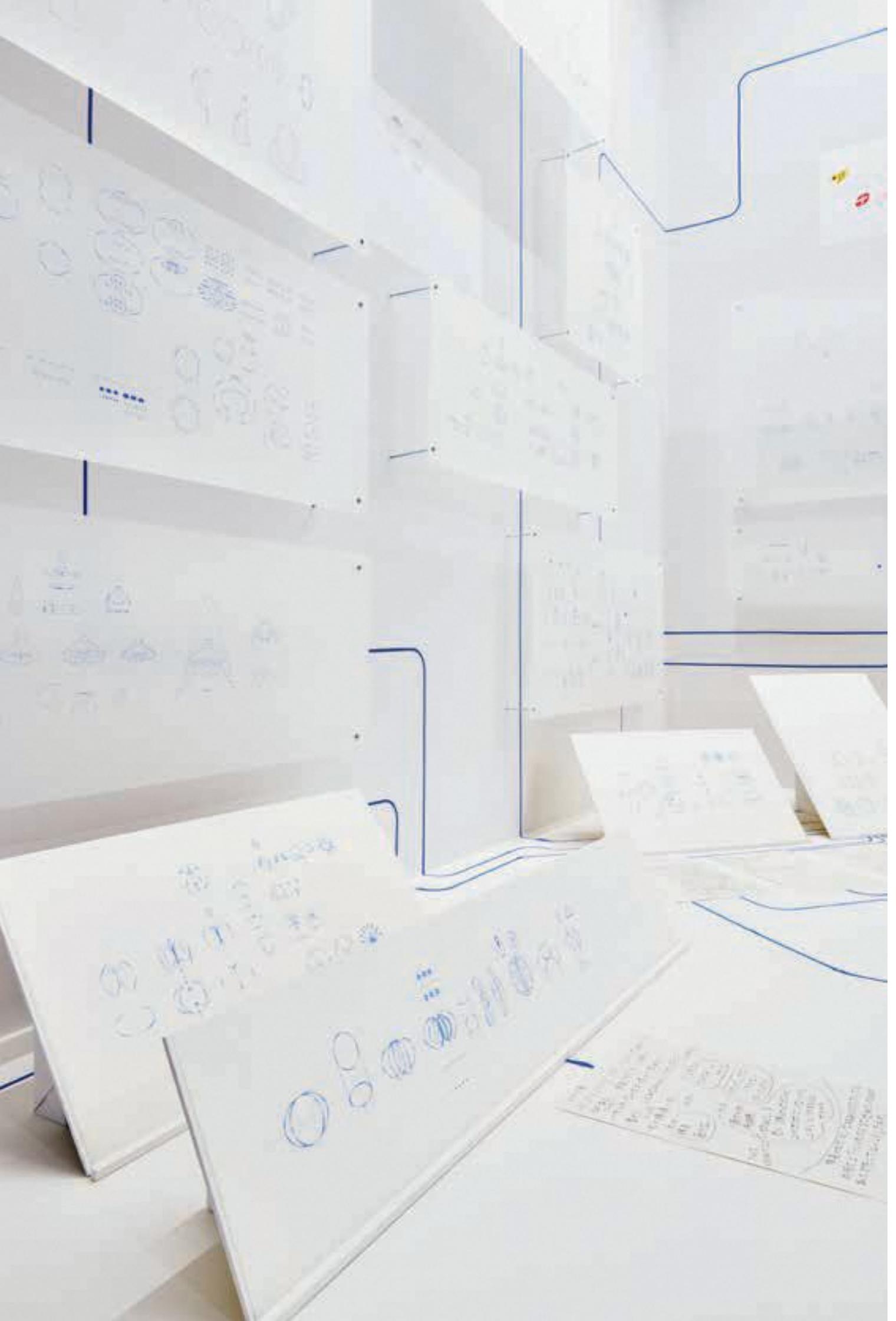
HORIKAWA Sunao

実際に目の前にあるモノと、そのイメージは同じなのでしょうか？ 観察と分析を通じ、言葉からモノの姿を図面のように描き起こす実験的な平面作品を通し、理解や共有のあり方への懐疑を空間全体で提示します。

Are actual objects in front of us and their images really the same? This work presents the artist's skepticism of the concepts of understanding and sharing by means of experimental two-dimensional works depicting the transformation of words into objects in the form of plans, through observation and analysis.









堀川 すなお
HORIKAWA Sunao

1986年大阪府生まれ。大阪府拠点

Born in Osaka Prefecture in 1986 / Based in Osaka prefecture

クーパーユニオン芸術大学留学、京都市立芸術大学美術研究科絵画専攻油画分野修了。

平成27年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてニューヨーク滞在。

2012/VOCA展—新しい平面の作家たち2012/ 上野の森美術館 / 東京

2013/クリテリウム87 堀川すなお(個展) / 水戸芸術館現代美術ギャラリー第9室 / 茨城

2015/群馬青年ビエンナーレ2015 奨励賞 / 群馬県立近代美術館

2015/解釈と行為 SEEING AND PRACTICING(個展) / 大阪府立江之子島文化芸術創造センター Room2 / 大阪

Artist's Comment

「岐阜県高山市で行ったワークショップを通し、人はどのようにモノを見て理解しているかを探りました。ワークショップ後は、子供たちや学校の先生に、子供達自身や先生から見て解釈の違いが言葉や絵にどのように表れているのかを聞き取りを行い、とても良いお話を沢山聞くことができました。とても沢山の発見ができるお話や経験を得たので、まだまだとめきれない部分が多いのですが、制作過程でも展示でも今後、より深く”解釈のメカニズム”を考え作品にしていけるためのいい機会をいただき感謝しております」

Title

透明の対話

Transparent dialogue

Artist

松本 和子

MATSUMOTO Kazuko

フレスコ技法を用いて、時代や社会から影響を受けて彷徨う記憶の断片や気配を描きます。意識の痕跡を昇華させたような光景は、作家にとって他者との共通感覚のようなもの。古典技法を通して、身体や記憶、空間の表現について今日的な可能性を探ります。

Using the fresco technique, this work depicts fragments and hints of elusive memories influenced by different eras and society. Scenes like the sublimation of the vestiges of awareness are for the artist like sensations shared with others. She uses this classical technique to explore the contemporary possibilities of the body, memories and spatial expression.









松本 和子
MATSUMOTO Kazuko

1988年大阪府生まれ。京都府拠点。

Born in Osaka Prefecture in 1988 / Based in Kyoto Prefecture

京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻壁画修了。

2016年から下京渉成小学校(京都)で滞在制作。

2015/2015京展 / 京展賞(最高賞)受賞 / 京都市美術館 / 京都

2016 / 愛好家の面影(個展) / MATSUO MEGUMI+VOICE GALLERY pfs/w/ 京都

2017 / 京都府新鋭選抜展 - Kyoto Art for Tomorrow - / 朝日新聞社賞受賞 / 京都文化博物館 / 京都

Artist's Comment

「『フレスコにはまだ現代的な可能性があるのでは』と探っていた中の入選だったので、続けていく自信ができました。また今回、漆喰パネルの譲渡を試みて想像していた以上に反応があり、今後は最終的に分割して譲渡まで含めて作品とするのも良いかもしれないと思いました。

運営の方々と密に連絡や打ち合わせを重ね、ボランティアや専門家の方々を含め大勢の協力者たちに手伝ってもらったことで完成した作品。これからもっと大きな場で制作をしていくためにも、今までの個人制作の壁を一つ越える第一歩になったと感じています」



Title

庭のほつれ

I'm waiting for the time, when that field is opened again.

Artist

三枝 愛

MIEDA Ai

自身の生まれ育った環境とその変化を追うインスタレーションシリーズ。東日本大震災以降、激減し、椎茸農家や周辺環境の変化を引き起こしてきた原木を、箱の中(キューブ)に一時的にとどめ、展示空間の外側へと意識を開いてゆく場をつくります。

This installation series explores the environment in which the artist grew up, and how it has changed. The artist has temporarily placed logs used to grow shiitake mushrooms, which have been in short supply since the Great East Japan Earthquake, in a box (the CUBE) to spread awareness outside the exhibition space of the changes faced by mushroom growers and their environment since the quake.









三枝 愛 MIEDA Ai

1991年埼玉県生まれ。埼玉県, 京都府拠点。

Born in Saitama Prefecture in 1991 / Based in Saitama and Kyoto Prefectures

東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒、
同大学院美術研究科絵画専攻修士課程在籍中。

2016 / MORPH / 元・立誠小学校 / 京都

2017 / 群馬青年ビエンナーレ2017 / 群馬の森野外展示作品賞 / 群馬

2017 / 石が残っている Will is left / 小金井アートスポットシャトー2F / 東京

Artist's Comment

「作品制作に付随してくる交渉やプレゼンの経験をたくさん与えていただいて、すごく勉強になった。作家支援は、他の公募展との一番の違いだと思う。しかし、応募者の一人としては、美術館内に造られたキューブ内で『小宇宙』と言われても去勢された感じがぬぐえなかった。

実際に参加することが決まって、与えられた箱そのものも、作品と共に育てていける環境をつくりたいと思った。屋外での展示となり、雨風対策や消防法への対応を考えていく中で、事務局をはじめたくさんの方にお世話になり、特に大雪に見舞われながら設置工事を進めてくれた大工さん、初夏の強い日差しの中、作品と鑑賞者の安全を守ってくれた監視員の皆さんには本当に感謝しています」

Title

Conduit (導管)

Conduit

Artist

三木 陽子

MIKI Yoko

触覚は、客観・主観両方を持ち、外部と内部、無意識と意識を結び付ける、純粹で根源的な感覚。自身の手から生まれた陶のオブジェに、それらと相反する概念を持つ工業製品を組み合わせて壁面に張り巡らせ、見えざる世界と見える世界の境界を表現し、身体の内部に眠る無意識を喚起させるインスタレーション。

Touch is a pure, primordial sense that has both objective and subjective aspects and connects the exterior and interior, unconsciousness and consciousness. Ceramic *objets d'art* made with the hands themselves are combined with industrial products with contrasting concepts and arrayed around the walls as an expression of the border between the unseen and seen worlds- in an installation that awakens the sleeping unconscious within the body.





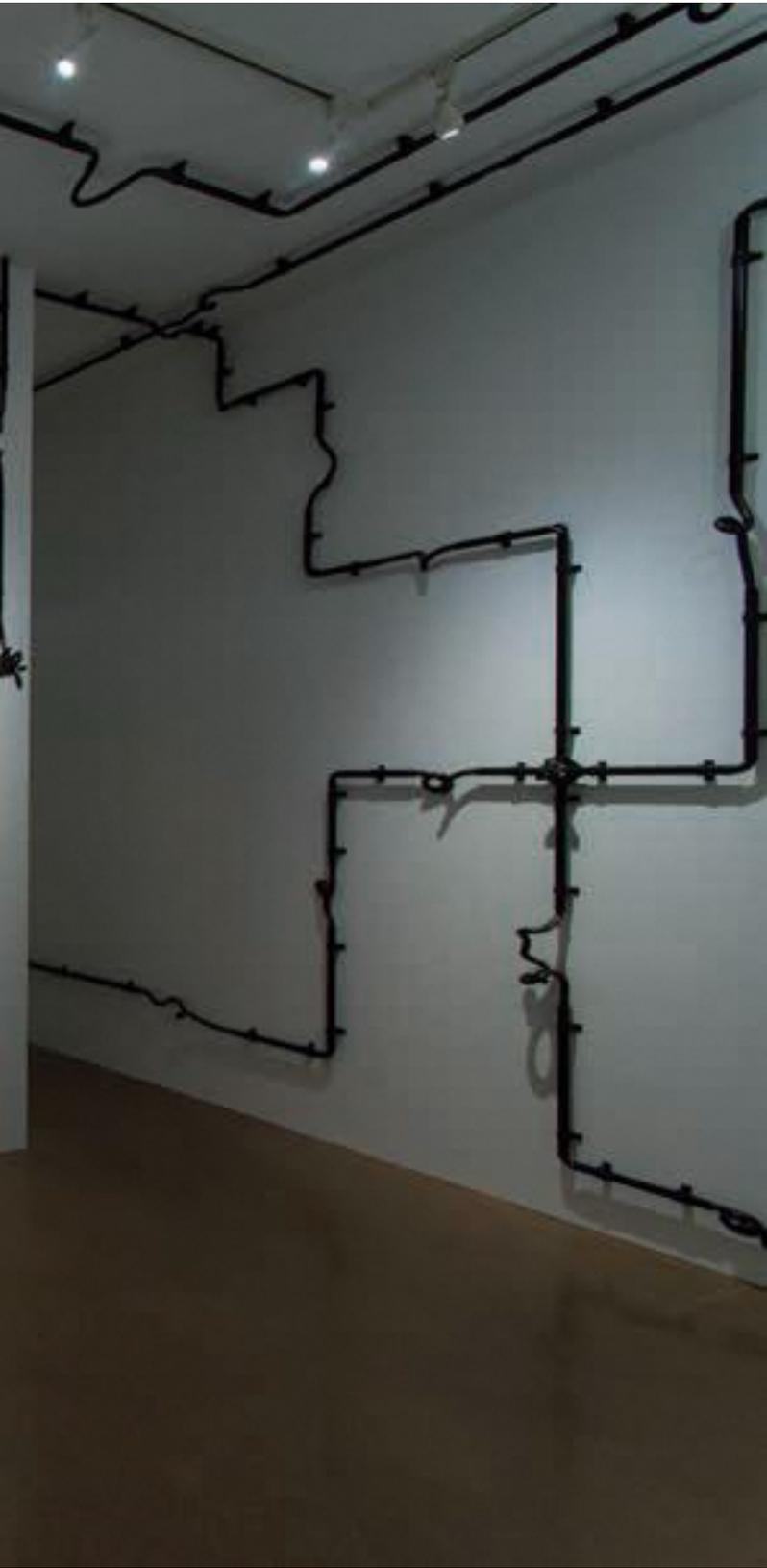


photo: Kaoru Minamino



photo: Kazushi Uehira



photo: Kazushi Uehira



photo: Kaoru Minamino



三木 陽子
MIKI Yoko

1963年兵庫県生まれ。京都府拠点。

Born in Hyogo Prefecture in 1963 / Based in Kyoto Prefecture

大阪芸術大学芸術学部工芸学科陶芸専攻卒、

大阪芸術大学芸術学部芸術専攻科工芸専攻修了。

大阪芸術大学芸術学部工芸科陶芸コース非常勤講師。

1986/ 第1回国際陶磁器展美濃 '86/ 入選/ 岐阜県多治見市

2004/ 公募京都芸術センター2004/ 京都芸術センター/ 京都

2009/ 韓日米青年作家交流展/ 韓国工芸文化振興院/ ソウル

2014/ 台湾国際セラミックス・ビエンナーレ2014/ 新北市鶯歌陶磁博物館/ 台湾

Artist's Comment

「様々な分野や世代差もある作家達の表現が一堂に集まったこの展覧会は非常にユニークでその中で自身の表現の在り方も再確認出来ました。チャレンジして本当に良かったと思います。

そして作家の為に関係者の皆様、各々のプロフェッショナルがご尽力頂いたことに心より感謝しております。沢山の方々に観て頂けたのが、一番の得たものであると感じています。

CUBEの存在は、作品化するのに思ったより難しい点もありましたが、それぞれの作家達の世界観を際立たせ、観客の方々もその作品世界に入り易かったのではないのでしょうか」



Title

DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店

DEMO DEPOT IN THE CUBE Branch

Artist

水無瀬 翔

MINASE Sho

主体性が商品として流通することについての批評的表現。デモ行進用に設計されたロボットの貸出を行う店舗で、鑑賞者は顧客としてデモ用ロボットを無償で借り受けすることができます。

This installation is a critique of the circulation of subjectivity via commercial products. It involves opening pop-up stalls that lend out robots designed to perform demonstration marches, with visitors able to borrow robots for demonstrations free of charge.









水無瀬 翔
MINASE Sho

1984年京都府生まれ。京都府拠点。

Born in Kyoto Prefecture in 1984 / Based in Kyoto Prefecture

京都市立芸術大学美術学部美術科構想設計専攻卒、
情報科学芸術大学院大学(IAMAS)修了。

京都市立芸術大学美術研究科博士(後期)課程メディア・アート領域在籍中。

2013/ 仕草の肖像 - 真似ること、真似ること、真似ること - /N-mark/ 名古屋

2014/ 文化庁海外メディア芸術祭参加事業企画展「Daily Reflections」 /Total Museum
of Contemporary Art/ ソウル

2015/House of Day,House of Night/@KCUA/ 京都

Artist's Comment

「応募から展示まで時間があって、規定やテーマをより深く解釈(肯定的にも否定的にも)するためのプログラムが間にあってよかったかもしれない。

鑑賞者が作品を鑑賞する場に立ち会うことができ、多種多様な反応に巡り会えたのは今後の制作活動を考えるうえで大きな成果となった。

ボランティアは、作品のコンセプトを咀嚼して対応してくださり、作品と鑑賞者をつなぐとても素晴らしい役割をしていただいた」



Title

移動する主体（カタツムリ）

Shifting Self (Snail)

Artist

耳のないマウス

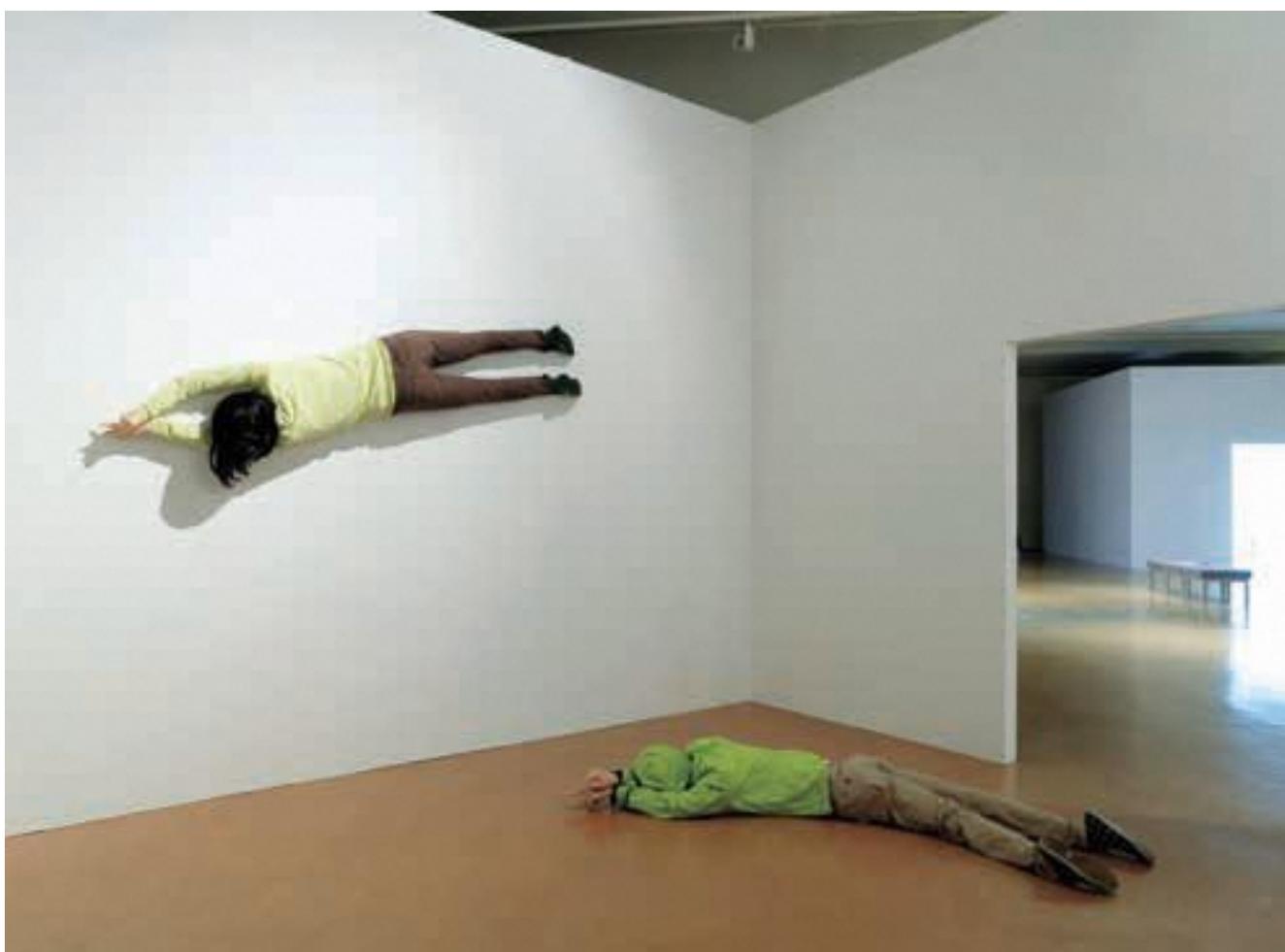
Earless Mouth / Mouse

日常は習慣化された思考から離れば、今よりもおぞましくも滑稽にも、また美しくもなります。手遊びで“カタツムリ”の形をつくり、指だけが動いている手(記号)とそれが指し示す対象との差延により、自明のものとして受け入れている価値観に疑問を投げかけます。

If we can get away from habituated thought, the everyday becomes more gruesome, comic, and lovely. By recreating the shape of the popular hand game in which a clenched fist and two fingers represent a snail, the artists interrogate the “obvious” nature of accepted values through the difference between a hand (symbol) in which only the fingers move and the subject it denotes.









耳のないマウス Earless Mouth / Mouse

2015年結成。長野県、東京都拠点。

Formed in 2015 / Based in Nagano Prefecture and Tokyo

「耳のないマウス」は3331 α Art Hack Day 2015 で結成した、アーティスト松田朕佳、エンジニア石射和明、プランナー雨宮澤、デザイナー石倉一誠の混合チーム。同イベントにて中村政人賞を受賞。

2016/箱のなかに入っているのはどちらか?(個展) /3331ギャラリー /東京

2016/Touch with Skin 内在する触感 /志賀高原ロマン美術館 /長野

2016/ Trans Arts Tokyo 2016/ Trans Arts Tokyo 2016 実行委員会 / 東京

Artist's Comment

「ワークショップをする機会があったのが良かった。初のワークショップなので可能性を感じられるものになって、今後に生かせそうです。

(地元)長野では『岐阜はすごいね、実験的だね、文化的だね、土壌が違うね』と、よく言われました。

制作・展示以外にも作家同士の出会いや運営の方々、審査員の方々とお会いし関わりを持てた事は本当に刺激になり勉強になりました。今後の人生において大きな影響を与えてくれた出来事でした」

Title

Missing matter

Missing matter

Artist

宮原 嵩 広

MIYAHARA Takahiro

鑑賞者は、アスファルトを敷き詰めた空間に裸足で入り、身体で作品を感じ取ります。かつて、人間社会と自然の関係を象徴する素材として捉えられたアスファルト。その象徴性が失われつつある現代において、再びアスファルトを使って、人間と物質の関係を再定義します。

Visitors walk barefoot into a space paved with asphalt to experience the work in a bodily way. Asphalt was formerly regarded as a material that symbolized the relationship between human society and the natural world. As this symbolism is being lost today, this work uses asphalt to redefine the relationship between human beings and materials.









宮原 嵩広
MIYAHARA Takahiro

1982年埼玉県生まれ。埼玉県拠点。

Born in Saitama Prefecture in 1982 / Based in Saitama Prefecture

バンタン映画映像学院特殊メイク科卒、東京藝術大学美術学部彫刻科卒、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修士課程修了。

2015-2016年 カリフォルニア大学パークレー校 GTU ビジティングスカラー。

2013/物質と彫刻 近代のアポリアと形見なるもの / 東京藝術大学美術館陳列館 / 東京都

2015/missing matter sculpture's dogma (個展) / 川口アートファクトリー / 埼玉県

2017/SIDE CORE -STREET MATTERS-/BLOCK HOUSE/ 東京都

Artist's Comment

「ジャンル不問で様々な作家があつまったのは良かったと思います。企画展示の形式をとるのであれば、展覧会を最終的にどこへ向かわせるのか批評性を煽るフックは必要で、審査員や作家以外の人を呼び賛否させるなど多層的な展開があってもよかったのではないのでしょうか。一つの展覧会を作り上げる以上必要なまとまりではありますが、入選者決定以後うちに向かってしまった感がありました。今後もAAICの過去入選者などをからめるなど、県などの足かせを外した純粋な企画を期待しています」

Title

cranky wordy things

cranky wordy things

Artist

ミルク倉庫 + ココナッツ

mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts

外部から得たと思っていることは、本当は、自らの内から呼び覚まされたものなのではないでしょうか。人の寝入りばなの実験の記録映像と、勝手に動く道具や物で構成された空間が、感覚を揺さぶり、物や身体に対する認識を変えていきます。

What we think has come from the outside may actually have been awakened from within us. Constructed from experimental video recordings of people going to sleep and tools and objects that move by themselves, this space stirs up our perceptions and changes our awareness of objects and our bodies.









photo:Azumi Kajiwara

ミルク倉庫+ココナッツ mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts

2015年結成。東京都拠点

Formed in 2015 / Based in Tokyo

6名のアーティストによる「ミルク倉庫」とアーティストデュオ「ココナッツ」によるユニット。

[ミルク倉庫] 2009年結成。メンバーは宮崎直孝、瀧口博昭、吉田和司、坂川弘太、篠崎英介、梶原あずみ。

[ココナッツ] 2015年結成。メンバーは松本直樹と西浜琢磨。

2015/ ミルクイースト パブナイト -イン・タヴァン・エールハウス/milkyeast/ 東京

2016/3331 Art Fair 2016 -Various Collectors Prizes-/アーツ千代田 3331/ 東京

2017/「家計簿は火の車」 3331 ART FAIR recommended artists exhibition/アーツ千代田 3331/ 東京

Artist's Comment

「これまで取り組めなかったタイプの作品に、じっくり取り組むきっかけを与えてもらったこと、美術館での展示や、外部の施工業者との制作が経験できたことも良かった。また、担当学芸員の方から様々なお引き合わせをして頂けたことにも感謝している。ボランティアには、搬入等に関して、補助してもらえて助かったし、作品説明のためのヒアリングなど、積極的に話しかけて頂けて嬉しかった。ボランティアはじめ、他作家やテクニカルアドバイザー、ボランティアとの交流会などがもう少しあっても良かったように思う」

Title**Mimesis Insect Cube**

Mimesis Insect Cube

Artist**森 貞人**

MORI Sadahito

昆虫の擬態をヒントに、ムシ型オブジェを制作し、時代の漂流物となった「ガラクタ」に命を吹き込みます。身体のゆくえを問う丈六空間で、人は、無数のムシが解き放たれたキューブの中央に座し、モノに残る思念を感じ取ります。

Taking a hint from insect mimesis, the artist creates insect-shaped *objets d'art* by breathing new life into thrown-out pieces of scrap. Visitors can sense the thoughts that are still inherent in these objects as they sit in the center of a cube scattered with countless insects, creating a space of the same dimensions as the stature of the Buddha in which to question the whereabouts of the body.









森 貞人 MORI Sadahito

1950年愛知県生まれ。愛知県拠点。

Born in Aichi Prefecture in 1950 / Based in Aichi Prefecture

イラストレーターとしてEXPO'90（国際花と緑の博覧会）、マレーシア航空カレンダーなどを制作。現在はCG・立体オブジェとジャンルを越え活動中。

2004/ 空想昆虫博物館（個展） / 国際デザインセンターギャラリー / 名古屋

2005/ 第9回文化庁メディア芸術祭 審査委員会推薦作品 / 文化庁 / 東京都

Artist's Comment

「アートというジャンルで、作品を発表していく自信となった。今回の企画自体が新しく画期的だったので、継続が重要だと思います。社会に対するアートの位置に変化を与えられるかは、今後の問題だと思う。テクニカル・アドバイザーの佐野誠氏と考え方として共通する部分も多くあり、やり取りや制作がとても楽しかったです。耳のないマウスの松田さんが個人で参加している長野市での展示が、かたつむりがテーマだったので、お誘いいただき、数点、出展することになりました。AAICのご縁に感謝です」



Title

THE MAUSOLEUM 一大霊廟一

THE MAUSOLEUM

Artist

安野 太郎

YASUNO Taro

ケーブルで繋がれた12台の自動演奏装置は、エネルギーが供給され続ける限り、永遠に情報を交換しながら「ゾンビ音楽」を生み出します。それは、人類が減じた未来で、永久に人類を送葬し続ける霊廟で鳴り響いている音楽なのです。

Twelve automatic performance devices connected by cables will continue to exchange information for ever, and to create “zombie music” for as long as their energy supply is continued. This is the music that would play in the mausoleum to eternally humanity’s funeral rites in a future where humankind has perished.







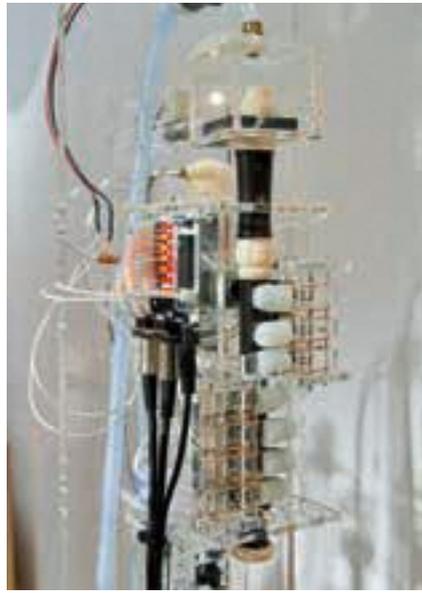


photo:Yasunori Ikeda

安野 太郎 YASUNO Taro

1979年東京都生まれ。埼玉県拠点。

Born in Tokyo in 1979 / Based in Saitama Prefecture

作曲家。ブラジルと日本のハーフ。東京音楽大学作曲科卒、情報科学芸術大学院大学修了。

代表作にゾンビ音楽。Pboxxレーベルより、2枚のCDをリリースしている。

2013/ 第17回文化庁メディア芸術祭 アート部門 審査委員会推薦作品 / 東京

2015/ フェスティバル/トーキョー15 (ゾンビオペラ「死の舞踏」) / にしすがも創造舎 / 東京

2017/ 大霊廟II / BankART studio NYK / 横浜

Artist's Comment

「作品作りというのは賞レース云々や人からの評価とは本質的には関係がないと思いつつも、賞をとるつもりで制作して熱くなってしまいました。結果を待つ間はすごく緊張した(笑)。イベントの時、企画委員が、『わけのわからないもの』と僕らの作品を評しているのを知り、逆に、『絶対に彼らが認めざるを得ないものを作ろう』と奮起しました。長期に渡って展示する作品は初めてで、ピンチが何度かありましたが、その都度、やりとりしながら解決をしていきました。今度横浜でやるイベントに耳のないマウスのメンバーも出演者として参加するなど、AAICを通じた作家同士のつながりもできました」



Chapter

2



展評

Review

キューブのゆくえ

島 敦彦(金沢21世紀美術館館長)

今回の展覧会は、厳密には立方体ではないものの、大きな箱であるキューブ(4.8m×4.8m×高さ3.6m)を応募者それぞれがどう受け止め、作品として展開するのか、その独自性を問われた公募展である。キューブを、いわゆる「ホワイトキューブ(装飾を排し、均質な光に満たされた真っ白な純粋空間)」にとらえるのか、その枠組み自体を作品の一部に取り込むのか、そのアプローチの仕方にさまざまな違いが見られた。その多様性は、多彩な審査員の目の反映とも言えるし、同時代の表現の縮図とも言えるだろう。

入選作15点のうち、屋外に1点、館内の多目的ホールに1点、照明を落とした展示室に7点、明るい展示室に6点と分けて展示された。

暗い展示室では、キューブの重厚な存在感を気にせず箱の内部のみに集中して鑑賞できる工夫がなされた。というよりも、作品の性格が暗闇を求めたのである。たとえば、佐藤雅晴の「HANDS」はアニメーションと実写を巧みに混在させた秀逸な映像で33台のiPadから漏れるささやかな音の集合は、作者も語るように巨大なスピーカーの箱となって暗闇に響いていたし、平野真美の「蘇生するユニコーン」は、存在しない動物の命を生命維持装置で繋ぎとめるという荒唐無稽とも思われる物語だが、観客はまるで薄暗い病院の通路を抜けて集中治療室を訪ねる見舞客のような気持ちにさせられたはずだ。三木陽子の「Conduit(導管)」や耳のないマウスの「移動する主体(カタツムリ)」も、闇の中で妖しい魅力を発散していた。

一方、明るい部屋では、キューブの内と外とが関連づけられた作品を中心に、箱それ自体の存在が印象づけられた。特に、ミルク倉庫+ココナッツの「cranky wordy things」は、題名が示すように不安定で、おしゃべりなモノたちの競演であると同時に、寝入りばなの人たちの映像が何ともユーモラスかつ不穏に融合して、観客の心身を揺さぶった。また、松本和子の「透明の対

話」は、フレスコ画という壁に依存する技法によってキューブの壁と相対し、中村潤の「縫いの造形」は、刺繍によって大きな紙とキューブの壁とを大胆に関係づけた。

多目的ホールに設置された安野太郎の「THE MAUSOLEUM-大霊廟-」は、リコーダーを自動演奏させるとどこか懐かしさを覚える原初的な機械で、音の響きに滑稽さと荘厳さとが同居していて素直に楽しめた。その点では、明るい部屋に展示された水無瀬翔の「DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店」は、デモをする液晶パネルのその覚束ない足取りが、ビデオ・アートの創始者ナムジュン・パイクが1963年に路上で動かした初期ロボットを想起させ、メディア批評の原点を見るようだった。さらに、屋外に設置された三枝愛の「庭のほつれ」は、東日本大震災後に入手できなくなった福島の椎茸栽培用の原木にまつわる作品で、素っ気ないベニヤ板の箱の一角にできたてのおがくずを設えた。外見だけ見ていると、東京電力第一発電所の建屋のミニチュアを見ているような錯覚に陥り、展覧会の導入部として妙に印象に残った。

公募展は、時代を映す鏡でもあり、継続してこそ意味がある。次回以降も大いに期待したい。

清流の国からの問いかけ

住友文彦（アーツ前橋館長、東京藝術大学准教授）

中村潤の《縫いの造形》、耳のないマウスの《移動する主体（カタツムリ）》、森貞人の《Mimesis Insect Cube》、安野太郎の《THE MAUSOLEUM-大霊廟-》を見るだけで私は十分にこの新しい芸術祭を見に行った価値を見いだせる。もちろん、他にも優れた受賞作品と一緒に見られることの意味は大きいし、審査員の数や賞金の額に現れる本気度もこの企画を魅力的なものにしている。実際にはじめて送られてきた案内を見たときのインパクトは大きかった。そのいっぽう会場で、個人的な記憶が折り畳まれた細い線を視線で迎えること、見ることとの不確かさによって心が揺さぶられること、繰り返される日常のなかに創造性を見いだす喜び、それから身を置いた空間自体がまるで生き物のように変容する不気味さを先の4作品から感じ取った記憶は今もまだ残っている。

つまり、大規模な展示事業であればあるほどひとつの作品は小さな構成要素になってしまうが、展示のキューブを丁寧に配置してそれを使う展示は思いのほか各作家と向き合う鑑賞経験を可能にしていたように思える。芸術愛好家たちはじつに熱心にどの地域の美術館にも芸術祭にも出かけるが、その事業の企画性ではなく個別の作品を見る経験を記憶に刻んで持ち帰るものである。

実際、現代は世界的な規模で都市が文化による競争に駆り立てられている時代である。それが植民地主義や経済競争よりもましなのは、はっきりとした勝ち負けが生まれにくいところだ。しかし、そのため本当に独自性のある文化戦略を持っている都市が多いわけではない。その点で岐阜県が県展を全国公募によって県外への発信性の高い事業にしたのは驚いた。戦後の文化振興策として社会教育的な目的を持っていた事業が大きな変わり目を迎えているのは岐阜だけではない。そこには人類共通の財産を扱う美術館の役割や自治体の境界線とは一切関係ない文化の有機的な交流からの問いかけ、そして素人と専門家を切

れ目のないグラデーションではなくはっきりと区別させ近代的な芸術家像を確立させようとする傾向とが見え隠れする。つまり、これもまたグローバリゼーションと言われる波のなかから生まれた芸術祭なのである。この不可逆的な大波を浴びた後、あえて元の価値観に立ち戻るのか、うまく波乗りをこなし新しい芸術振興策が成果を結ぶのか。芸術祭やアワードが一定の認められた価値を生み出すのには最低十年はかかると思う。目的意識がはっきりせず、中長期の視点が欠落した事業は当然成功しない。

私たちは脱成長時代の新しい芸術振興の目的をどのように設定すべきなのだろうか。おそらく、そのような問題意識を持つ人たちが岐阜県の外からも数多くこの事業の行く末を注視しているのではないだろうか。ぜひ、今回の成果をもとに次回へ向けて岐阜に留まらない社会の転換期を意識したメッセージを生み出してほしいと願う。

県展のゆくえ—岐阜モデル

中村政人（アーツ千代田3331ディレクター、東京藝術大学教授）

全国の県展は、今後どのように拡充していくのであろうか？
県という行政区域でとどまっているのではなく新たなビジョンを掲げ、全国区で県展を改革していく時期に来ているのではないだろうか？

私論だが、従来の県展の領域を遥かに超えているのが2つある。1つは、「山口県美術展覧会」と岐阜県における本展である。

山口県美術展覧会の作品応募の規格には、「搬入・展示が可能なものであれば、形式・寸法・重量・材質などは問いません。」と記載されている。どれだけ大きくても、重くても、扱いにくい材質でもOKなのだ。実際に審査員を何回かさせていただいた事があるが、トラック数台分の廃材の山を搬入していたり、パフォーマンスをし続ける作品であったりと斬新な作品もあれば、萩焼の壺や書が大量に並んでいたり従来の作品も多く出品されている。しかも県外からの応募もOKなので現代美術系のアーティストも狙って応募する。ユニークなのが審査方法。審査員が〇×の札を持ち公開で作品一点一点の前で、瞬間に〇×を上げて決めて行く。3人の審査で2つの〇が上がると二次審査に進む。巨大な作品でもバツサリと落選する。応募規定が自由な分、審査も遠慮なしに目の前で厳しく審査していく。大賞には、美術館の一室での個展の機会が与えられる。ちなみに私が審査した時、優秀賞になったのは、今年のヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表の岩崎貴宏さんだった。山口の県展は、この何でもありの応募規格に変えたことにより、若手から常連作家の意識改革が進み明らかに成果を出してきている。

そして本展の「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE」展である。前身の岐阜県美術展は、平成27年度で終了し2つの方向に分かれた。1つが本展（3年に一度開催）であり、もう一つが「ぎふ美術展」（残る2年に開催）である。あいちトリエンナーレが隣県で3年に一度開催されるという状況もあり、岐阜県としても新しい表現をするアーティストが増えてきたことや

県内の地元作家だけではない交流人口を増やしていく必要があったと思われる。そして、関係者らが強いビジョンにより新事業をけん引していった。本展の公募規定や審査方法を見ると、特徴的なのがキューブの設定である。ホワイトキューブから来ているキューブである。作品を最もニュートラルに見せ、その空間にどんなモノを置いたとしても余計な情報を与えることなく作者の表現行為を純粹に見せる白い空間である。既存の美術館の壁面は、作家が直接描いたり加工したりと自由にアプローチができない。その理由もありこのキューブを前提に作品プランを組み立てるという事は、アーティスト側から見て自由度が高く制作意欲が沸きチャレンジしやすい。実際に入選した作品は、キューブに窓を開けたり、ペイントしたりと相当自由度高く内側と外側を上手く使っている。また、アーティストへの支援も大きな特徴だ。入選者には、制作支援として、制作費50万円、展示に関するテクニカルな相談、制作に関しての外部協力者の紹介、制作サポートのボランティアスタッフの派遣もしてくれる。至れり尽くせりである。しかも、大賞は500万円。第一線を走る豪華審査員とくるとチャンスを狙う若手アーティストにとっては、そそられる条件ばかりである。近い将来、本展から出てくる次世代のトップアーティストに期待したい。

アーティストの時代を見つめる視点や表現衝動をいかに伝えることができるのか？ そのためには、県展で裾野を広げ、全国、海外へとその先に進む道をつくらなくてはならない。全国の県展は、この岐阜モデルのように多様な価値観を受け止め進化していく方向を見定めてほしい。

清流のさざめきから大きなときめきへ

馬場駿吉 (名古屋ポストン美術館館長、美術評論)

近年、美術展という従来の概念も多様化を続け、現代美術を総合的に展示するトリエンナーレと名付けた芸術祭が各地に次々と誕生している。

それぞれ特徴を持たせる工夫がこらされているものの、作家たちに新しい作品発表の場を用意し、それを一般の市民にも広く共有してもらおうという純粋な目的ばかりではなく、地域起こしなどの意図が露骨で、いささか食傷気味な一面も感じられるようになって来た。そのような状況の中で、本年4月から6月にかけて、岐阜県美術館を会場として創設、開催された「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」は清澄な自然環境がほどよい都市空間に溶け込むこの地域の特性を大切にしつつ全国的に公募の扉を開いたあり方が、とても新鮮に感じられた。先端的、実験的な志向を持つ作家に経済的な支援をする賞金が用意されているところにも、新しい創造性を刺激しようという目的意識を明確に見ることが出来る。また、選考委員も美術専門の他に、身体表現、作曲、哲学、文学などの最前線に立つ多彩な表現者が加わり、様々な観点から審査が進められたことも特記すべきことだろう。

今回あらかじめ設定されたテーマは「身体のゆくえ」。与えられた展示スペースは4.8m×4.8m×3.6mの白い壁を持つ方形の空間。応募790点から選ばれたのは15作品(13作品:個人、2作品:グループ)すべてがインスタレーション作品だった。さて、ここであらためて今回のテーマが「身体のゆくえ」とされたことにふれておこう。美術は発祥の原始時代以来、現代に至るまで、何らかのかたちで、身体に向き合ってきたことは美術史に照らしても明らかである。だが、今や人工知能をはじめ、様々な臓器もその機能を代用する人工装置が開発され、さらに万能細胞による再生医療もいよいよ本格化しつつある。従って自己の認識、生死の概念さえも、もう一度見直す必要に迫られる事態となった。ゴーギャンの代表作に「我々はどこから来

たのか、我々は何者か、我々はどこにゆくのか」があるのは周知のとおりだが、今回のテーマは、その永遠の課題にまたあらためて立ち戻ることを促すものと言えよう。選考委員の田中泯さん(ダンサー)は選考の所感の一端として「不在や不明にそそぐ愛こそが表現の基本だ」と述べているが、入選・受賞作家たちのそれぞれの作品にも定かならざる身体のゆくえを追う眼差しが感じられ、その行為に愛を注いでいる姿を読みとることが出来た。今回選出された作家たちも表現の基本ラインには乗っているのだ。今後さらに清流のさざめきを大きなときめきに変える存在となってほしい。

医療の現場に永年立ち合い、身体そのものの実体を身近にしてきた筆者には佐藤雅晴《HANDS》、谷村真理《この部屋とダンス》、平野真美《蘇生するユニコーン》、三木陽子《conduit》、耳のないマウス《移動する主体》などに特段の魅力を感じた。





Chapter

3



記録

Document

募集から審査までの記録



I. 募集規定 (簡略版)

1. 募集期間

2016年4月11日(月)～7月8日(金)

2. テーマ：「身体のゆくえ」

社会を写す鏡である現代アートは、コンセプト、素材、表現方法などあらゆる要素について既存の枠を取り払い、複雑化、多様化の一途をたどっています。アートはあらゆる可能性を追求すべきですが、その展開のあまりの速さ、広さに、多様化そのものが目的化されているのではないかとさえ思われます。今一度、人間そのものである自らの「身体」に着目し、その中に何を発見し、何が生まれるのかを問いたいと考えます。そこで生成される情熱や才能が、キューブという空間を通して発露される結晶体(作品)を、大いに歓迎します。

3. 応募資格

Art Award IN THE CUBE 2017の趣旨を理解し、選考された場合には作品の完成まで責任を持って取組める方(個人、グループ、年齢、国籍を問いません)

4. 作品規定等

作品は、未発表のものに限ります。1名・1グループにつき1作品までとします。

5. 作品寸法等

4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)の空間(直方体のキューブ)内で展示できること

6. 審査料

1点につき5,000円(税込)

7. 賞・賞金

- ・1次審査入選者
賞金50万円/15作品程度(作品制作時に支給)
- ・制作された入選作品のなかから以下を選出

大賞	賞金	500万円 / 1点
審査員賞	賞金	100万円

II. 募集説明会

審査員をゲストに、東京・名古屋・京都・岐阜でトークイベント/説明会を開催した。各会場とも、想定以上の人数が詰めかけ、さまざまなチャンスが多い都市部においても、岐阜で始まる新しいアートアワードへの注目と期待がうかがえた。

開催記念トークイベント in 東京

2016年3月27日
会場：3331Arts Chiyoda, 参加者：約120名

小説家の高橋源一郎(AAIC2017審査員)、岐阜県美術館長の日比野克彦(AAIC2017企画委員)、AAIC企画委員長の桑原鏡司が、第1回のテーマ「身体のゆくえ」をキーワードに、トークセッションを行った。後半は、Art Award IN THE CUBE 2017の応募の条件や方法、多彩な顔ぶれの審査員や賞金等について発表し、4月の公募開始に向けて、機運を盛り上げた。

Art Award IN THE CUBE 2017 開催記念トーク in 京都

2016年6月5日
会場：MTRL KYOTO, 参加者：約80名

美術家の中原浩大(AAIC2017審査員)を迎え、第1部では、身体刺激から呼び起される感覚に焦点をあてた中原の作品制作についてトーク。第2部は、展覧会施工技術者でスーパーファクトリー代表の佐野誠(AAIC2017テクニカルアドバイザー)が加わり、IAMAS教授の安藤泰彦(AAIC2017企画委員)が聞き手となって、作品制作・施工の技術支援が現代美術の水準を上げていくことが語られた。第3部では、公募要項の説明が行われた。

Art Award IN THE CUBE 2017 開催記念トーク in 名古屋

2016年5月28日
会場：Minatomachi POTLUCK BUILDING, 参加者：約100名

画家のO JUN(AAIC2017審査員)を迎え、第1部は、O JUNの公募展出品にまつわるエピソードや創作について、名古屋芸術大学教授の高橋綾子(AAIC2017企画委員)が聞き手となってトーク。第2部は、名古屋の港まちをフィールドにしたアートプログラムに携わる、吉田有里・野田智子・青田真也が加わり、「アーティストはサバイブする」をテーマにディスカッション。第3部では、公募要項の説明が行われた。

会場見学・説明会 in 岐阜 アートの新たな源流を求めて

2016年6月19日
会場：岐阜県美術館, 参加者：70名

情報科学芸術大学院大学[IAMAS]教授で作曲家の三輪眞弘(AAIC2017審査員)が、「身体こそ“わたし”を証明する唯一のものではないか」と投げかけた。第2部では、屋外展示場の実寸大フレームを見学。第3部は実際にCUBEが設置される展示室を見学。「1980年代に設立された地方美術館の現代美術との関わり方からも、AAICに期待と関心を寄せています」との副館長のメッセージに、参加者は思いを新たにした。

III. 応募状況

海外9カ国を含む各地から、想定を大きく上回る790件の応募があり、全体の67%を20～30代が占めた(平均年齢36.4歳)。新鋭作家の年代を中心としつつも、10代から70代まで幅広い年齢層が応募しており、ジャンルが限定されたコンペや従来型公募展の枠組みから自由になったアワードが歓迎されたことがうかがえる。

地域

1. 東京都	26.3%
2. 愛知県	12.5%
3. 京都府	9.1%
4. 岐阜県	8.0%
5. 神奈川県	7.1%
その他(国内)	34.7%
その他(海外)	2.3%

年代

19歳以下	0.6%
20～29歳	31.3%
30～39歳	36.1%
40～49歳	17.7%
50～59歳	8.6%
60～69歳	4.9%
70歳以上	0.5%
不明	0.3%

IV.1次審査

2016年8月1日
会場:ソフピアジャパン(大垣市)

予想を超える応募数に、審査員たちは、「ぜひ全ての応募に目を通したい」と、急ぎよ全企画書を事前審査。推薦する作品企画を一人50~80件程度選定した。

一次審査当日は、7人の審査員全員が集結。広い会場には790件全ての企画書が並べられた。事前に審査員が推薦した企画書には審査員ごとに色分けしたシールが貼られ、シール付きの企画書を中心に、映像、マケットもあわせ審査した。なお、

美術館内での展示において調整が必要なプランや実現可能性に検証が必要なものは、別途目印を主催者がつけておいた。

名前入り付箋(一人15票)による第1回投票で64件に絞られ、続く投票と厳正な審査を経て、15の作品企画が入選となった。なお、1次審査を通し、応募者の名前・略歴等は伏せて実施した。

V.2次審査

2017年3月28日
会場:岐阜県美術館(岐阜市)

審査員は、まず、作品鑑賞を行って、評価記入シートに大賞・審査員賞推薦作品をチェックした。次に、各審査員の推薦作品をホワイトボードに集計・掲示し、それを見ながら議論を行った。以下は、各審査員のコメントの抜粋である。

0 JUN 「寸法の限定に作家がどう反応したのか、そこを見たい」

大樋 「アートとは自分にとってなんなのかということを再度自覚して、コンセプトだけで考えないようにして、決めなければ」

高橋 「規定を守ることと、作品が良ければそれでよいという二つが、相反するときがある。個人的には規格を超えたものも出てきてほしい。全体にキューブの表現、身体のゆくえ、作品の良さがバラバラ。各審査員がどこを重要視するのかという話になる」

田中 「どんな条件でも感覚が開かれるのがプロフェッショナルだ。テーマ『身体のゆくえ』に、桁外れの広がりがあると思っていたが、『私の身体』というものが多かった印象。具体的な身体を扱っているものは、追求が甘いように感じた」

中原 「キューブという空間をまったく意識しない制作が、作品にマイナスになるとは限らない。ルールをどう扱ったかはそれぞれで、それが『どのように印象づけられたか』だ」

三輪 「500万円を誰に渡すのか、という観点も必要(アーティストの育成という目的もある)」

鷺田 「『身体のゆくえ』『キューブ』を別個のものと考えず、その二つをどのように重ねあわせて冒険させているかで評価をしたい」

議論を経て、15作品から一人1票で投票し5組が残った。票の入った5組を対象に、一人2票で再投票し、票数が突出して多かったミルク倉庫+ココナッツが大賞に決定。次に、各審査員がそれぞれの審査員賞を決定した。

■ 作家支援

Art Award IN THE CUBE 2017 では、これまでの実績を問わない審査方法で、新しい才能を発見することができた。一方で、1次審査を通過した15組の作家は、アイデアや試作の段階から、もう一步踏み込んだ作品制作と完成度の高さが問われる。

AAICでは、キューブのスケール感や構造、美術館展示や法令に伴う制約、プランの実現化において、困難を感じる作家の制作をさまざまな面から支援した。また、岐阜産の素材や、現地取材、滞在制作、教育プログラム経験の機会を作るなどのコーディネートを行った。

1. 入選者には制作費を入選賞金(50万円)として支給
2. 作品制作・展示に関わる技術的な相談事への支援
(テクニカルアドバイザー、ファクトリチーム、学芸員によるサポート)
3. 出品者の作品制作・展示に関わる外部協力者(岐阜県内企業・団体など)の紹介等
4. 岐阜県美術館での作品設置に関わるボランティアの制作補助

2016年9月28日、10月1日、10月15日、美術館見学会

入選作家を5組ずつ岐阜県美術館に招き、企画委員からの開催意図説明、美術館見学、ファクトリーチームとの面談、事務局との協定等の確認などを行った。特にキューブ設計に関わる打ち合わせや、作品制作における課題のヒアリングでは、技術者、テクニカルアドバイザー、学芸員とイメージ共有を丁寧に行った。

2016年10月13日 岐阜大学応用生物学部獣医学科・愛知木曾馬牧場の見学

平野真美〈蘇生するユニコーン〉から寄せられた、「馬や畜産の専門知識を有する大学や機関からのアドバイスがほしい」という相談に対応。科学者・牧場主とアーティストの対話は、哲学的な問いも含み、科学・社会学・芸術などの異なった文化や思考が結びつく時間となった。



2016年10月21日 佐野誠（AAICテクニカルアドバイザー、スーパーファクトリー代表）のテクニカルアドバイス

耳のないマウス（移動する主体）から、“手”の素材と関節部の処理について、また、這う人形の動きの補正について相談。佐野からは、豊富な経験と専門知からのアドバイスがあった。「考えて止まるよりまず作れ」という佐野の激励に、作家としてユニークな感性をもつ松田が触発されていった。



2016年11月28日 カネ利陶料（瑞浪市）の見学、多治見工業高等学校での滞在制作

谷本真理（この部屋とダンス）から寄せられた、「美濃産の陶芸粘土を使いたい」「滞在制作をしたい」という二つの相談に対応。生産者を訪ねて原料を知り、ワークショップで5種類の美濃産粘土を調合することになった。子どもたちがワークショップで使ったあとの陶土を再利用し陶芸の専門機関でAAIC出品作を制作する中で、釉薬を使うという、谷本にとって初めての作品が生まれた。



2016年12月8日 撮影協力

水無瀬翔（DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店）で展示されるロボットの「顔」のモデルについての相談に対応。十数人の職員が協力し、iPadで再生する顔の映像を岐阜県庁で撮影。「肖像権使用同意書」についてもアドバイスを行った。



2017年6月初旬～15日 漆喰パネル譲渡のプランとコーディネート

松本和子（透明の対話）と、作品の撤去やAAICのあとの展開を相談していくなかで、「漆喰パネルは、茫漠とした美しさや質感がある。大量すぎて全ての保管はできないが、今後再び、このような大規模作品を作る機会はないであろう。破棄したり作家の手元で永遠に日の目をみないよりも、誰かの元に残ったら」と思いで一致した。また、剥離と記憶を主題とする作品の断片が誰かの手元に残っていく、というもふさわしく、パネル譲渡のコーディネートを行ったところ、多くの希望者が現れ、松本作品がこの地に残ることとなった。

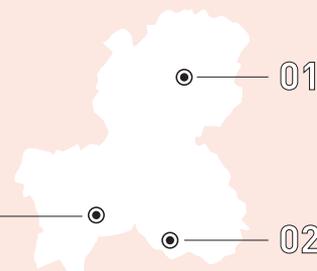
上記のほか、柴山豊尚（ニョッキ）の鏡の素材と張り方のアドバイス、三枝愛（庭のほつれ）のキューブプランに伴う建築基準法や消防法との調整、宮原嵩広（Missing matter）のアスファルト設置に際して発生した匂いのダクト強制排気などの対応を行った。

■ 関連プログラム

Art Award IN THE CUBE では、作品制作や作家育成など、様々な面から作家をサポート。その一環として、リサーチを兼ねるワークショップやトークイベント等を行った。会期中には、作家が作品や作品コンセプトを伝えるワークショップやイベント、審査員の講演会、ボランティアによる活動、学芸員解説などの関連プログラムを実施。また、作家インタビュー動画などにより、鑑賞・参加や作品情報について多くのバリエーションを設けた。

プレワークショップでは、飛騨圏域・東濃圏域で入選作家のワークショップを実施した。県内遠隔地の子どもたちが、作家との交流を通して、現代アートの発想や表現を体験した。

ART AWARD
IN THE
CUBE 2017



01

プレワークショップ - アートの手ざわり -
堀川すなお
「もの、どのように感じてる? 伝わってる?」

日 時 | 2016年12月17日
会 場 | 飛騨・世界生活文化センター(高山市)
講 師 | 堀川すなお
参加者 | 12人

中のモノが見えない状態にした箱の穴のなかに手を入れ、中のモノを触って分かったことを言葉で書く。次に、となりの人と紙を交換し、言葉どおりに、絵に描く。最後に、自分の書いた言葉がどう伝わったのか、想像で絵を描いたのはなぜか、話し合うワークショップ。

箱を開け、中のモノが、大きなカボチャと洗濯ばさみと分かった時には歓声ができ、人はどのようにモノを見て理解しているか、コミュニケーションの背後にある複雑なメカニズムを子どもたちは感じ取った。堀川にとっては作品制作のためのリサーチであり、小学生を対象とした初めてのワークショップであった。堀川は高山市に数日間滞在し、その調査と考察をもとに制作を進めた。



参加者コメント

「見ずにさわるだけで、言葉をりかいて、図をかくことがちょっとむずかしくて、でも言葉で分かった図とほんものはまったくちがったことが不思議でした」「さわることと見ることのちがいが分かったのしかった」



02

プレワークショップ - アートの手ざわり -
谷本真理
「つくって投げて! 体で楽しむ陶芸粘土」

日時 | 2016年12月24日
 会場 | 岐阜県現代陶芸美術館(多治見市)
 講師 | 谷本真理
 参加者 | 16人

ワークショップに先立ち、粘土の製造会社に相談し、美濃の土を原料に特別配合した陶芸粘土を使用。まず、子どもたちが粘土に慣れるため、数種の粘土を丸めたり混ぜたり、細長くしたり積み上げて遊ぶ。「蹴り飛ばそう!」「敷き詰めよう!」と谷本から次々に声がかかり、身体全体を使って粘土を投げるとバシッと音がしたり、壁にくっついたりして、子どもたちは大盛り上がり。最初はヒンヤリしていた粘土が、温まって練れてくる頃には、次第に個性が表れ始めた。すっかり粘土に馴染んだ頃、目を瞑って、粘土の温度や弾力を感じながら今までで一番気持ち良かった動きで、思い思いのカチチを創った。



講師コメント

「子供達の自由な発想に刺激をうけました。あれくらいパワーに溢れた空間を私も作らねば!」

参加者コメント

「ねんどのしゅるいがわかった」「ぺたぺたしてきもちよかった」「ねんどのやわらかさがちがいました」「こねこねしたのがきもちいい」



03

プレイベント
日比野克彦×山口裕美(アートプロデューサー)
「アート楽しく観る秘訣」

日時 | 2017年2月12日
 会場 | 岐阜県美術館・講堂
 参加者 | 100人

午前中は、館長室にて“日比野ゼミ”。入選者たちは、ライバルでありつつ、ともに展覧会を創っていく仲間として語り合った。クロストーク第1部では、来場作家全員がステージに上がり作品プランを紹介。選ばれし者としての緊張感とともに、モチベーションの高揚も伺えた。第2部では、山口がアートマーケットの動向や「現代アートは今を表現し、少し先の時代も示す」とレクチャー。日比野は、「AAICは、コンペティションでありつつ、アーティストを育てようという意識をもつ。作家たちはグループショウの一員として大切にされる。岐阜からアートシーンをつくっていこう」と呼びかけた。参加作家：佐藤雅晴、柴山豊尚、平野真美、堀川すなお、三枝愛、耳のないマウス、宮原嵩広、ミルク倉庫+ココナッツ、森真人、安野太郎



参加作家コメント

「(質問で)『入選作が理解できない』と言った人が何も言えなくなるくらい圧倒的なものを作ろうと気持ちを新たにしました」(安野太郎)

参加者コメント

「様々な角度から現代アートについて話を聞くことができた」「受け身だけでなく、自分から作品に向かっていくことを楽しむことが大切なんだろうと感じました」



04

0 JUN・中原浩大×大賞・審査員賞受賞者
クロストーク

日時 | 2017年4月15日
会場 | 岐阜県美術館・講堂
参加者 | 120人

第1部 | 出演：大賞 ミルク倉庫+ココナッツ

中原は、「テーマ『身体のゆくえ』の“ゆくえ”の、可能性を感じられるところを評価した」と評し、ミルク倉庫+ココナッツは、「790点の中から選ばれたという責任を感じる。広い振幅で仕事ができる大きなきっかけ」と応じた。

第2部 | 出演：審査員賞 三枝愛、柴山豊尚、谷本真理、耳のないマウス、
水無瀬翔、森貞人、安野太郎

三枝・谷本・森は、最初のプランからの変化の過程を、耳のないマウスと水無瀬はキューブ内外に広がる作品構造を、柴山と安野は制作の原動力を語った。「搬入期間が約2週間と長くありがたかった」「新作だったので、ファクトリーチームのアドバイスで助かった」など作家を大切にするAAICの姿勢に評価があった。審査員二人は、「新しいアートの象徴的な作品が選ばれた。みなさんの“ゆくえ”を楽しみにしている」とエールを送った。



参加者コメント

「おもしろかったです。まだきちんと見れていない作品もいくつかあるので、またじっくり見に来たいと思います」(女性/岐阜)、「作家の生の声が聴けて良かった」

05

日比野克彦館長による公開講評会

日時 | 2017年4月16日
会場 | 岐阜県美術館
参加者 | 150人

“東京藝大特別講義”。日比野は、森には「虫が生まれる感じに任せて」、宮原には「アスファルトの持つ都会性や暴力性が感じられる」、三木には「疎密など空間に落差をつけても良かった」、平野には「リアルさの点で夢に誘いきれてないノイズ感が次の課題」、安野には、「作品と対峙し、次の作品を考える時間が大事」、松本には「発表の場によって、作品のあり方を考えることも必要」、水無瀬には「アートは社会の隙間について問題解決をしていくことができる」、ミルク倉庫+ココナッツには「これまでは応援される期間、これからは自主的に岐阜で何かやるといい」など作家と対話。強みを見出された作家も、ヒントを投げかけられた作家も、AAICの作家支援の思いや働きかけを、次に繋げようとする面もちであった。



参加者コメント

「作品制作についてトークを聞いてから見て、楽しいと思いました」(50代/女性/岐阜)

06

森村泰昌講演会「身体のゆくえ」

日時 | 2017年4月23日
会場 | 岐阜県美術館・講堂
参加者 | 150人

美術史の知見を背景にした作品制作や芸術祭ディレクターなど多岐にわたり活動する森村。冒頭、「一つひとつのCUBEが、それぞれの作家の身体のように見えた」と、AAIC全体を評した。

動物行動学者の著書とカフカという、約100年の間隔で発行された書物を紹介しつつ、「転用・ズレ・一からでないやりなおし」が環境と身体とのセッションを生み出すこと、『変身』は、家族にとって“有害な存在”となった主人公がカフカ自身の抑圧の反映であったと講演。最後には、カフカに扮した自身の作品画像を背景に、『変身』終章を朗読。「転用・ズレ・一からでないやりなおし」は、森村の創作活動を投影したものか。明かされない謎と余韻を残した。



参加者コメント

「自分の作品や体験や考えていることをむすびつけておられ、講演内容も『作品』だと思いました」「今迄岐阜になかったこんなすばらしい開かれたアートが誕生したことに感謝です。生きる事をつきつめていくとアートになるのかな〜？」

07

谷本真理公開制作
「粘土のインスタレーション」

日時 | 2017年4月29日
会場 | 岐阜県美術館・展示室
参加者 | 45人

粘土を投げ、それが落ち、変化する。粘土を伸ばして輪にし、輪投げを楽しむ。身体的喜びを発する谷本の自然な様子に、固唾をのんで眺めていた来場者たちも、リラックスしていく。谷本は、子どもたちに粘土を渡して投げるようながし、飛び入り参加の「共同公開制作」となった。会期序盤に行われた公開制作であるが、その後も展示期間を通し、陶が割れたり動いたりして、“部屋”の様子が変化し、ドロイングや粘土がキューブになじんでいく作品であった。



参加者コメント

「粘土を壊す快感に共感した。今まであった企画展示の中で一番おもしろかった。もっと他の作品もみたい」(女性/岐阜)

作品設置後、約1か月たったこの日、ユニコーンを開腹して重要な内部構造である肋骨や内臓の状態を確認し、ラテックス製の胃を全摘して、より柔らかく弾力がある軟質樹脂製の胃に交換する公開手術（修復・メンテナンス）を行った。平野は、制作記録の写真・映像・文章を用意し、来場者と会話をしながら、外側に現れた「姿」に固定されがちな視点を、「内部」や「構造」へと移行させ、「存在」を成り立たせている本質・意識を問いかけた。実は、会期中には、血液循環装置のチューブの劣化により“血液”がチューブ外に漏れたり、肺と心臓につないだ生命維持装置の不調が起こったりしている。平野はメンテナンスを通して、「モノとしての作品の死」の意味を問うことに興味を移していった。



参加者コメント

「自分の想像とは全く違う作品でとても刺激的でした」（19～24歳/男性/埼玉）、「かわいい作品なのに残酷性にびっくり。夢と社会のつながり、夢の義務みたいなものを感じた」（30代/男性/岐阜）

美術館庭園に設置された実寸大キューブフレームを舞台に審査員と入選者がカジュアルトーク。

14時～ 11代大樋長左衛門 × 柴山豊尚、三枝愛、三木陽子、宮原嵩広

自然素材を扱うという共通点がある5人。大樋は、入選者の制作動機などをきっかけに、通常の制作発表では交わることが少ない、陶芸・彫刻・インスタレーション・クラフトなどの表現者のトークを引き出した。

15時～ 三輪真弘 × 佐藤雅晴、ミルク倉庫+ココナッツ

テクノロジーやメディアを扱うという共通点の3組。身体と動きの隙間、今後の表現について、和やかに話した。屋外での開催が危ぶまれた午前中の小雨が、「青空トーク」のときには涼しい日差しとなりゴールデンウィークの爽やかな屋外イベントとなった。



参加者コメント

「1部2部共、リードされるお二人の先生方がうまく話を進めていた。作家や審査員の方々、支える方々が色々な方法で深くかわり合ってイベント全てを創り上げ、とてもすばらしいと思います」「美術館庭園はゆったりしていて五感を休めるのにぴったり。時にこうして刺激的なイベントがあると楽しいですね」「アーティストのお話、大変興味深かったです。今日は白川村から来ました。なかなか普段『文化』に触れる機会がないので、岐阜県全体で楽しめるアートのイベントがあるといいです」

10

アーティストワークショップ
中村潤「裁縫鳥になろう!」

日時 | 2017年5月7日
会場 | 岐阜県美術館・庭園
講師 | 中村潤
参加者 | 35人

クモの糸などを使って葉っぱを縫い合わせる実在の鳥「裁縫鳥」から発想し、身体が納まるような巣を紙と糸で縫って、その中で寛ぐというワークショップ。縫うことの身体性を提示し、既知の行為のサイズを変えろという中村の出展作にちなみ、大きな段ボールや和紙の上で「丸くなったら気持ちいい」「狭くて落ち着く」など、心地いい身体の状態を探す。次に、紙を好きなかたちに切り取りとっ

て、毛糸や美しい色のリボン、中村の作品で使った紐、糸などで縫う。巣の中に入って内側から縫ったり、絵を描いたり、発想は自由。完成したら、庭園の好きな所へ巣を運び、木陰や岩の上などでのんびりする。手づくりの巣があまりに心地よくてスヤスヤと眠ってしまう子も…。



参加者コメント

「のんびりするときに楽しかった(子) / 子どもが自由に楽しんでるのが、みていて楽しかった。芸術に気軽に触れる機会をありがとうございます(親)」
「自由に作ること、また『巣づくりして中でのんびりしてみる』というコンセプトが良かった(親)」
「さいほう鳥になったきぶんになりました(子)」

11

安野太郎「ゾンビ音楽演奏会」

日時 | 2017年5月13日
会場 | 岐阜県美術館・多目的ホール
出演 | 安野太郎
参加者 | 113人

始まりもなければ終わりもない、機械が生成する音楽をBGMに、作品のバルーン上に座った安野が、「2003年 IAMAS 在籍時、ゾンビ音楽の元となるアイデアが生まれる。2012年 産業革命から150年、IT革命から20年。電子工学を独学。2017年 AAIC2017で高橋源一郎賞受賞。2022年 ゾンビ音楽発祥の地日本から、楽器の伝来を逆に辿る、シルクロード逆走ツアー。2033年 長女がロボットの軍事利用に反対する団体、ZEALDsを立ち上げる……」と4001年まで続く『ゾンビ音楽史』を朗読。美術館恒例の「ナンヤローネアートツアー」では、「音の印象と合うコネクターを選び、絵にする」という新しい鑑賞活動が試みられた。

参加者コメント

「規則性があるようで決してループには聞こえない一方で、永遠に一つのメロディが形を変えていくような…、しかしそれはゾンビ音楽を聴いている“私”が変化しているのか…と様々な想いと考えをめぐらせることが出来る素晴らしい演奏会」「大変退屈な演奏会で、ゾンビ音楽の醍醐味を味わうことができた。『ゾンビ音楽史』も作品として一体性があり、アイロニーに満ちた内容で、大変笑わせて頂きました。これからも応援しています」



12

田中泯講演会
「田中泯はどのように美術に関わってきたか？」

日 時 | 2017年5月20日
会 場 | 岐阜県美術館・講堂
出 演 | 田中泯 聞き手 | 高橋綾子
参加者 | 230人

田中は、講演を通し、長年の鍛錬と生き方によって、即興に真実を紡ぎだす身体と言葉のあり方を見せた。

『身体ゆくえ』とは、人類が身体をどのように扱ってきたか、始末してきたか、死をどう見極めてきたかの問題」と投げかけ、「今の世界には言葉があふれているけれど、口から出る言葉は、常に身体が頷く言葉であってほしい。僕たちは身体から出ていけない。自分の言葉とどう生きていきたいのか、身体がくっついていく言葉を探してください」と語りかけた。

最後に「美術館は、建物がすごいんじゃないくて、人と出会わせてくれるからいい。それ以上でもそれ以下でもない。ライブ感こそがどんな表現にも必要」と美術館関係者や作家にも、メッセージをおくった。



参加者コメント

「身体から発せられる声を見せず、目で見えることだけにまどわされず、この自分の身体という殻をまとして生きていきます」「自分が言葉を使うときの身体のありよう。常に身体を意識して生活してみたい」



13

アーティストワークショップ
耳のないマウス「アート×テクノロジー」

日 時 | 2017年5月21日
会 場 | 岐阜県美術館・スタジオ
講 師 | 耳のないマウス
参加者 | 10人

作家のユニークな自己紹介や場の造りこみで、子どもたちはテクノロジーアートの世界に引き込まれていく。まず、明暗や振動といった様々な条件を感知する小さな電子機器（MESH）を使ってiPadで簡単なプログラミングを体験。次に、段ボールや包装紙、風船、ひもなど身近な素材を材料に、プログラムと関連づけて「暗くなると鳴くライオン」「音に反応して目が光る」などアイデアあふれる動物を制作していく。「さあ、動物園にしよう」という作家のかけ声の下、子どもたちはそれぞれの動物にピッタリの場所に動物を飾る。全員でまわる“動物園ツアー”で、芸術と科学技術の複合という難しいテーマを楽しく体験した。



講師コメント

「グループとしては初のワークショップ。可能性を感じられるものになって、今後に生かせそうです」

参加者コメント

「プログラミングは、むずかしいと思ったけど、とてもかんたんで、楽しかった」

14

アーティストワークショップ
松本和子「フレスコ画ワークショップ」

日時 | 2017年5月27日 - 28日
会場 | 岐阜県美術館・スタジオ
講師 | 松本和子
参加者 | 10人

自然素材をベースとする世界最古の絵画技法フレスコ（湿式法）を漆喰づくりから水溶性顔料による描画まで経験する貴重なワークショップ。まず、消石灰に水を入れクリーム状にしたものに、砂を入れてゴムベラとボウルでクリーム状になるまで練り漆喰を作る。次に、描く部分だけを、ウレタンフォームにコテで漆喰を均一の厚さに塗り付けていく。漆喰の水気が飛ぶのを待つ間、下絵にそって目打ちで穴をあける（スポロヴェロ）。絵が染み込み、乾くと定着。

柔らかな幕、光や空気感が広がる松本の制作過程には、身体的な作業と化学変化があることを体感した。2日目には、フレスコの彩色層を膠の吸着力によって麻布等に貼り引きはがすストラッポ技法の公開実演も行った。



講師コメント

「岐阜は、石灰の生産地。AAICの後、岐阜のどこかの建物や公共空間に長く残る壁画を描いてみたいです」

参加者コメント

「材料を練ったり土台から作っていく作業が簡単ではないところが、逆に新鮮（フレスコだけに）」

15

高橋源一郎講演会「芸術の未来」

日時 | 2017年6月3日
会場 | 岐阜県美術館・講堂
参加者 | 300人

高橋にとって初めての美術展の審査の感想を交えながら、一次審査では最も興味を惹かれたという平野真美の作品をはじめ15の入選作品全てを講評。ラジオのパーソナリティとして鍛えられた話術で、ユーモアを交えながら現代社会を論じた。第2部では、「高橋源一郎賞」の〈THE MAUSOLEUM—大霊廟—〉安野太郎と対談。批評性のあるやりとりで、会場からは笑いが起き、2時間が短く感じられるほどだった。高橋の目を通した作品解釈と思考に触れ、来場者は講演会終了後、再度、展示室に向かっていた。

講演後、高橋は、ミュージアムショップで森真人の「虫」のオブジェを購入。選んだのは、作家らしく、“万年筆の擬態虫”だった。



参加者コメント

「独自の切り口での作品評論がおもしろい」「各展示の意図や解説が聞け、理解が深まった」「少し難しい印象の作品もありましたが、高橋先生の話聞いてもう一度観てみたいと思いました」

16

アーティストワークショップ
森真人「ムシの日に虫をつくらう！」

日 時 | 2017年6月4日
会 場 | 岐阜県美術館・庭園
講 師 | 森真人
参加者 | 70人

カラッとした風が吹き抜ける絶好の“ムシ日和”。「人間は、自分の都合に合わせて環境を変えてきたけれど、ムシたちは、周りの自然に合わせて自分を変えてきました。今は使われなくなった道具を使って、想像のムシをつくらう」と、森が今日のテーマを伝える。さっそく、画用紙にむかって、思い思いのムシを描き始める子どもたち。虫を描いたら、切り抜いたり組み合わせたりして、アルミの洗濯ばさみを取りつける。洗濯ばさみが足になったチョウチョや毛虫、カブトムシと怪獣が合体した架空の虫などが次々に出来上がった。“虫博士”少年は、ワークショップの合間に美術館庭園で次々に本物の虫を発見！観察力と発想力が羽ばたき、創造性に結び付く機会となった。



参加者コメント

「子どもの自由な発想をそのまま表現させるおもしろさを知りました」「屋外で作るところが良かったです」「いろんなむしがつくれたのしかったです」

17

学芸員によるCUBE TOUR

日 時 | 2017年4月21日、5月19日、6月10日
会 場 | 岐阜県美術館
担当学芸員 | 鳥羽都子
参加者 | 30名、25名、35名

担当学芸員が「15のキューブを巡りながら、『身体のゆくえ』の多様な受け止め方を観ていきましょう。もう一つの共通項である『キューブ』に、アーティストたちがどのように挑んだのかも見どころ」と導入後、作品解説を行った。〈Mimesis Insect Cube〉は、「CUBEが虫かごのようにも見える。本来、虫は虫かごから外へ逃れようとするが、擬態虫は中に集まって、時代を越えて生き続けられるCUBEに入りたがっているよう」など、親しみやすく紹介。「ほの暗い第1展示室には、異世界や異空間を想起させる7つのキューブを集めた。それぞれ少しずつ連鎖しており、幻想的な〈蘇生するユニコーン〉は展示室に入ったときから遠くに見える、横たわる白い生物に近づいていく」と会場構成の意図を話した。参加者からは積極的に質問も出していた。



参加者コメント

「見るだけではない体験。アートに興味がない人にもお伝えしたい!!と思いました」(20代/女性/岐阜)、「とてもおもしろかった。アーティストさんと作品を作り上げていくという行為は素晴らしい」(50代/女性/愛知)、「この先も、この企画を継続されることを望みます」(50代/男性/岐阜)

最終日、各作家が“在廊”。14時からは、担当学芸員の案内で各作家を訪ねる“CUBE TOUR”を行った。〈移動する主体 (カタツムリ)〉耳のないマウスは、「アイデアの段階からこの作品を2年以上扱っているが、何回もメンテナンスに来て、今では、自分たち自身の感じ方が変わってきて明るく捉えるようになった」。〈蘇生するユニコーン〉平野は、来場者アンケートの「印象に残った作品」で常に上位。質問の一つひとつ丁寧に答えていた。〈THE MAUSOLEUM 一大霊廟一〉安野は、「空気で音を出すという点で、リコーダーは、同じ空間に設置されたパイプオルガンの原初」と解説。〈縫いの造形〉中村は、見学の小学生がひっかかって和紙が破れたところを、細かい針目で補修。「視線の定めりどころができて、かえてよくなった。そういう変化もおもしろかった」。〈この部屋とダンス〉谷本は、「壺

が落ちたりして、空間がどんどん変化した。床も粘土が散らばって、嬉しい」。〈cranky wordy things〉ミルク倉庫+ココナッツは、「それぞれのコンペで傾向があったりするけれど、ミルクココが大賞をとって、第2回の傾向が全く見えなくなりました」という学芸員のコメントに、「それは一番うれしい感想!」と笑った。〈庭のほつれ〉三枝は、屋外のインスタレーションを初めて経験し、「キューブの外側が風雨で色が変わったり、葉っぱがキューブのなかに吹き込まれたり。3月の搬入時は灰色の風景のなかに真新しい木材のキューブがあったのが、今は、こんなに青空で芝生が緑で、木が茂っていて。環境のなかにキューブがある景色の変化も含めて〈庭のほつれ〉」。それぞれの作家が、AAICの経験を吸収し、成長していた。



参加者コメント

「子供が小学校で見学し『すごかったよ!また見たい!!』と言うので家族で来ました。いろんな作品があってとても良い時間を過ごせました」(30代/女性/岐阜)、「多様な価値観の作品群にふれられて、パワーをいただき、リフレッシュしました」(50代/男性/大阪)、「2度目です。各アーティストの思い、考えを直接聞いたうえで改めて作品を観ることで、前回よりも深く感じることができました」(30代/男性/愛知)

自身の身体を使用せずとも、あらゆる欲求が表面的には満たされ、本来人間が行うはずのデモ行進までもロボットが代理する商品として流通し得る。それを批評的に表現するレンタルショップ型作品に、毎土日祝の11時から16時まで作家が滞在し、鑑賞者が、店員役・客役を体験するワークショップを行った。来場者は、「店員見習い」として、デモの受付や相談など、来客対応・店舗運営に従事する。エプロンの制服もある。また、「客」としてデモを申請することもできる。小学生が「金華山の狸として」デモを申請するなど、ごっこ遊びの延長線上で、虚構を通じてどう想像力を働かせるかが蓄積され、参加者は、役割を演じることを通し、見る鑑賞ではなく構想する鑑賞を体感した。

参加者コメント

「デモコーシンのロボットを動かして楽しかった」、「インザキューブ支店はキューブを店にみたくていておもしろかった」(中学生)、「発想がとてもおもしろく、もし未来にデモをしたい、でも勇気がないというような人が本当に利用しそう」(中学生)



だれでも、無料で楽しめる創作コーナーを会期中の土日祝日に解放。“空中に描けるペン”を使って、立方体のキーホルダーを作った。運営にはボランティアも協力した。

参加者コメント

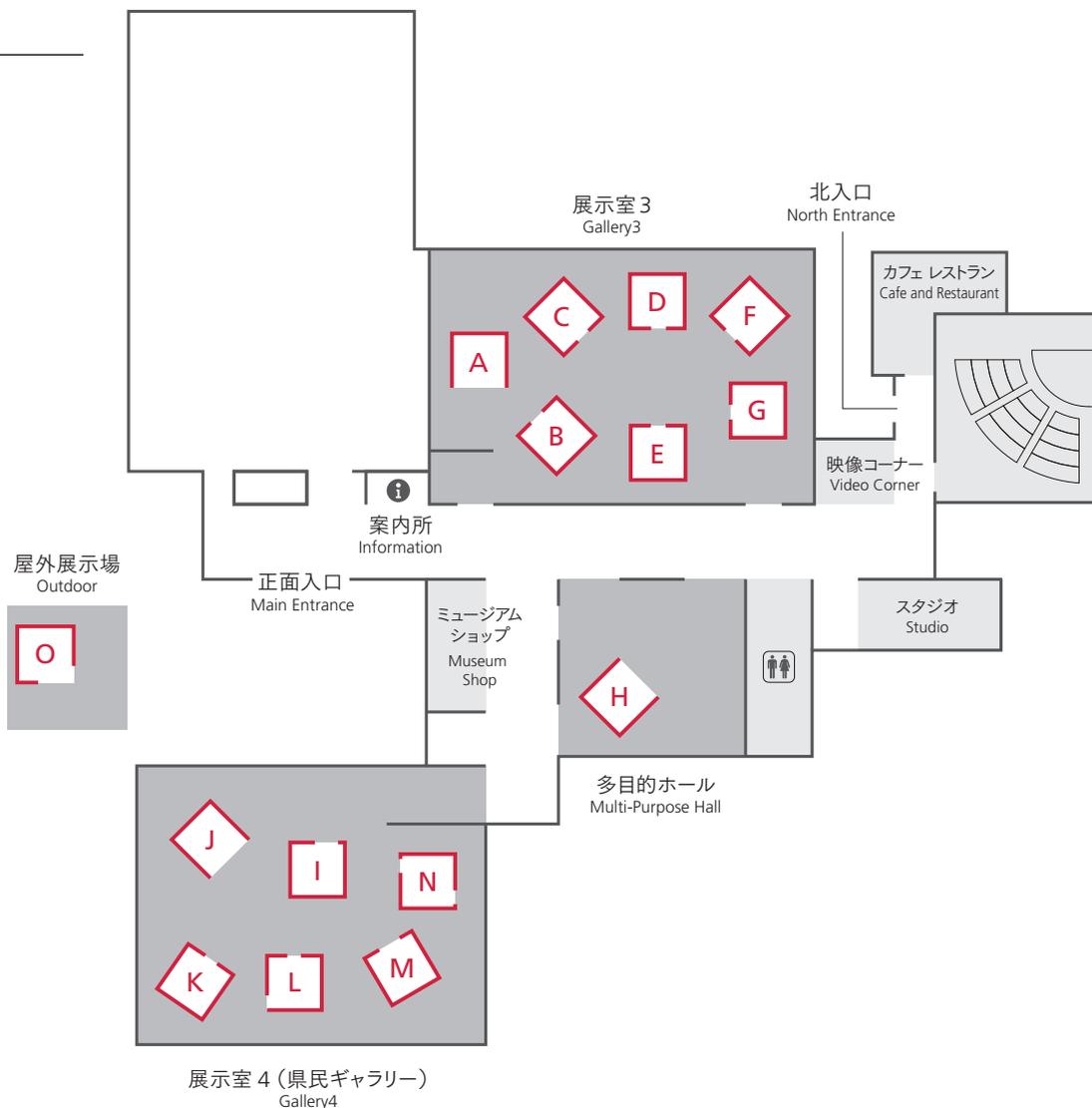
「子どもでも楽しめるコーナーはありがたいです。一緒にたのしめました」(30代/女性/岐阜)



展覧会概要

- ・会期 平成29年4月15日(土)から6月11日(日)まで(50日間)
- ・会場 岐阜県美術館
- ・来場者 37,579人

会場



A 柴山豊尚《ニョッキ(如木)2017》
SHIBAYAMA Toyohisa 《Nyokki 2017》

B 森真人《Mimesis Insect Cube》
MORI Sadahito 《Mimesis Insect Cube》

C 耳のないマウス《移動する主体(カタツムリ)》
Earless Mouth / Mouse 《Shifting Self (Snail)》

D 宮原嵩広《Missing matter》
MIYAHARA Takahiro 《Missing matter》

E 佐藤雅晴《HANDS》
SATO Masaharu 《HANDS》

F 三木陽子《Conduit(導管)》
MIKI Yoko 《Conduit》

G 平野真美《蘇生するユニコーン》
HIRANO Mami 《Revive the unicorn》

H 安野太郎《THE MAUSOLEUM 一大霊廟一》
YASUNO Taro 《THE MAUSOLEUM》

I 松本和子《透明の対話》
MATSUMOTO Kazuko 《Transparent dialogue》

J 中村潤《縫いの造形》
NAKAMURA Megu 《The shape of sewing》

K 堀川すなお《モノについて》
HORIKAWA Sunao 《About an object》

L 水無瀬翔《DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店》
MINASE Sho 《DEMO DEPOT IN THE CUBE Branch》

M 谷本真理《この部屋とダンス》
TANIMOTO Mari 《Dance with this room》

N ミルク倉庫+ココナッツ《cranky wordy things》
Miruku Souko + The Coconuts 《cranky wordy things》

O 三枝愛《庭のほつれ》
MIEDA Ai 《I'm waiting for the time,
when that field is opened again.》



■ オープニングセレモニー

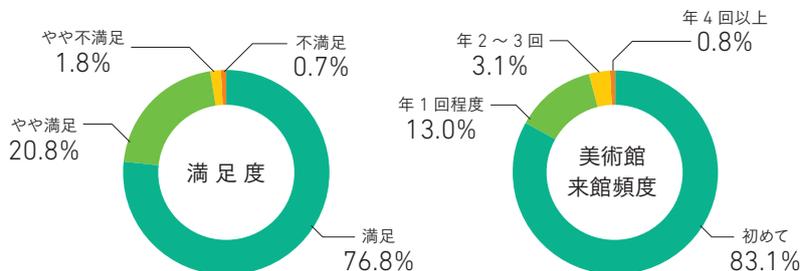
一般公開に先立ち、4月14日(金)、岐阜県美術館においてオープニングセレモニーを開催した。出品作家、審査員、美術関係者等、約150人が参加した。

- ・表彰式、テープカット 15:00-16:00
- ・内覧会 16:00-17:00
- ・交流会 17:00-18:30



学校団体鑑賞

AAIC2017の開催目的である「新たな形のアートの鑑賞機会を提供」の一環として、県内小中高等学校、特別支援学校に意向調査を行い、希望があった学校を対象に実施した。県内延べ30校、1,949人の児童・生徒がAAIC2017を鑑賞した。



対象者：学校団体鑑賞に参加した児童、生徒／調査方法：紙面によるアンケート調査／回答数：1,394件

自由記述欄抜粋

- ・私の美術館のイメージとは全く違って、とても面白かった。(小学4年生)
- ・今までは絵を描いたり、作品を作ったりしても、何が伝わるか、どこが面白いかが分からなかった。CUBEを観て、美術への考え方が変わりました。(中学3年生)
- ・「観て」「体験する」ことで、「自分で考え表現する」ということの大切さを学んだ。(中学2年生)



ボランティア

AAIC2017の開催目的である「アートに関わる人材の育成とネットワークづくり」の一環として、初開催となる本展をサポートするボランティアを募集した。作品制作補助、展覧会運営補助など、延べ220人が参加した。

AAIC終了後は、美術館のサポーターに登録する人もいた。

活動例

- ・事前研修
- ・制作補助…森真人、松本和子、中村潤、堀川すなお作品等の設営・展示補助、水無瀬翔作品のロボット組立・アイロンプリントを行った。
- ・会場運営…誘導案内や安全確保、作品の紹介を積極的に行った。
- ・学校団体見学補助…学校単位で見学にきた子どもたちの団体鑑賞に同行し、安全確保や作品保全を行った。
- ・ワークショップ補助…3Dペンワークショップの補助、松本和子ワークショップや耳のないマウスワークショップなどでは、刃物類の安全な使い方についてサポートしたり、画材などの準備や片づけを行った。屋外で行われた、森真人ワークショップや中村潤ワークショップでは、子どもたちの創作を補助した。

ボランティアの声

- ・制作、展示の手伝いをする中で、参加した感が得られ良かった。
- ・多くの人に会いました。作家の先生ともお話ができました。普段専業主婦の私にとっては貴重な体験でした。
- ・制作の現場を拝見出来たり、直接お客様から感想をお聞きする機会があったり、楽しく参加できた。
- ・今回初めて美術館でのボランティアに参加させていただきました。もともと芸術には見学者の立場から興味がありました。しかし、今回ボランティアの立場で参加して、さらに奥の深さに気づかされました。



の国ぎふ芸術祭
Award IN THE CUBE 2017

**IN
THE
CUBE
2017**

Chapter

4



資料

Data

■ スケジュール

2014年

5月7日(水)	岐阜県美術展一般部運営委員会 小委員会設置
10月22日(水)	新たな美術展を創設するための委員会 設置

2015年

3月～10月	清流の国ぎふ芸術祭運営委員会・Art Award IN THE CUBE 2017企画委員会設置。 美術展を「清流の国ぎふ芸術祭」と総称し、3年に1回開催する「Art Award IN THE CUBE」と、3年に2回開催する「ぎふ美術展」とした。
12月22日(火)	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会設立

2016年

3月25日(金)	公式サイト開設、公募要項発表
3月27日(日)	開催記念トークイベント「アートの新たな源流を求めてー岐阜から始まるアートアワード」 3331Arts Chiyoda (東京都千代田区)
4月11日(月) - 7月8日(金)	作品公募受付開始
5月28日(土)	開催記念トーク in 名古屋「画家のカラダ」 Minatomachi POTLUCK BUILDING (名古屋市港区)
6月5日(日)	開会記念トーク in 京都「身体のゆくえ」 MTRL KYOTO (京都市下京区)
6月19日(日)	会場見学・説明会 in 岐阜「アートの新たな源流を求めて」 岐阜県美術館
8月1日(月)	1次審査会 ソフトピアジャパン ソピアホール(大垣市)
8月31日(水)	1次審査結果発表
10月5日(水) - 12月9日(金)	ボランティア募集
11月3日(木・祝)	PRイベント「3Dペンワークショップ」 岐阜県美術館(文化の森の秋祭り)
11月20日(日)	PRイベント「3Dペンワークショップ」 柳ヶ瀬商店街(第27回サンデービルディングマーケット)
12月17日(土)	プレイベント「アートの手ざわり」第1弾ワークショップ in 高山市 「もの、どのように感じてる?伝わってる?」(講師:堀川すなお) 飛騨・世界生活文化センター
12月24日(土)	プレイベント「アートの手ざわり」第2弾ワークショップ in 多治見市 「つくって投げて!体で楽しむ陶芸粘土」(講師:谷本真理) 岐阜県現代陶芸美術館

2017年

1月21日(土)	ボランティア研修会
2月5日(日)	PRイベント「3Dペンワークショップ」 東邦ガスエネルギー館(愛知県東海市、未来ヘタイムスリップ!2017)
2月12日(日)	プレトークイベント「アートを楽しく観る秘訣」 岐阜県美術館
2月18日(土)	ボランティア研修会
3月5日(日)	PRイベント「3Dペンワークショップ」 ふれあい福寿会館(NPO・ボランティア・生涯学習<子ども・3世代交流>フェスティバル)
3月6日(月) -9日(木)	キューブ設置
3月10日(金) -23日(木)	作品搬入・設置
3月28日(火)	2次審査会 岐阜県美術館
4月3日(月)	2次審査結果発表
4月14日(金)	オープニングセレモニー開催(表彰式・内覧会・交流会)
4月15日(土)	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 開幕
	0 JUN・中原浩大×大賞・審査員賞受賞者クロストーク
	アーティストワークショップ「DEMO DEPOで働こう!」(講師:水無瀬翔)※会期中毎土日祝
4月16日(日)	日比野克彦館長による公開講評会
4月23日(日)	森村泰昌講演会「身体のゆくえ」
4月29日(土・祝)	アーティストパフォーマンス「粘土のインスタレーション 公開制作」(谷本真理)
5月3日(水・祝)	アーティストパフォーマンス「ユニコーン 公開制作」(平野真美)
5月6日(土)	青空トーク
5月7日(日)	アーティストワークショップ「裁縫鳥になろう!」(講師:中村潤)
5月13日(土)	アーティストパフォーマンス「ゾンビ音楽演奏会」(出演:安野太郎)
5月20日(土)	田中泯講演会「田中泯はどのように美術に関わってきたか?」
5月21日(日)	アーティストワークショップ「アート×テクノロジー」(講師:耳のないマウス)
5月27日(土)	アーティストワークショップ「フレスコ画ワークショップ」(講師:松本和子)
5月28日(日)	アーティストワークショップ「フレスコ画ワークショップ」(講師:松本和子)
6月3日(土)	高橋源一郎講演会「芸術の未来」
6月4日(日)	アーティストワークショップ「虫の日にムシをつくろう!」(講師:森真人)
6月11日(日)	Artists IN THE CUBE
	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 閉幕
6月13日(火) -17日(土)	作品・キューブ撤去
8月26日(土)	ボランティアミーティング

■ 広報

会場を彩ったサインは、AAIC2017を盛り上げた。広くPRするため、ポスター、チラシの他、オリジナルグッズを作成した。



展覧会ポスター



サンプルキューブ



会場サイン



会場サイン



会場エントランス



会場ファサード



創作コーナー



美術館外看板



美術館南ポスタータワー



公募募集ポスター



開催記念トークイベントチラシ



トークイベントチラシ



トークイベントチラシ



トークイベントチラシ



プレトークイベント



ボランティア募集チラシ



プレチラシ



グッズ(エコバック、しおり、クリアファイル)



プレワークショップ募集チラシ



体験プログラム募集チラシ



トークショーチラシ



新聞広告



雑誌広告



新聞広告



新聞広告



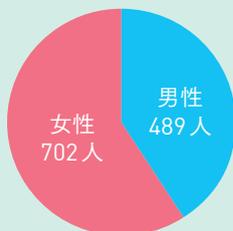
新聞広告



新聞広告

■ 来場者アンケート

1. 性別



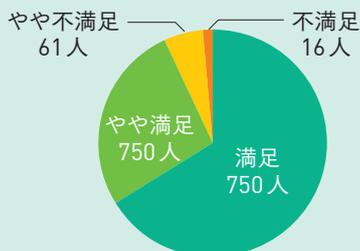
2. 年齢



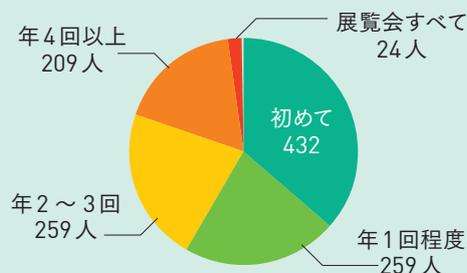
3. お住まい



4. CUBE展について



5. 来館頻度



対象者：AAIC2017の来場者(37,579名)

調査方法：会場内にアンケートコーナーを設置。紙面による任意のアンケート調査。

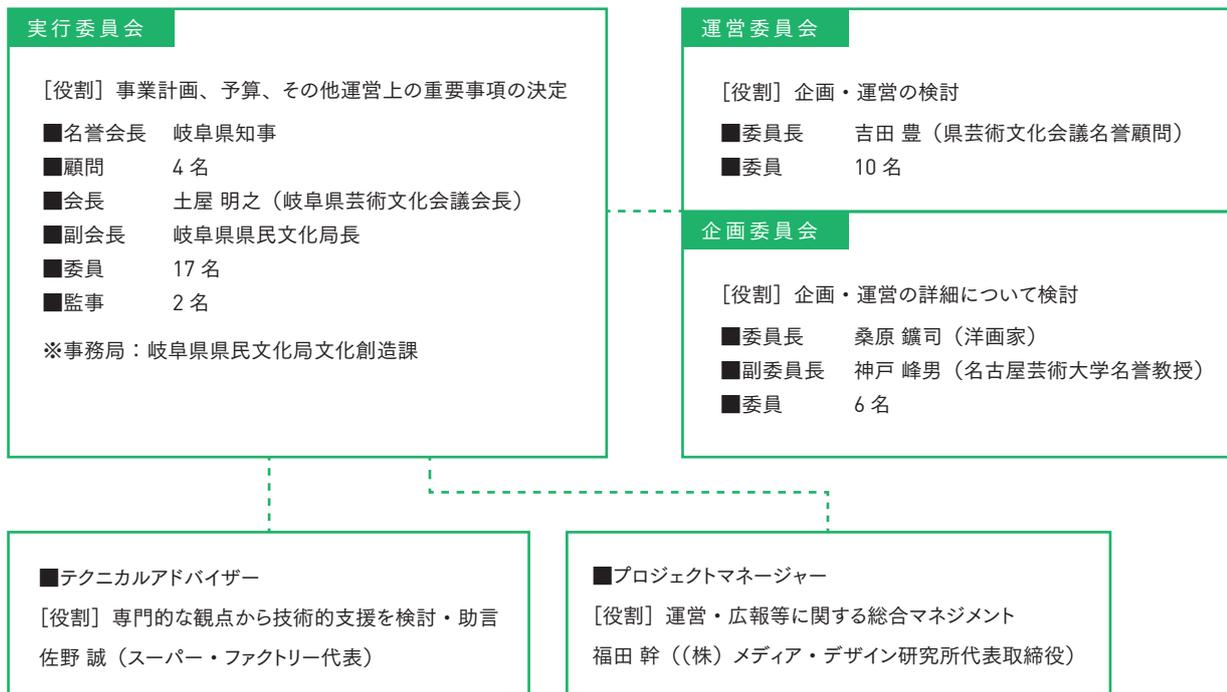
回答数：1,193件

自由記述欄抜粋

- ・人間の身体について五感にうったえるものがあり楽しかったです。
- ・深く考察する作品が多くインパクトがありました。身体とは、そのゆくえは、と自分なりに考えさせられました。テーマとのつながりが分かり難いものもあり、また来て自分なりに解いてみたいです。
- ・現代アート(?)は、あまりくわしくわかりませんが、興味を持つきっかけになったと思います。
- ・久々に心に響く作品に出会えた気がします。ほーっと思ったり、ぞくっとしたり、へーっと思ったり、感性が忙しく動きました。
- ・新しいタイプの公募展で期待していました。選ばれた作家さんたちもこれからの時代をつくっていく感じがしました。面白かったです。
- ・意味不明。理屈っぽいものが多い。無条件で、心と体に訴えるものがほしい。
- ・アートがアートでなくなっていく過程のように見えました。でも現代を捉えたものでしょう。
- ・コンセプト寄りでクオリティが追いついていないように思いました。

運営体制

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 運営体制



清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会 委員名簿

役職	氏名	所属機関・団体役職
名誉会長	古田 肇	岐阜県知事
顧問	村下 貴夫	岐阜県議会議長
	杉山 幹夫	岐阜県美術館協議会会長
	星野 欽夫	岐阜車体工業株式会社社長
	吉田 豊	清流の国ぎふ芸術祭運営委員会委員長
会長	土屋 明之	岐阜県芸術文化会議会長
副会長	桂川 淳	岐阜県県民文化局長
委員(五十音順)	阿部 和久	株式会社中日新聞社岐阜支社長
	井戸 敬二	岐阜県町村会会長
	上田 善弘	岐阜県立国際園芸アカデミー学長
	碓井 洋	株式会社岐阜新聞社代表取締役社長
	桑原 鑛司	Art Award IN THE CUBE 2017企画委員会委員長
	重森 万紀	日本放送協会岐阜放送局局長
	高木 敏彦	公益財団法人岐阜県教育文化財団理事長
	高橋 秀治	岐阜県現代陶芸美術館長
	竹本 義明	名古屋芸術大学学長
	田島 一男	岐阜県美術館後援会会長
	田中 勝士	岐阜県議会厚生環境委員会委員長
	土屋 嶋	株式会社大垣共立銀行頭取

委員(五十音順)	日比野 克彦	岐阜県美術館長
	細江 茂光	岐阜県市長会会長
	松川 禮子	岐阜県教育長
	村瀬 幸雄	株式会社十六銀行頭取
	森 保	岐阜県立国際たくみアカデミー校長
監事	加藤 誠	岐阜県出納管理課長
	大野 昌伸	公益財団法人岐阜県教育文化財団経営管理課長

清流の国ぎふ芸術祭運営委員会 委員名簿

役職	氏名	所属機関・団体役職
委員長	吉田 豊	岐阜県芸術文化会議名誉顧問
委員(五十音順)	白井 千里	書家、岐阜県世界青年友の会常務理事
	角田 茉瑳子	児童文学作家
	加藤 幸兵衛	陶芸家、(株)幸兵衛窯代表取締役
	神戸 峰男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授
	桑原 鑛司	洋画家
	宗宮 喜代子	岐阜聖徳学園大学教授
	土屋 明之	中部学院大学教授、岐阜県芸術文化会議会長
	仲居 宏二	聖心女子大学教授
	日比野 克彦	岐阜県美術館長
	廣瀬 輝	中日本高速道路(株)取締役

Art Award IN THE CUBE 2017企画委員会 委員名簿

役職	氏名	所属機関・団体役職
委員長	桑原 鑛司	洋画家
副委員長	神戸 峰男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授
委員(五十音順)	青木 正弘	美術評論家
	安藤 泰彦	情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授
	衣笠 文彦	彫刻家、岐阜聖徳学園大学短期大学部非常勤講師
	佐藤 昌宏	洋画家、岐阜大学教育学部教授
	高橋 綾子	名古屋芸術大学教授
	日比野 克彦	岐阜県美術館長

Art Award IN THE CUBE 2017 を終えて

桑原 鑛司 (AAIC2017企画委員会委員長)

平成27年、戦後69回を数えた岐阜県美術展を閉幕することとなり、県展に替わるものとして新たな構想の下に全国規模の展覧会を立ち上げることになった。それは他に見られないような斬新なものでなければならない。展覧会の目的、内容、手法に独自性がなければならない。平成26年5月、企画委員会の前身となる小委員会が組織され、これらを前提に議論が積み重ねられた。

目的には、未だ世に出ていない才能ある作家の発掘と育成を掲げた。となれば、推薦形式ではなく公募であるべきだ。そして作家たちの出品意欲を掻き立てるような条件を設定する必要がある。それは何か。

まず展覧会としてどのような作品を期待するか。制作に関して何らかの制限を設けるか。テーマを設けるか。これらについての議論は正規の委員会以外にも可能な限り時間を見つけて、飽くことなく重ねられた。

初めに「身体のゆくえ」というテーマと丈六のキューブを使うという2つの制約をつけることが決定された。次に、作家たちにとっても観客にとっても魅力的な展覧会にするにはどうしたらよいか、が議論となった。審査員、賞、制作のサポート(人と製作費)、展覧会の開催前の告知・広報、開催中の各種イベント(講演、トークセッション、ワークショップetc.)、ボランティアの募集、等々。これらの議題の結論、結果はそれぞれについての報告があるのでここでは重複を避けるが、審査員と制作サポートについては以下の方針で臨んだことを付け加えておきたい。

審査員は展覧会の顔とも言えるほど重要である。したがって既存の展覧会でよく見かける顔ぶれは避け、作家たちがこの審査員なら自作の評価を受けてみたいと思えるような人を、また美術の専門家だけではなく異分野の芸術家、評論家が入っていたほうがよいのではないか、というところで意見の一致を見た。

また制作サポートであるが、どうしたら作家の助けになるかを

考えた。人に関してはテクニカル・アドバイザーとしてスーパー・ファクトリーの佐野 誠氏を招き、実際の作業については美術関係に実績のあるカトウスタチオとボランティアを配した。製作費は15点の入選作品が決まった時点で、その作家(グループ)に入選賞金として50万円を支給することとした。

最後に、次回に向けて最も重要な課題を挙げるならば、それは審査方法と、AAIC2020の存在を全国に知らしめるための広報の手法、そして海外への発信であろう。優れた作品をより多く展示することが展覧会の意義を高めるとすれば、この3つが特に肝要である。

今回は一次審査で790点の応募作品から15点の入選作を選び、二次審査で大賞、審査員賞を決定した。一次審査では書類(作品のコンセプト)、スケッチ、マケット、DVDによって審査された。実作ではない。選ばれなかった作品のなかに良いものがあったかもしれない。やむを得ない仕儀とは言え問題はここにある。より良い方法を考えなければならない。

広報の一環として公募期間中に東京、京都、名古屋、岐阜の四カ所で展覧会の概要説明、審査員参加のトークセッション、講演などを行い好評であったが、次回には開催場所をもっと増やし全国的に展開する必要がある。また、新聞、雑誌、ネット等の広報媒体の利用、大学、高校、美術関係機関への資料配布はできる限り手を尽くしたが、なお正鵠を得ていないような気がしてならない。より効果的、効率的な方法を探らねばならない。

海外への広報、公募についてはどのように臨むのか。人、作品の輸送、滞在、制作、言語、等々対処すべき事柄は多岐にわたるが、次へのステップとして欠くべからざる取り組みであると思われる。



発行年 2017年12月発行

編集 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会事務局
鳥羽都子
森田良紀

デザイン 株式会社電通名鉄コミュニケーションズ
株式会社アーティカル

写真 特に記載のない場合は、
清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会事務局
安野亨、三浦知也

印刷 サンメッセ株式会社

発行 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会

© 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
無断転載・複写を禁じます。

本書では敬称を省略しております。
また、本書掲載の肩書きは2017年8月1日現在のものです。

助成 公益財団法人田口福寿会

協賛 **OKB 大垣共立銀行**



平成29年度 文化庁
文化芸術創造活用
プラットフォーム形成事業

ART AWARD
IN THE 清流の国ぎふ芸術祭
CUBE 2017

目次
Contents

- 004 ごあいさつ
Foreword
- 006 開催概要
General Information

審査員・講評
Juries・Comments

- 009 O JUN
O JUN
- 010 十一代大樋長左衛門(年雄)
OHI Chozaemon XI (Toshio)
- 011 高橋 源一郎
TAKAHASHI Genichiro
- 012 田中 泯
TANAKA Min
- 013 中原 浩大
NAKAHARA Kodai
- 014 三輪 眞弘
MIWA Masahiro
- 015 鷺田 清一
WASHIDA Kiyokazu



第1章 - 図版
Chapter1 - Catalogue

- 019 佐藤 雅晴
SATO Masaharu
- 023 柴山 豊尚
SHIBAYAMA Toyohisa
- 027 谷本 真理
TANIMOTO Mari
- 031 中村 潤
NAKAMURA Megu
- 035 平野 真美
HIRANO Mami
- 039 堀川 すなお
HORIKAWA Sunao
- 043 松本 和子
MATSUMOTO Kazuko
- 047 三枝 愛
MIEDA Ai
- 051 三木 陽子
MIKI Yoko
- 055 水無瀬 翔
MINASE Sho
- 059 耳のないマウス
Earless Mouth / Mouse
- 063 宮原 嵩広
MIYAHARA Takahiro
- 067 ミルク倉庫+ココナッツ
mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts
- 071 森 貞人
MORI Sadahito
- 075 安野 太郎
YASUNO Taro

第2章 - 展評
Chapter2 -Review

- 080 キューブのゆくえ／島 敦彦
- 081 清流の国からの問いかけ／住友文彦
- 082 県展のゆくえー岐阜モデル／中村政人
- 083 清流のさざめきから大きなときめきへ／馬場駿吉

第3章 - 記録
Chapter3 -Document

- 086 募集から審査までの記録
- 089 作家支援
- 091 関連プログラム
- 102 展覧会概要
- 104 オープニングセレモニー
- 105 学校団体鑑賞
- 106 ボランティア

第4章 - 資料
Chapter4 -Data

- 110 スケジュール
- 112 広報
- 115 来場者アンケート
- 116 運営体制
- 118 企画委員長・総評
Project supervisor • Comments



ごあいさつ

69回続いた岐阜県美術展を刷新し、3年に1度開催する全国規模の企画公募展として「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」を初開催したところ、3万7千人を超える方々にご来場いただき、心から感謝申し上げます。

本県には、ユネスコ無形文化遺産に登録された「本美濃紙」をはじめ、関の刃物、東濃の陶磁器などの匠の技、そして「高山祭・古川祭・大垣祭」や千年以上の歴史を誇る鶺鴒などの伝統文化が、脈々と受け継がれています。こうした伝統文化や匠の技同様、本展が「清流の国ぎふ」の新たな魅力として、文化芸術の新たな源流の一つとなることを期待しております。

最後に、本展の開催に際し、ご尽力いただいた方々、またあたたかいご支援を賜った皆様に深く感謝するとともに、2020年に開催する「Art Award IN THE CUBE」が一層素晴らしいものになることを心から願っています。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
名誉会長 古田 肇

初開催となった企画公募展「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」に、3万7,579人の方にご来場いただきました。また、目標を大きく上回る790件ものご応募をいただき、心から感謝申し上げます。

本展は、世代、ジャンルを問わず、キューブ(4.8m[幅]×4.8m[奥行]×3.6m[高さ])を無限の小宇宙に見立て、決められたテーマを自由に表現(制作・展示)していただくとするものです。

第1回となった本展では、選ばれた15組が実際に作品を制作し、岐阜県美術館に展示しました。入選者の皆様には、今後のさらなるご活躍を祈念するとともに、岐阜県の芸術文化の振興にお力添えをいただければ幸いです。

この岐阜の地で生まれた小さな一滴が、やがて大河となり海へと注ぐように、全国そして世界へ発信し、「清流の国ぎふ」の新たな魅力と活力の創造に繋げてまいります。

最後に、本展の開催にあたり、ご支援ご協力を賜りましたすべての皆様に、深く感謝申し上げます。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
会長 土屋明之

Foreword

I would like to thank all of the 37,000 people who have come to see this first hosting of the ‘Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2017’ exhibition, a new three-yearly exhibition which accepts entries from all across the country. I would also like to extend my deepest appreciation to all who helped to make this exhibition successful. In Gifu Prefecture we have been handed down a wealth of continued heritage, including Hon Mino-washi paper, registered as UNESCO Intangible Cultural Heritage, the cutlery of Seki, the porcelain of the Tono region, the Takayama, Furukawa & Ogaki festivals as well as the cormorant fishing which has been performed for over a thousand years. Just like these traditional cultures and crafts, I expect that this exhibition will become a new source of cultural arts and further the appeal of the Gifu Land of Clear Waters.

I offer my deepest gratitude to everybody who has worked so hard to create and support this exhibition, and also my most sincere wishes for the future success of the 2020 Art Award IN THE CUBE which will build upon this exhibition.

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2017
Executive Committee

Hajime Furuta
Honorary Chairman

The ‘Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2017’, which has been held for the first time this year as a special exhibition open to general entries, has been visited by 37,579 people. I am also sincerely thankful for the over 790 submissions we received, a number which far exceeded expectations.

In this exhibition we ask participants to freely express a set theme, with no restrictions on genre or age, imagining the 4.8m(w) x 4.8m(d) x 3.6m(h) cubic area as a manifestation of limitless space.

In the first exhibition, 15 selected artists created works and exhibited them in the Museum of Fine Art, Gifu. From here on, I wish them every success in their future efforts and would be most happy if they would continue to help us promote Gifu’s artistic cultures.

Just as a small flow of water from Gifu eventually merges into a great river and flows into the sea, we will continue to develop the appeal and efforts of the Land of Clear Waters, conveying them to both Japan and the world at large.

Finally, I offer everybody who has supported us and cooperated in the hosting of this exhibition my profound gratitude.

Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE 2017
Executive Committee

Akiyuki Tsuchiya
Chairman

開催概要

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017

第1回テーマ

「身体のゆくえ」

現代社会はコンピュータの発達・普及にともなって発展し、また複雑化してきました。社会を写す鏡である現代アートも、コンセプト、素材、表現方法などあらゆる要素について既存の枠を取り払い、複雑化、多様化の一途をたどっています。

アートはあらゆる可能性を追求すべきですが、その展開のあまりの速さ、広さに、発信者である人間が置き去りにされてしまっているのではないかと、多様化そのものが目的化されているのではないかとさえ思われます。

私たちは、美術作品は人間の生の結晶であると考え、今一度、人間そのものである自らの「身体(肉体、精神)」に着目し、その中に何を発見し、何が生まれるのかを問い、現代社会全体をアートの視点で読み直してみたいと考えます。そこで生成される情熱や才能が、丈六のキューブという空間を通して発露される結晶体(作品)を、この「Art Award IN THE CUBE 2017」は大いに歓迎します。

作品条件

4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)の空間(直方体のキューブ)内で展示できること。

目的

- ・新たな才能の発掘と育成
- ・アートに関わる人材の育成とネットワークづくり
- ・新たな形のアートの鑑賞機会を提供

会期

2017年4月15日(土)から6月11日(日)まで

会場

岐阜県美術館(岐阜県岐阜市宇佐4-1-22)

主催

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会、岐阜県

General Information

Gifu Land of Clear Waters Art Festival, Art Award IN THE CUBE 2017

Theme for the 1st installment

“Whereabouts of the Body”

With the advancement and popularization of computer technology, the development of contemporary society has become increasingly complex. Contemporary art as a mirror of society has abolished conventional frameworks in terms of concepts, materials, styles and other aspects, and is therefore getting more and more complex and diverse as well.

Art is supposed to explore all kinds of possibilities, whereas it seems today that the human subjects behind it are being left behind due to the speed and breadth of its expansion, and that diversification has become the actual purpose of art.

Understanding a work of art to be a crystallization of human life, our intention is to focus on the very “body” (in a physical and spiritual sense) that is a human being, and explore what can be found or created within it through a reconsideration of contemporary society at large from the viewpoint of art. The “Art Award IN THE CUBE 2017” provides a cuboid space as a setting to expose crystallizations of such power and passion in the form of various artworks.

Conditions

Submitted works must be displayable in a cuboid space measuring 4.8m (w) x 4.8m (d) x 3.6m (h) .

Purpose

- To discover and nurture new talent.
- To train people related to art and to create a network.
- To offer opportunities for appreciation of new forms of art.

Exhibition period

April 15 - June 11, 2017 (58 days including days on which the museum is closed)

Venue

The Museum of Fine Arts, Gifu (4-1-22 Usa, Gifu City)

Hosts

Art Award IN THE CUBE Executive Committee, Gifu Prefecture

審査員・講評

Juries・Comments



0 JUN

画家／東京藝術大学教授

0 JUN

painter, professor at Tokyo University of the Arts

15人の作品を見て思ったこと。展覧会条件の規定されている空間とどう向き合うか、あるいはそれらを軽々とまたいでゆくものとの静かなバトルになっていたように思う。場、空間、イメージの手に負えない自由度をもっと獲得して欲しいと願います。

When I saw the works created by the 15 applicants, I found that there was a quiet battle between the artists those who struggled to find out how to deal with the conditions of the limited space in the exhibition and those who stepped over such conditions easily. I hope they will more deeply understand and manipulate the unruly freedom of places, spaces and images.

1次審査講評

ジャンルにとらわれない場処からの思考や
豊かな表現行為が試される

絵画、平面での応募が少なかったのはこのコンペの空間条件によるものと推察されますが、たとえば、絵を“描く身体”から、その絵を観る人の“見る身体”にリレーされることは画家にとっても鑑賞者にとっても愉しく深い体験です。「身体のゆくえ」は作品を仲立ちにして両者に架かって現れるものと思います。私としては、そこに届いている絵画表現もわずかではありますがあったと思いましたが、残らなかったのは少し残念でした。ともあれ、最終審査に進んだ作家のこれからの健闘を祈ります。こちらの予想を超える作品が生まれることを期待します。

また、展示空間が「丈六」というサイズの条件があるためか、それを意識した立体やインスタレーション形式の作品を構想したものが多くありました。それに伴いマケットを作った人もかなりいましたが、空間や作品を単に縮尺しただけのものがほとんどで、かえてスケールや魅力を損ねているように思いました。身もふたもない「巨人の視点」ではない、想像力をかき立てるようなマケットを試みてほしいのでは。今回審査が様々な表現領域の方々によって行われましたが、作品もまたジャンルにとらわれず、いろいろな場処からの思考や豊かな表現行為が試されていることの証となるようなコンペになることを願っています。

2次審査講評

キューブ（箱）のゆくえを見せてくれ

個々の作品を観てそれぞれに思うことと、このコンペの条件であるキューブの設定をどう引き受けて、あるいはどう引き受けないで作品をつくっているかということが重なり見えてくるという、これまで前例の無い特異な展覧会だと思った。キューブの中に入ってしまうとキューブを忘れることが出来て中のモノや設えを楽しむことができるけれど、外に出るとキューブが置かれているフロア全体が一望でき、しかしその眺めは決して楽しくはない。箱の中(美術館)にまた箱があるじゃないか！キューブの点在の仕方、そのためのレイアウトとコンストラクションを眺めるもう一つの眼が必要か。それぞれの作家たちはこのことは気にしているのだろうか。ここにある全ての作品は、いずれも誰かの躰のどこかにどのようにか触れている。寝言なのかそうでないのか？この臨床実験は笑いながら尾根を歩くように油断がならない。

屋外に持ち出された箱は、その行為だけで風光を獲得し、更に実寸を見誤らせる錯視もこちらの身体に起こさせ痛快だ。どれも手応えを感じた。そう、「身体のゆくえ」は、見た。なので次は「箱のゆくえ」を見せてくれ。空っぽの箱(躰)でもいからその佇まいを見せてくれ。



十一代大樋長左衛門（年雄）

美術家、陶芸家／ロチェスター工科大学、金沢大学などで客員教授

OHI Chozaemon XI (Toshio)

artist, ceramic artist, guest professor at Rochester Institute of Technology and Kanazawa University

キューブ空間の捉え方、アート概念を再考させられた。大賞作は人の脳と身体バランスを問いかけている。素材は、現代社会に当たり前に在るものをツールとしている。審査員賞作は、人が古来必要としてきた自然の恵みである木を時に廃材ともしてしまう人への警告でもあり、好印象をもった。

The process of this selection made me rethink a cubicle and the concept of art. The work that won the Grand Prize asks the audience what a human brain is and what body balance is. The artists used materials commonly present in modern society as their tools. The work to which the Ohi Chozaemon XI Prize was awarded is a warning to people who sometimes waste trees, which are the blessings of nature and have been necessities for human beings since ancient times. This approach impressed me.

1次審査講評

我々は作品に同期して深く考える。
貴方は何処にいて、何を観ているのか？

800点近い応募があったことに驚いた。それぞれの作品に、真剣に向き合わせていただいた。

プレゼンテーション：高齢の出品者は、手書きのものも多く、一見、古い表現方法だが、逆に明快なものもあった。若い出品者はPCを用いたプロポーサルが多く、一見、わかりやすく感じるが、コンセプトの弱いものが多々見受けられた。

コンセプト：題名と表現が一致していない。説明が長すぎて本意が伝わらない。簡潔明瞭な表現からは意味の深さを逆に感じやすい。

総論：大半にコンセプトと表現のズレを感じた。しかし、優れた企画には強いメッセージを予感することもできた。テーマ「身体のゆくえ」をいかに捉えているのか？が伝わるものに、我々は目を向けた。世界中が現代アートの洗礼を受け、様々な地域の異文化が、同一化されていく。作品から発せられるメッセージが、何かを語りかけてきた時、それに同期して深く考えさせられる。貴方は何処にいて、何を観ているのか？素材や技術はコンセプトともなる。現代アート、伝統工芸、すでにジャンルでない。静かに座して、外面から自らの存在を考えれば体内までもが見え、内面からは限りの無い視界が体を通じて外に向かっていくはずだ。「天地人」「時間と空間」「神と人」「地球と宇宙」「生と死」—太古からのテーマは、思考の自由を与えながら深く脳裏に刻まれていく。この公募展は、新たな才能の発掘と育成を目的にしている。残念ながら選外となった方々には、更なるチャンスとなれば幸いだ。

2次審査講評

再考させられたアートの概念

いま、クラウド化したネット社会によって、感情を伝える言葉の技術だけが巧みになり、身体言語が失われつつある。昔ほど泣かなくなった人、笑わなくなった人、感情を内に秘めるその姿は、時に危うい病的な現象を引起こしている。

テーマ「身体のゆくえ」の捉え方は自由だった。しかし、取り残された感情、怒り、哀れみなどを表現する作品が多かったことは特徴的であった。喜びや楽しみが希薄となり、我々は何かに憂いているのかもしれない。

コンセプショナルには、人の脳と身体との不可思議な関係、人と人の感覚を繋ぐことから新たなコトが生まれる可能性、生死を問うことからの命の尊厳、多くはそんなメッセージ性の強いものだった。

また、産業廃棄物、自然の恵みである木の存在、マンメイドや古来からの素材を問い直す作品からも好印象をもった。私はほとんどの作品に同期し、深く考えさせられた。次回の展覧会を開催するころには、人の喜びや楽しみが多く表現される社会となっていることを願っている。



高橋 源一郎

小説家、文学者／明治学院大学教授

TAKAHASHI Genichiro

novelist, literary scholar, professor at Meiji Gakuin University

楽しくも苦しい最終審査だった。一次審査の企画を見て期待していたものが、実作になってみると意外に面白くなく、逆に、企画では半信半疑だったものが、目の前に実物で現れて圧倒されたりもした。最後に素晴らしい大賞作品を選考できて満足している。

The final selection was enjoyable but painful. Some works lost the attractiveness that they had when they were still in their planning stage and that had raised my expectations in the first selection. However, when presented as final works, they were not interesting anymore and were just boring pieces of work. On the other hand, there were pieces that I found not so convincing in the first selection, but thought were overwhelmingly impressive when I saw them in the form of finished works. I'm very satisfied that we were able to select the most wonderful piece of work for the Grand Prize.

1次審査講評

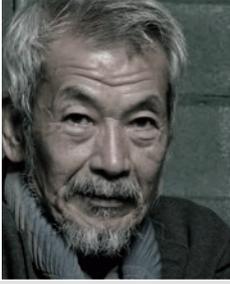
まるで自分がその作品の設計図の共作者、
いや、共犯者になったみたいだ

詩や小説の審査はずいぶんやらせていただいた。だが、美術（と限定できない、もっと広がりのある空間を表現する）作品の審査は初めてで、とまどい、驚き、そして、とても新鮮な衝撃を受けた。まずは、応募作品の多さ。その多様さ。さらに、作品を審査するプロセス自体に。最終的には、4.8m×4.8m×3.6mの空間を占めることになる作品だが、それはまだ、現実には存在していない。最初の審査は提出された「設計図」だけで行われる。文学の審査では、もちろんそんなことはありえない。「美術」の審査では、審査員もまた、その作品の制作に加わらなければならない。しかも、800近くも作品（のようなもの）があるというのに！ 正直なところ、楽しみよりも不安な気持ちの方を多く抱えて始めた審査だったが、進むうちに、どんどん楽しくなってきた。まるで、自分が、その設計図の作者の共作者になったみたい。というか、共犯者になったみたい。ぼくはふだんから、小説をほんとうに楽しみたかったら、まず自分で書いてみることだ、といっている。読むためには、書くのが実はいちばんの近道なのだ。気がついたら、いままで、純粋な観客以外にはなったことがなかった「美術」という場所で、それを「つくる」という秘密に接近させてもらっていたのだ。こんな楽しいことはありません。最高です。たいへんだけど。

2次審査講評

議論の果てに

どんな選考会でも、議論が激しくなるほど楽しい。みんなの意見がまとまらないほど嬉しくなる。今回は特にそうだった。賞の一回目、対象は美術、話し始め、考え始めると、きりがなく、終わりがなく、その「終わりのない」白熱した議論を産んだ、素晴らしい作品と作者たちに感謝したい。大賞の1作と審査員賞の7作、ほとんど差はなかったと思う。もし、大賞の「cranky wordy things」と他の作品とに違いがあるとするなら、この作品には、わたしたちの無意識に潜む禍々しいものへの視線があったような気がする。わたしたちが作品を見る、のではなく、わたしたちが作品に見られている。そんな作品であるようにわたしには思えた。また、わたしが審査員賞に推した「THE MAUSOLEUM -大霊廟-」は楽器であるのに、なぜかわたしには原子炉に見えた。そこにも、やはり不穏なものがあるようにわたしは感じた。そんな作品が生まれた理由について考えること、それがわたしたち審査員や鑑賞者に与えられた責務なのかもしれない。



田中 泯

ダンサー

TANAKA Min

dancer

カラダで作品に向き合うこと、がどの位、苦痛を伴うことか、分かってもらう必要はない、が、キューブの空気に僕のカラダの超部分達は間違いなく反応しておった。ライブな生こそが作品性の根拠だと、今、思った。

It is not necessary to make an audience understand the pain of an artist who creates a work of art and faces and feels it with his/her body. But, surreal parts of my body did definitely react to the atmosphere of the cubes. I realized at that moment that the value of a work of art lies in its “real-time” freshness.

1次審査講評

不在や不明にこそ愛こそが表現の基本だ

「身体のゆくえ」という如何様にも処理できそうな言葉が主催者から世界に投げ出されてしまった。歴史は常にカラダのゆくえを整理し始末してきた筈だ。僕なんざお蔭で今だに行方不明だ。師・土方巽は「時代に添寝するようなオドリは要らないヨ!」と言っていた、いや逆だったかも知れない。

ユクエという時と場所、カラダという現実と嘘。カラダは見せない物事、見えない事態、語られない言葉、現わせない言動、飛び出さない衝動に満ちている。他人はどうか知らないが、僕はカラダとともに育ってきた子供だ。大人はまだない。……等々。世迷い事を考え、表と裏をくっつけ、考える。

八百もの応募者の、あまり野望を感じなかったのが残念だが、計画・企画・希望・夢を読み見する僕が、分かりたくない事がある、どうして歴史に残る物や事を作ろうとするのだろう。不在や不明にこそ愛こそが表現の基本だと思うのだけれど。

2次審査講評

へい!キューブ

審査に関わって、現在何を感じ思っているかを語ることはムズカシイ、だから意見の市場の一例として話してみよう。僕の予想以上に、募集に応じた多数の人々の多数の思い考えに接して自分の脳内の言語達が乱運動を始めた、混乱よりは喧騒という感覚か、面白い!と思った。審査をしながらの不審も許す僕自身、時空のどら辺で僕が今暮らしているかという表現、評価が定まるということに興味を断った事もあった。今思うから成立する人生、歴史の歩行のどこでもライブな作品性、ダンサーという生にとって決定は決意だ。カラダという個人の事実から発した因果に表現は停留し出発する、と思う。こんなグズな思いでも僕には面白い。型こそ違え僕達は皆カラダという箱壁の中に居る、居場所はそこにしかない、キューブという美術館に表現の未来は参集するのだろうか?



中原 浩大

彫刻家、美術家／京都市立芸術大学教授

NAKAHARA Kodai

sculptor, artist, professor at Kyoto City University of Arts

予想は、良くも悪くも裏切られて、期待を込めて大賞を贈り、敬意を表して個人賞を選ばせていただきました。

My expectations were betrayed for better or worse. I selected the winner of the Grand Prize based on expectations for the future and selected the winner of the Nakahara Kodai Prize out of respect for the artist.

1次審査講評

お前にこれがわかるかとばかりにオルタナティブなクオリティがつきつけられる展示となれ

「身体」ではなく、「身体のゆくえ」なのであって、大切なのは「ゆくえ」についての回答だろう。（ちなみに審査を依頼された時点で既にテーマは決定していたので、この解釈は私見だが。）だから、応募書類に目を通した段階でまず私が判断に迷ったのは、「ゆくえ」についてはよくある話だけれど、いわゆるオーセンティックなクオリティを予想させるプランの位置づけだった。これらは一次審査会場での選考プロセスの初期段階ではかなりセレクトされていたが、選考が進むにつれて姿を消していった。私自身もこの機会だからこそ取り上げてみたいと思ったプランを優先したかったので、この結果には納得している。その一方で、人間の死や終末の現実について取り上げようとする内容のものをブッシュしきれなかったことは後悔している。現場に向かい合う立場からストレートにアプローチしようとするもの、抽象化することのリアリティをつかもうとするものなど、いくつか興味深い内容があった。

一次審査の結果について高慢さを怖れずに言うとするれば、角が丸くなってしまったというのが率直な感想だ。最終的には私の感想が見事に裏切られて、お前にこれがわかるかとばかりにオルタナティブなクオリティが突きつけられる展示となってくれると期待している。

2次審査講評

「ゆくえの兆し」への期待

応募のためのプランニングから、昨年夏の一次審査を経て今回の展示の完成までの長丁場を悠然と前進し続けた方もいれば、時間の経過とともに起きる心の動きに抗うべきか身をまかせろべきか悩まれた方もいらしたように感じながら展示を拝見しました。お疲れ様でした。

私にとっての大賞選考の最後のキーワードは、やはり「ゆくえ」でした。もう少し詳しく言えば「ゆくえの兆し」、もう少し率直に言えば「ゆくえの兆しへの期待」です。実際のところ心を決めたのは、議論の終盤に「それは触ってしまっているからだよ」（触っているからだよだったかな）と田中泯さんから腕をぐっと掴まれた瞬間でした。（その瞬間まで、「私のことを考えてほしい」ではなく、「あなたの考えが聞きたい」と思っていたので。でも「あなたの考えが聞きたい」なんだけど、今でも。）

体が反応してしまう展示が一つだけありました。実は予想外の反応で、その事実をどう受け入れるかしばらく自問しました。この展示を個人賞とさせていただきます。



三輪 眞弘

作曲家／情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 学長

MIWA Masahiro

composer, president of Institute of Advanced Media Arts and Sciences [IAMAS]

プロポーザルだけで選んだ一次審査の印象から、想定以上の作品になっていたかが結果となったと思う。大賞を一つだけ決めることはとても難しかったが審査員にとってもエキサイティングな議論が交わされ満足のいく結論が出せたと思う。

The final decision was made based on to what extent each work exceeded our expectations from when the proposal submitted for the first selection. While it was very difficult for us to narrow down the winner of the Grand Prize to one finalist, I think the juries were able to reach a satisfactory result through exciting discussion.

1次審査講評

未来の「芸術」を根本から再定義するヒントとなるか

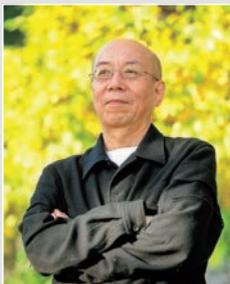
「自分が高く評価したプランの少なからずが選ばれた。しかしすべてではなく、結果的に選ばれなかった秀逸なプランもあった」というのが第一次審査を終えた今の感想である。おそらくこれは他の審査員も同様だろう。しかし、審査を終えてもぼくの緊張感は変わらない。選ばれたプランが本当に期待したものをを見せてくれるのか、自分が評価しなかったプランがその予想を裏切ってくれるのか。ぼくにとっては、これから実現される作品の「質」や「わかりやすさ」ということより、それらが未来の「芸術」を根本から再定義するヒントとなるものなのかが最大の関心事なのである。つまり、ぼくの「評価」とは作品の出来 / 不出来を判定することではない。そうではなく、無数の提案の中から血眼になってその新しいヒントを探し出し、占う作業に他ならない。今まで「芸術」が人間にとってかけがえのないものだったとしても、人工知能が絵を描き始めたこの時代に、これからもそうであり続けるのかは決して自明なことではないのだから。

2次審査講評

覚めた「物の怪」

大賞の「cranky wordy things」も、審査員賞の「移動する主体(カタツムリ)」も、それぞれが、今回のテーマである「身体」に対して、きわめて特異な形で切り込んだ作品だった。どちらの作品も少しだけ「ものが動く」ものであり、しかも「タネも仕掛けも」よく見ればすぐ分かるようなものであるというも共通点である。同時に、ただそれだけのことで、これほど不思議な「何か」を感じさせることができるというのは、ぼくにとっての発見でもあった。

両作品においてそれは、不気味な何かの気配のようであり、ぼくに「物の怪」という言葉を思い出させたものの、決してそれらは呪術的な意匠を凝らしたものではない。むしろ正反対とも言える、クリーンなCUBEの中で起きた、日常化したテクノロジーによる「覚めた」体験なのである。そして、それこそが、作品プランの段階では想像もできなかった、現実空間の中に置かれた作品の力なのであり、現代を生きるアーティストからの、この芸術祭への応答だったと思う。



鷺田 清一

哲学者／京都市立芸術大学学長

WASHIDA Kiyokazu

philosopher, president of Kyoto City University of Arts

身体の深淵を探るもの、現代の身体状況と格闘するもの、身体へのこだわりに見切りをつけるもの(?)など、身体とはこんなにも^{くま}昏い問題かとあらためて思いました。身体はほんとうはいやというほど社会にからまれていて、それが陰に陽にひしめていました。

The works included one that explored the abyss of the body, one that fought against the modern-day status of the body, and one that has lost respect for the body (?). These works reminded me that the body has such dark aspects. The body is intensely intertwined with society. In their works, there were so many issues thronging with each other, positively and negatively.

1次審査講評

身体をもつということ、身体であるということの悲痛、ひりひりするような痛みがそのまま見る者を巻き込むような空間へ

800点ほどの作品プランの審査は、一つ一つ、文章から、ラフスケッチから、立体的な仕上がりを想像しなければならないので、アタマがぐんぐん熱を帯びて爆発しそうでした。さすがにこれだけの数の作品プランとなると、ああこれかという既視感をともなうもの、あまりにおかしくてしばらく笑いが止まらないものから、アタマではかろうじてわかっても実際にこの空間の中に身を置けばどんな感覚が発生するのか、想像もつかないようなものまで、中身はまことに多彩でした。《身体ゆくえ》を、すこし距離をおいて批評的・対象的に捉えようとする作品が多かったように思いますが、与えられたキューブの空間そのものを、じぶんでもよくわからない未来の身体ないしは身体感覚として、不可解なままに表現する作品がもっとあるかと想像していました。

身体をもつということ、身体であるということの悲痛、そのひりひりするような痛みがそのまま、見る者を巻き込んでしまうような空間の呈示として。べたべたと貼りついてくる、ちりちり刺してくる、あるいはふわっと、あるいはぎゅっと包まれて窒息してしまいそうな、そういうちょっと薄気味わるいほどの空間にも、このあとの実作で出会えるのを楽しみにしています。

2次審査講評

身体は世界をつくる生地

「在る」ということは、見えるということ、聞こえるということ、匂うということ。つまりは知られ、感じられているということ。その意味で、世界は身体という生地できています。だけど、その生地である身体のごくわずかをしか、わたしたちは知りません。身体はわたしたちにとって深い謎でもあります。

世界はどうしてこんなふうであるのか、それをわたしたちは、身体に射す影をとおしてしか掴めません。そこにはもちろん歴史の^{くら}昏い影も射しています。出品者たちはそういう影をたよりに、それぞれに独自の感覚で、世界の今を、そしてそのゆくえを察知しようとしています。最終的に選ばれた作品も、物質としての身体に執拗に向きあうもの、おのれの身体感覚を掘り下げるもの、身体の記憶を、いのちの触感を、他の生きものとの連続を探るもの、身体を組み立てている無言の制度を暴くもの……と、現代の身体状況と格闘するものばかりです。

アートとは、身体という、世界のこの生地に仕込まれるふくらし粉のようなもの。それがこのように多様にあるかぎり、世界はまだ大丈夫だと思えました。

ART AWARD IN THE CUBE 2017

清流の国ぎふ芸術祭

身体
の
ゆ
く
え

不在や不明にこそぐ
愛こそが表現の基本だ
——田中 泯ダン

我々は
作品に
同期して
深く考える。
貴方は何処にいて、
何を観ているのか？
——
十一代
大樋長左衛門（年雄）
美術家、陶芸家

未来
根本から

作曲家
身体をもつということ、
身体であるということの
悲痛、ひりひりするような
痛みがそのまま、見る者を
巻き込むような空間へ

——鷺田清一
哲学者 / 京都市立芸術大学学長



Chapter

1

図版
Catalogue

ジャンルにとらわれない、
いろいろな場処からの思考や
豊かな表現行為が試される

画家／東京藝術大学教授
OJUN

☆一次審査講評の抜粋

審査員メッセージ

お前にこれが
わかるかとばかりに
オルタナティブな
クオリティが
突きつけられる
展示となれ

彫刻家／京都市立芸術大学教授
中原浩大

まるで自分が
その作品の設計図の
共作者、いや、共犯者
になったみたいだ

小説家／明治学院大学教授
高橋源一郎

来の「芸術」を
再定義する
ヒントとなるか
三輪眞弘

作曲家／情報科学芸術大学院大学教授

を

凡例

Notes

- 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017の出品作品を掲載した。
- 制作年は、すべて2017年である。
- 図版解説、第2章のレポートは鳥羽都子が担当した。

Title

HANDS

HANDS

Artist

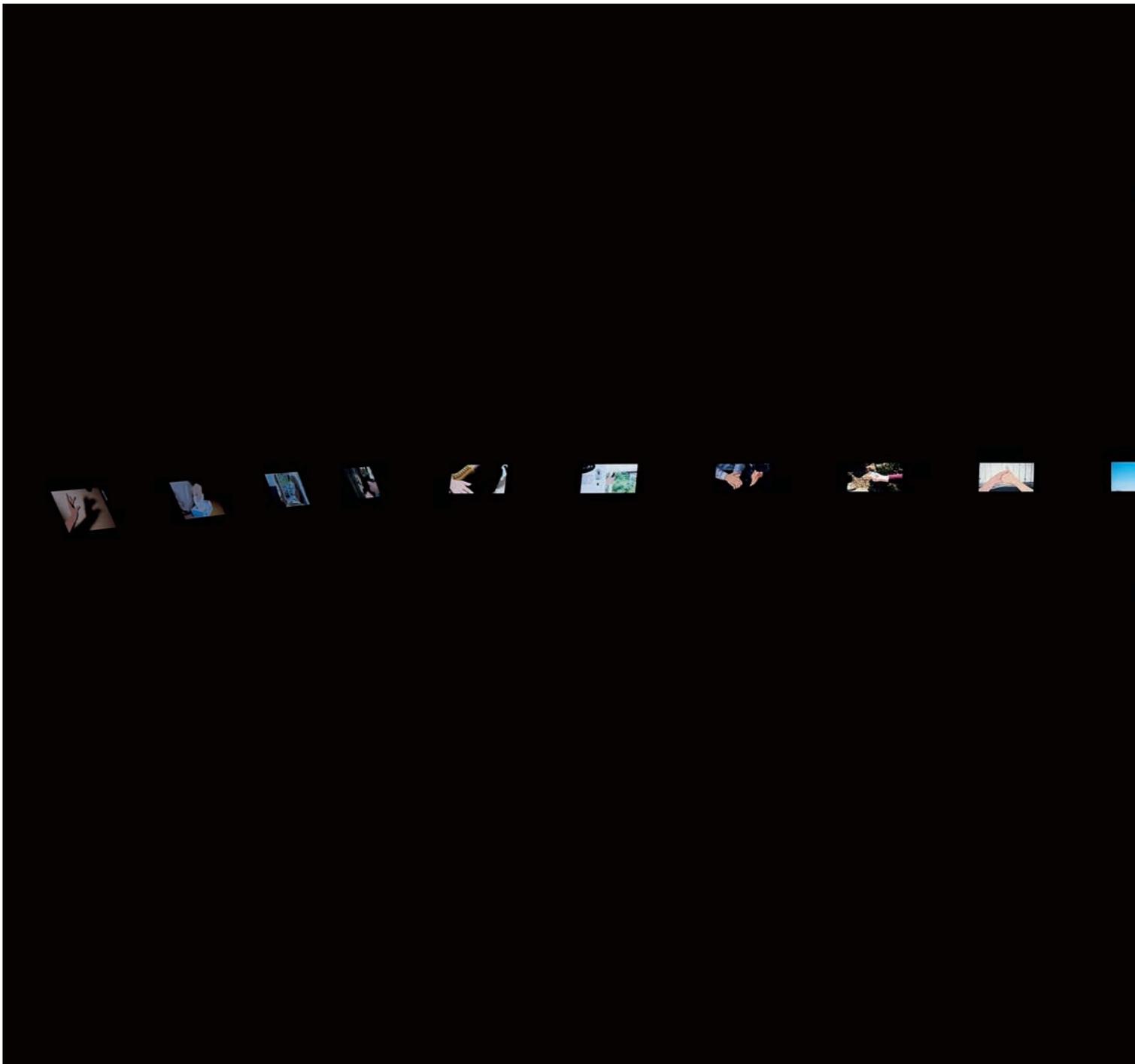
佐藤 雅晴

SATO Masaharu

人が手を使って世界と関係をつくる実写と、手の部分だけをトレースしたアニメーションが混在する映像作品。作家にとってトレースとは、対象を「自分の中に取り込む行為」。膨大な枚数の作画は、デジタル機器を駆使する身体／手によって生み出されています。

A video work mixing actual footage of people using their hands to make a connection with the world, and animation tracing the hands alone. For the artist, tracing is the act of taking the subject “inside oneself.” The vast number of pictures have been created by the artist using both digital devices and his own body through his hands.





牡丹と手



空と手



指相撲の手



夫婦の手



佐藤 雅晴
SATO Masaharu

1973年大分県生まれ。茨城県拠点。

Born in Oita Prefecture in 1973 / Based in Ibaraki Prefecture

東京藝術大学美術学部油画学科卒業、東京藝術大学大学院修士課程修了。

2000-2010年、ドイツのデュッセルドルフに滞在。

2009/City_net Asia 2009 (グループ展) / ソウル市立美術館 / ソウル

2012/ 第15回文化庁メディア芸術祭 / 国立新美術館 / 東京

2013/ ナイン・ホール(個展) / 川崎市民ミュージアム / 川崎

2014/ 日常 / オフレコ / 神奈川芸術劇場 / 横浜

2016/ 東京尾行(個展) / 原美術館 / 東京

Artist's Comment

「やはりどこかで地方の公募展として認識された感がある。岐阜駅の前シャッター商店街などの空きスペースを利用するなど、公募展という雰囲気から脱却したもっと大きな視野で展覧会をつくってほしい。学芸員やスタッフ、ボランティアの方々は、作家に対してしっかりとサポートをしていたと思います」



Title

ニョッキ(如木)2017

Nyokki 2017

Artist

柴山 豊尚

SHIBAYAMA Toyohisa

この世に存在するすべてのものは、留まることなく常に移り変わります。その無限に広がる一瞬を、木の積層材を使った造形を鏡に映すことで表現。「身体とは、精神を伴って初めて成り立つ」という作家のテーマが空間に結実した作品です。

Everything in this world is constantly changing. The infinitely expanding moment is expressed by reflecting structures created in laminated wood in mirrors. This work creates a space bringing to fruition the artist's theme that "the body is something that only comes into being along with the spirit."









柴山 豊尚

SHIBAYAMA Toyohisa

1955年岐阜県生まれ。岐阜県拠点。

Born in Gifu Prefecture in 1955 / Based in Gifu Prefecture

武蔵野美術大学造形研究科修了、中学校勤務。「彫刻村」(郡上市)に1985年から参加、「歌となる言葉とかたち展」(郡上市)に2011年から参加。

1978/ 第12回日本国際美術展 / 群馬県立近代美術館賞 / 東京都美術館

2002/ 彫刻村2002展 / 岐阜県美術館県民ギャラリー

2015/ 歌となる言葉とかたち展 / 岐阜県郡上市

2016/ 第76回美術文化展 / 新人賞 / 東京都美術館

Artist's Comment

「キューブのための制作を通し、空間の捉え方と表現の仕方を学ぶ貴重な経験となった。今後の制作の方向も明らかになってきた。岐阜県内の作家との交流や美術関係者との繋がりができた。また、(地元各務原市の)情報誌などに特集をしていただき、地元の方々に活動の様子を知っていただくことができた」



Title

この部屋とダンス

Dance with this room

Artist

谷本 真理

TANIMOTO Mari

粘土で形を作り、柔らかいうちに壁や床に投げつける。心地よい身体感覚を探す振る舞いと作為を無にする行為とが作家自身の意図を崩し、空間を変化させます。空間内のすべてがまるでダンスの軌跡のような変化の予感に満ちていきます。

The artist creates shapes out of clay, then throws them against the wall or floor while still soft. Working in search of a comfortable bodily sensation and acting so as to render another action meaningless both destroy the intentions of the artist herself and change the environment. The entire space becomes filled with the anticipation of change, as if it were the trajectory of a dance.









谷本 真理
TANIMOTO Mari

1986年兵庫県生まれ。東京都拠点。

Born in Hyogo Prefecture in 1986 / Based in Tokyo

京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻卒、

京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。

2011/ 新・陶・宣言 / 豊田市美術館 / 愛知県豊田市

2013/ 黄色地に銀のクマUスーパーホームパーティー / 神戸アートビレッジセンター / 兵庫

2014/ Under 35「谷本真理 個展」 / BankART studio NYK / 神奈川

2015/ 中身のパノラマ / コーポ北加賀屋 / 大阪

2016/ こわすための壺と落ちていく絵 / 波さがしてっから / 京都

Artist's Comment

「『岐阜の陶土を使いたい・ワークショップをしたい・滞在制作をしたい』と希望をだし、マッチングをうけました。岐阜県現代陶芸美術館でのワークショップでは、子供達のパワーがすごくて、あれくらいパワーに溢れた空間を私も作らねば!と思いました」

Title

縫いの造形

The shape of sewing

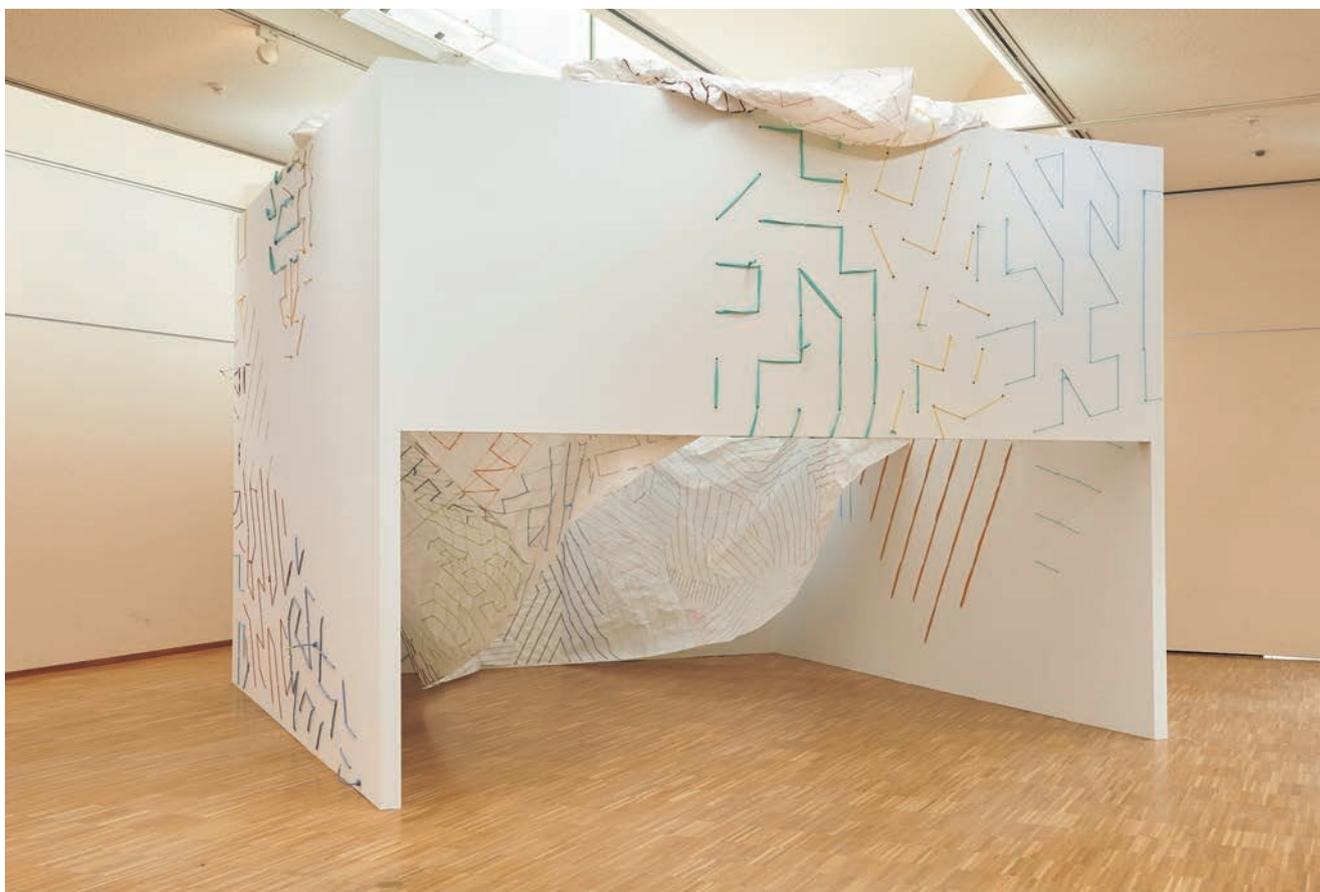
Artist

中村 潤

NAKAMURA Megu

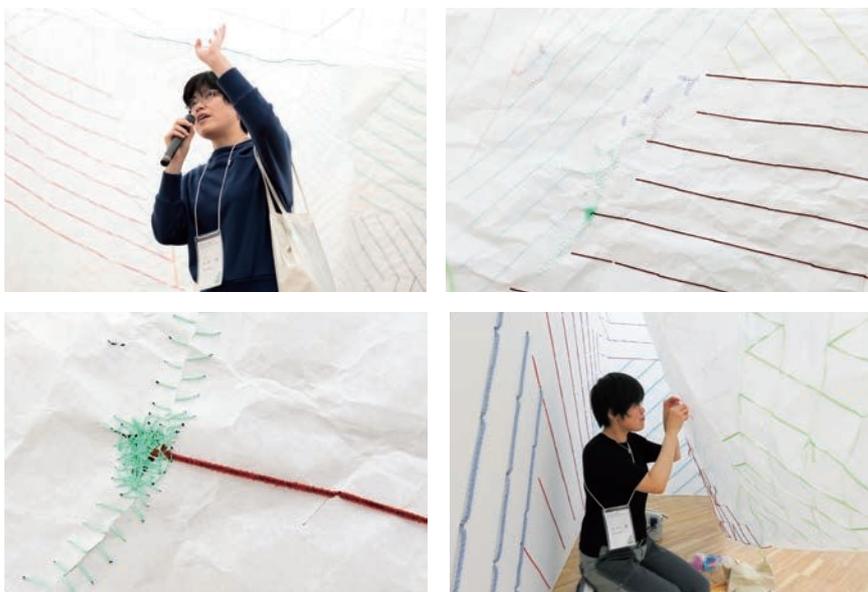
紙を糸で縫ってキューブと同寸の巨大な紙袋をつくり、キューブの壁と縫い合わせます。そうすることで生まれる不確かな形、縫い目、上部からさす光、糸、運針の感覚、縫う行為が溶け合い、見えているものを通して、身体の少し先にある「記憶」や「経験」を呼び起こします。

The artist has sewn paper together to make a gigantic paper bag with the same dimensions as the cube, then sewn this onto its walls. The resulting uncertain shapes, stitches, light passing through from above, and threads, as well as the sense of the movement of the needle and the actual act of sewing all blend together so that what is seen evokes “memories” and “experiences” a little in advance of the body.









中村 潤
NAKAMURA Megu

1985年京都府生まれ。京都府拠点。

Born in Kyoto Prefecture in 1985 / Based in Kyoto Prefecture

京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。

2011/ゲンビどこでも企画公募2011展 / 谷尻誠賞 / 広島市現代美術館 / 広島

2012/パン・マリー(個展) / ギャラリー SUZUKI / 京都

2014/Art Court Frontier 2014 #12/アートコートギャラリー / 大阪

2014/AMI AMI ～トイレットペーパーを編む～(個展) / 美濃和紙の里会館 / 岐阜

2015/アートの秘密基地展 / 浜田市世界こども美術館 / 島根

2017/めいめいの重なり / アートスペース虹 / 京都

Artist's Comment

「個人的に起こったことと、作品制作を結び付けてみようとした初めての試みであった。技法や素材の持つ『構造』『社会的背景』『個人的事象』をさまざまにつないでいき、作品として成立する方法を今後探っていきたい。

また、これまで一人で大体の作品を制作していたが、初めて二人でないと難しい状況になったのは驚きであり、新しい発見であった」

Title

蘇生するユニコーン

Revive the unicorn

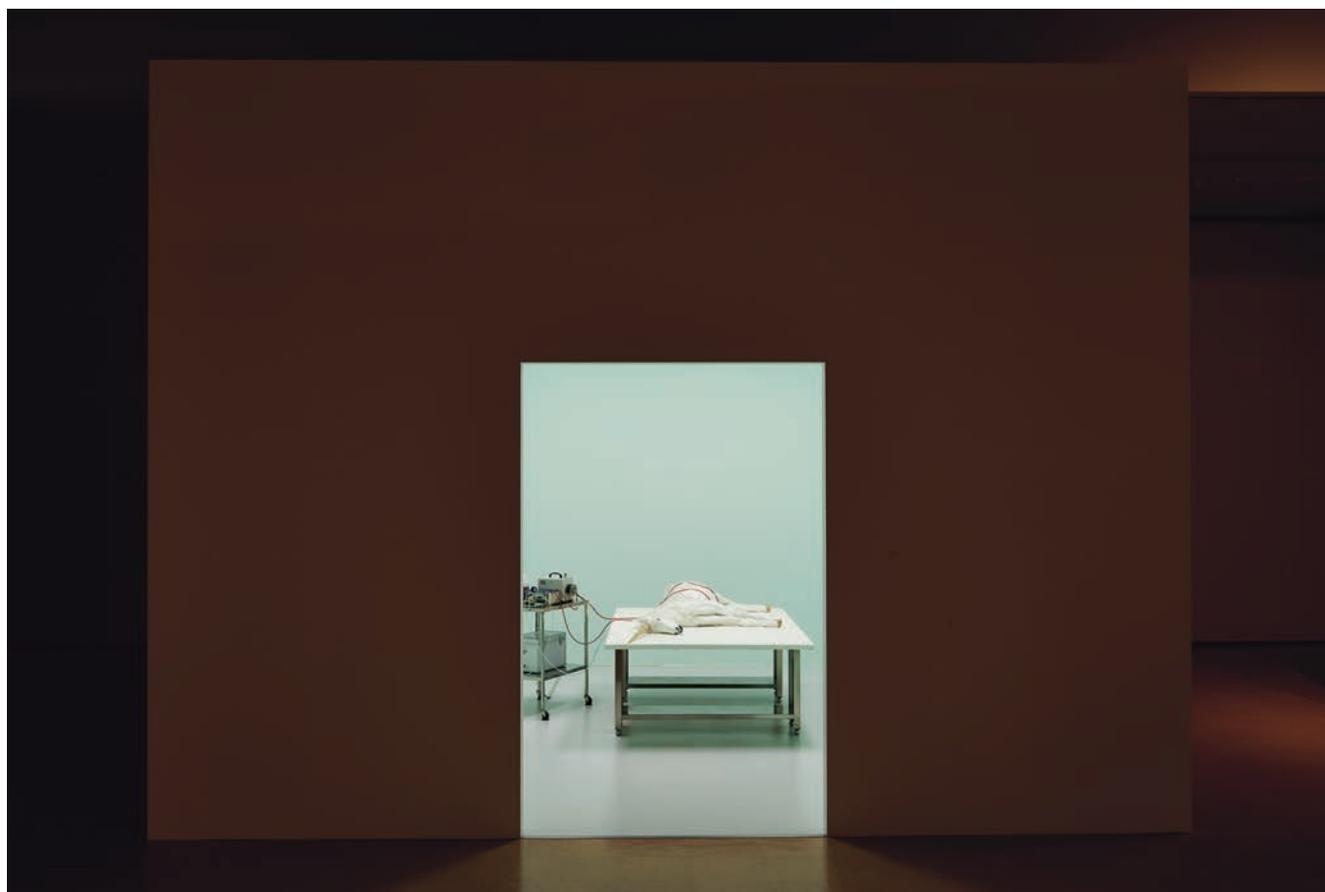
Artist

平野 真美

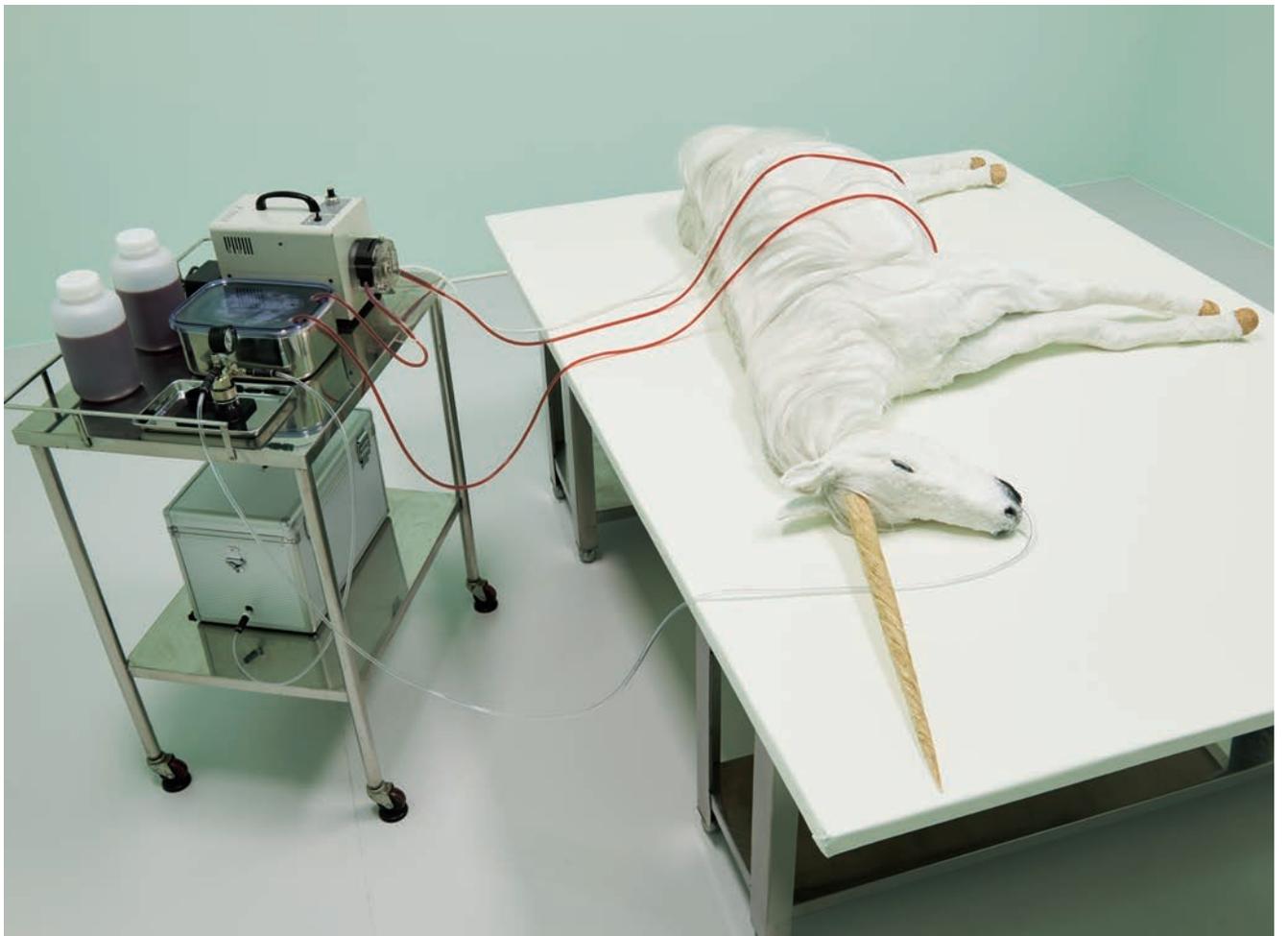
HIRANO Mami

人々の脳内に屍となって横たわる非実在生物を実際に出現させます。骨格・内臓・筋肉・皮膚などをかたちづくり、肺に空気を送り、血液を循環させ、純真さの象徴であるユニコーンに生命を吹き込みます。それは失った夢や希望・幻想を蘇生させる瞬間でもあるのです。

This work brings to life an imaginary animal from where it had been laid to rest as a corpse in the human mind. Creating the forms of its skeleton, internal organs, muscles, skin, and other body parts, pumping air into its lungs, and giving circulation to its blood, it breathes life into the unicorn - the symbol of purity. This also serves as a moment to revive our lost dreams, hopes, and imaginings.









平野 真美
HIRANO Mami

1989年岐阜県生まれ。東京都(2017年4月まで)、岐阜県拠点。
Born in Gifu Prefecture in 1989. Based in Tokyo (by April 2017) ,Gifu Prefecture.

名古屋造形大学造形学部造形学科情報デザインコース卒、
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端藝術表現専攻修了。
2014/トーキョーワンダーウォール公募2014入選作品展 / 東京都現代美術館
2015/REN-CON ART PROJECT 一連茎する現代アート / 名古屋市芸術創造センター
2015/ 大名古屋電腦博覧会2015/ 名古屋市民ギャラリー矢田

Artist's Comment

「作家としての自分が、自分が目指しているものと比べてどの位置にいるのかが分かり
何が必要なのかを考えるきっかけを得たことが一番大きな収穫でした。また、多く
の方と関わって制作することや、他の出品作家との交流の内に、自分の作品のどんな
部分を特化していくべきなのかを考えることができました。
このコンペではキューブという展示方法が一番の特徴として語られています。丁寧
な作家支援も作家にとって大きな特徴だと思います」

Title

モノについて

About an object

Artist

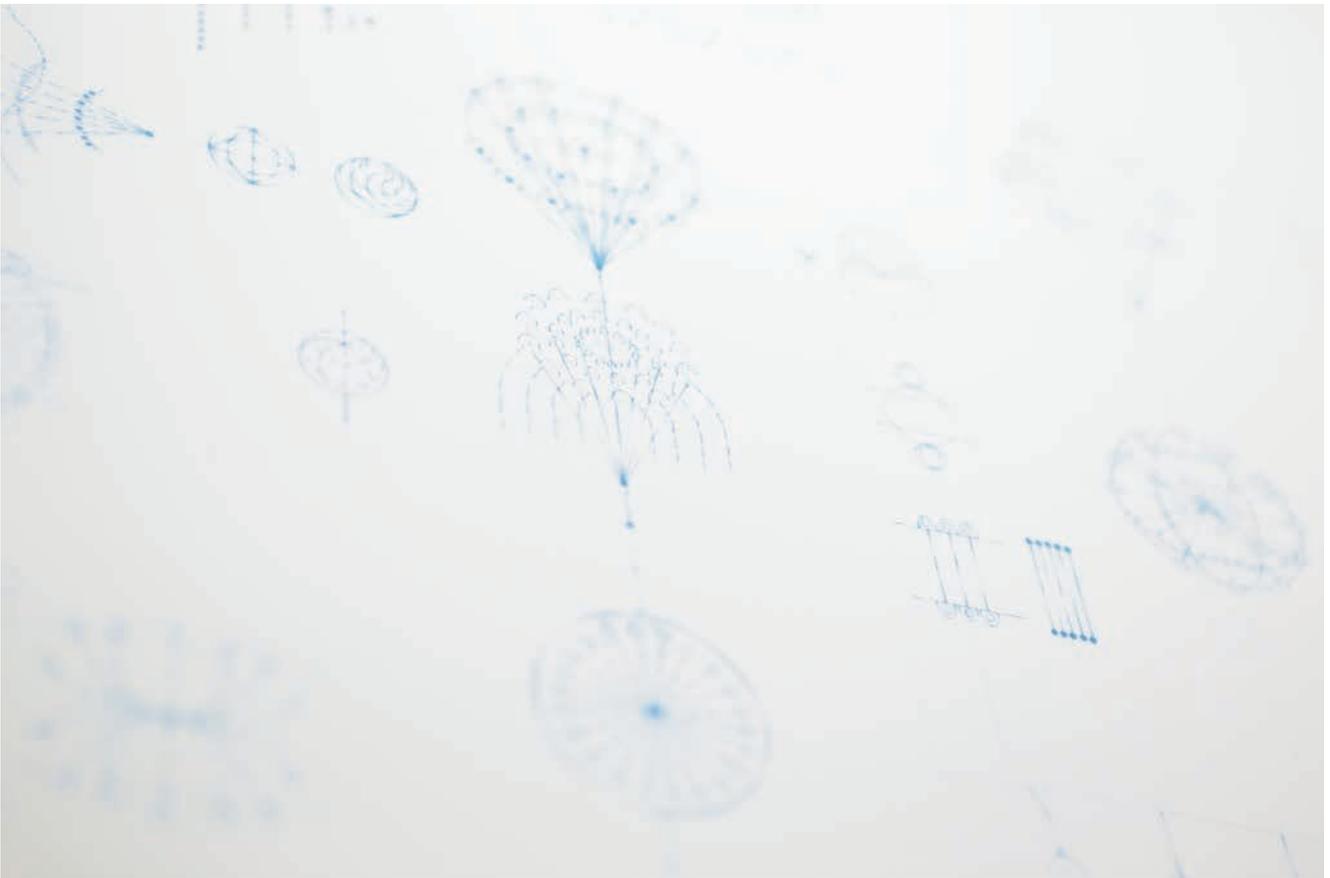
堀川 すなお

HORIKAWA Sunao

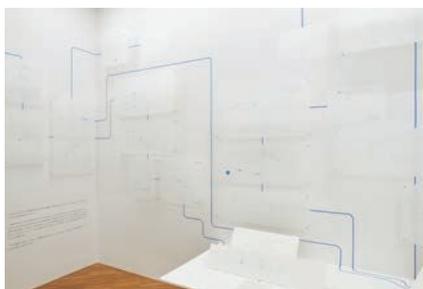
実際に目の前にあるモノと、そのイメージは同じなのでしょうか？ 観察と分析を通じ、言葉からモノの姿を図面のように描き起こす実験的な平面作品を通し、理解や共有のあり方への懐疑を空間全体で提示します。

Are actual objects in front of us and their images really the same? This work presents the artist's skepticism of the concepts of understanding and sharing by means of experimental two-dimensional works depicting the transformation of words into objects in the form of plans, through observation and analysis.









堀川 すなお
HORIKAWA Sunao

1986年大阪府生まれ。大阪府拠点

Born in Osaka Prefecture in 1986 / Based in Osaka prefecture

クーパーユニオン芸術大学留学、京都市立芸術大学美術研究科絵画専攻油画分野修了。

平成27年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてニューヨーク滞在。

2012/VOCA展—新しい平面の作家たち2012/ 上野の森美術館 / 東京

2013/クリテリウム87 堀川すなお(個展) / 水戸芸術館現代美術ギャラリー第9室 / 茨城

2015/群馬青年ビエンナーレ2015 奨励賞 / 群馬県立近代美術館

2015/解釈と行為 SEEING AND PRACTICING(個展) / 大阪府立江之子島文化芸術創造センター Room2/ 大阪

Artist's Comment

「岐阜県高山市で行ったワークショップを通し、人はどのようにモノを見て理解しているかを探りました。ワークショップ後は、子供たちや学校の先生に、子供達自身や先生から見て解釈の違いが言葉や絵にどのように表れているのかを聞き取りを行い、とても良いお話を沢山聞くことができました。とても沢山の発見ができるお話や経験を得たので、まだまだとめきれない部分が多いのですが、制作過程でも展示でも今後、より深く”解釈のメカニズム”を考え作品にしていけるためのいい機会をいただけ感謝しております」

Title

透明の対話

Transparent dialogue

Artist

松本 和子

MATSUMOTO Kazuko

フレスコ技法を用いて、時代や社会から影響を受けて彷徨う記憶の断片や気配を描きます。意識の痕跡を昇華させたような光景は、作家にとって他者との共通感覚のようなもの。古典技法を通して、身体や記憶、空間の表現について今日的な可能性を探ります。

Using the fresco technique, this work depicts fragments and hints of elusive memories influenced by different eras and society. Scenes like the sublimation of the vestiges of awareness are for the artist like sensations shared with others. She uses this classical technique to explore the contemporary possibilities of the body, memories and spatial expression.









松本 和子
MATSUMOTO Kazuko

1988年大阪府生まれ。京都府拠点。

Born in Osaka Prefecture in 1988 / Based in Kyoto Prefecture

京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻壁画修了。

2016年から下京渉成小学校(京都)で滞在制作。

2015/2015京展 / 京展賞(最高賞)受賞 / 京都市美術館 / 京都

2016/ 愛好家の面影(個展) / MATSUO MEGUMI+VOICE GALLERY pfs/w/ 京都

2017/ 京都府新鋭選抜展 - Kyoto Art for Tomorrow - / 朝日新聞社賞受賞 / 京都文化博物館 / 京都

Artist's Comment

「『フレスコにはまだ現代的な可能性があるのでは』と探っていた中の入選だったので、続けていく自信ができました。また今回、漆喰パネルの譲渡を試みて想像していた以上に反応があり、今後は最終的に分割して譲渡まで含めて作品とするのも良いかもしれないと思いました。

運営の方々と密に連絡や打ち合わせを重ね、ボランティアや専門家の方々を含め大勢の協力者たちに手伝ってもらったことで完成した作品。これからもっと大きな場で制作をしていくためにも、今までの個人制作の壁を一つ越える第一歩になったと感じています」

Title**庭のほつれ**

I'm waiting for the time, when that field is opened again.

Artist**三枝 愛**

MIEDA Ai

自身の生まれ育った環境とその変化を追うインスタレーションシリーズ。東日本大震災以降、激減し、椎茸農家や周辺環境の変化を引き起こしてきた原木を、箱の中(キューブ)に一時的にとどめ、展示空間の外側へと意識を開いてゆく場をつくります。

This installation series explores the environment in which the artist grew up, and how it has changed. The artist has temporarily placed logs used to grow shiitake mushrooms, which have been in short supply since the Great East Japan Earthquake, in a box (the CUBE) to spread awareness outside the exhibition space of the changes faced by mushroom growers and their environment since the quake.









三枝 愛 MIEDA Ai

1991年埼玉県生まれ。埼玉県,京都府拠点。

Born in Saitama Prefecture in 1991 / Based in Saitama and Kyoto Prefectures

東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒、
同大学院美術研究科絵画専攻修士課程在籍中。

2016 / MORPH / 元・立誠小学校 / 京都

2017 / 群馬青年ビエンナーレ2017 / 群馬の森野外展示作品賞 / 群馬

2017 / 石が残っている Will is left / 小金井アートスポットシャトー2F / 東京

Artist's Comment

「作品制作に付随してくる交渉やプレゼンの経験をたくさん与えていただいて、すごく勉強になった。作家支援は、他の公募展との一番の違いだと思う。しかし、応募者の一人としては、美術館内に造られたキューブ内で『小宇宙』と言われても去勢された感じがぬぐえなかった。

実際に参加することが決まって、与えられた箱そのものも、作品と共に育てていける環境をつくりたいと思った。屋外での展示となり、雨風対策や消防法への対応を考えていく中で、事務局をはじめたくさんの方にお世話になり、特に大雪に見舞われながら設置工事を進めてくれた大工さん、初夏の強い日差しの中、作品と鑑賞者の安全を守ってくれた監視員の皆さんには本当に感謝しています」

Title

Conduit (導管)

Conduit

Artist

三木 陽子

MIKI Yoko

触覚は、客観・主観両方を持ち、外部と内部、無意識と意識を結び付ける、純粹で根源的な感覚。自身の手から生まれた陶のオブジェに、それらと相反する概念を持つ工業製品を組み合わせて壁面に張り巡らせ、見えざる世界と見える世界の境界を表現し、身体の内部に眠る無意識を喚起させるインスタレーション。

Touch is a pure, primordial sense that has both objective and subjective aspects and connects the exterior and interior, unconsciousness and consciousness. Ceramic *objets d'art* made with the hands themselves are combined with industrial products with contrasting concepts and arrayed around the walls as an expression of the border between the unseen and seen worlds- in an installation that awakens the sleeping unconscious within the body.







photo:Kaoru Minamino



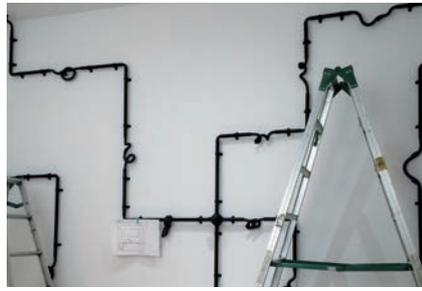
photo:Kazushi Uehira



photo:Kazushi Uehira



photo:Kaoru Minamino



三木 陽子
MIKI Yoko

1963年兵庫県生まれ。京都府拠点。

Born in Hyogo Prefecture in 1963 / Based in Kyoto Prefecture

大阪芸術大学芸術学部工芸学科陶芸専攻卒、

大阪芸術大学芸術学部芸術専攻科工芸専攻修了。

大阪芸術大学芸術学部工芸科陶芸コース非常勤講師。

1986/ 第1回国際陶磁器展美濃 '86/ 入選 / 岐阜県多治見市

2004/ 公募京都芸術センター2004/ 京都芸術センター / 京都

2009/ 韓日米青年作家交流展 / 韓国工芸文化振興院 / ソウル

2014/ 台湾国際セラミックス・ビエンナーレ2014/ 新北市鶯歌陶磁博物館 / 台湾

Artist's Comment

「様々な分野や世代差もある作家達の表現が一堂に集まったこの展覧会は非常にユニークでその中で自身の表現の在り方も再確認出来ました。チャレンジして本当に良かったと思います。

そして作家の為に関係者の皆様、各々のプロフェッショナルがご尽力頂いたことに心より感謝しております。沢山の方々に観て頂けたのが、一番の得たものであると感じています。

CUBEの存在は、作品化するのに思ったより難しい点もありましたが、それぞれの作家達の世界観を際立たせ、観客の方々もその作品世界に入り易かったのではないのでしょうか」



Title

DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店

DEMO DEPOT IN THE CUBE Branch

Artist

水無瀬 翔

MINASE Sho

主体性が商品として流通することについての批評的表現。デモ行進用に設計されたロボットの貸出を行う店舗で、鑑賞者は顧客としてデモ用ロボットを無償で借り受けることができます。

This installation is a critique of the circulation of subjectivity via commercial products. It involves opening pop-up stalls that lend out robots designed to perform demonstration marches, with visitors able to borrow robots for demonstrations free of charge.









水無瀬 翔
MINASE Sho

1984年京都府生まれ。京都府拠点。

Born in Kyoto Prefecture in 1984 / Based in Kyoto Prefecture

京都市立芸術大学美術学部美術科構想設計専攻卒、
情報科学芸術大学院大学(IAMAS)修了。

京都市立芸術大学美術研究科博士(後期)課程メディア・アート領域在籍中。

2013/ 仕草の肖像 - 真似ること、真似ること、真似ること - /N-mark/ 名古屋

2014/ 文化庁海外メディア芸術祭参加事業企画展「Daily Reflections」 /Total Museum
of Contemporary Art/ ソウル

2015/House of Day,House of Night/@KCUA/ 京都

Artist's Comment

「応募から展示まで時間があって、規定やテーマをより深く解釈(肯定的にも否定的にも)するためのプログラムが間にあってよかったかもしれない。

鑑賞者が作品を鑑賞する場に立ち会うことができ、多種多様な反応に巡り会えたのは今後の制作活動を考えるうえで大きな成果となった。

ボランティアは、作品のコンセプトを咀嚼して対応してくださり、作品と鑑賞者をつなぐとても素晴らしい役割をしていただいた」



Title

移動する主体（カタツムリ）

Shifting Self (Snail)

Artist

耳のないマウス

Earless Mouth / Mouse

日常は習慣化された思考から離れば、今よりもおぞましくも滑稽にも、また美しくもなります。手遊びで“カタツムリ”の形をつくり、指だけが動いている手(記号)とそれが指し示す対象との差延により、自明のものとして受け入れている価値観に疑問を投げかけます。

If we can get away from habituated thought, the everyday becomes more gruesome, comic, and lovely. By recreating the shape of the popular hand game in which a clenched fist and two fingers represent a snail, the artists interrogate the “obvious” nature of accepted values through the difference between a hand (symbol) in which only the fingers move and the subject it denotes.









耳のないマウス Earless Mouth / Mouse

2015年結成。長野県、東京都拠点。

Formed in 2015 / Based in Nagano Prefecture and Tokyo

「耳のないマウス」は3331 α Art Hack Day 2015 で結成した、アーティスト松田朕佳、エンジニア石射和明、プランナー雨宮澤、デザイナー石倉一誠の混合チーム。同イベントにて中村政人賞を受賞。

2016/箱のなかに入っているのはどちらか?(個展) /3331ギャラリー /東京

2016/Touch with Skin 内在する触感 /志賀高原ロマン美術館 /長野

2016/ Trans Arts Tokyo 2016/ Trans Arts Tokyo 2016 実行委員会 / 東京

Artist's Comment

「ワークショップをする機会があったのが良かった。初のワークショップなので可能性を感じられるものになって、今後に生かせそうです。

(地元)長野では『岐阜はすごいね、実験的だね、文化的だね、土壌が違うね』と、よく言われました。

制作・展示以外にも作家同士の出会いや運営の方々、審査員の方々とお会いし関わりを持たせた事は本当に刺激になり勉強になりました。今後の人生において大きな影響を与えてくれた出来事でした」

Title

Missing matter

Missing matter

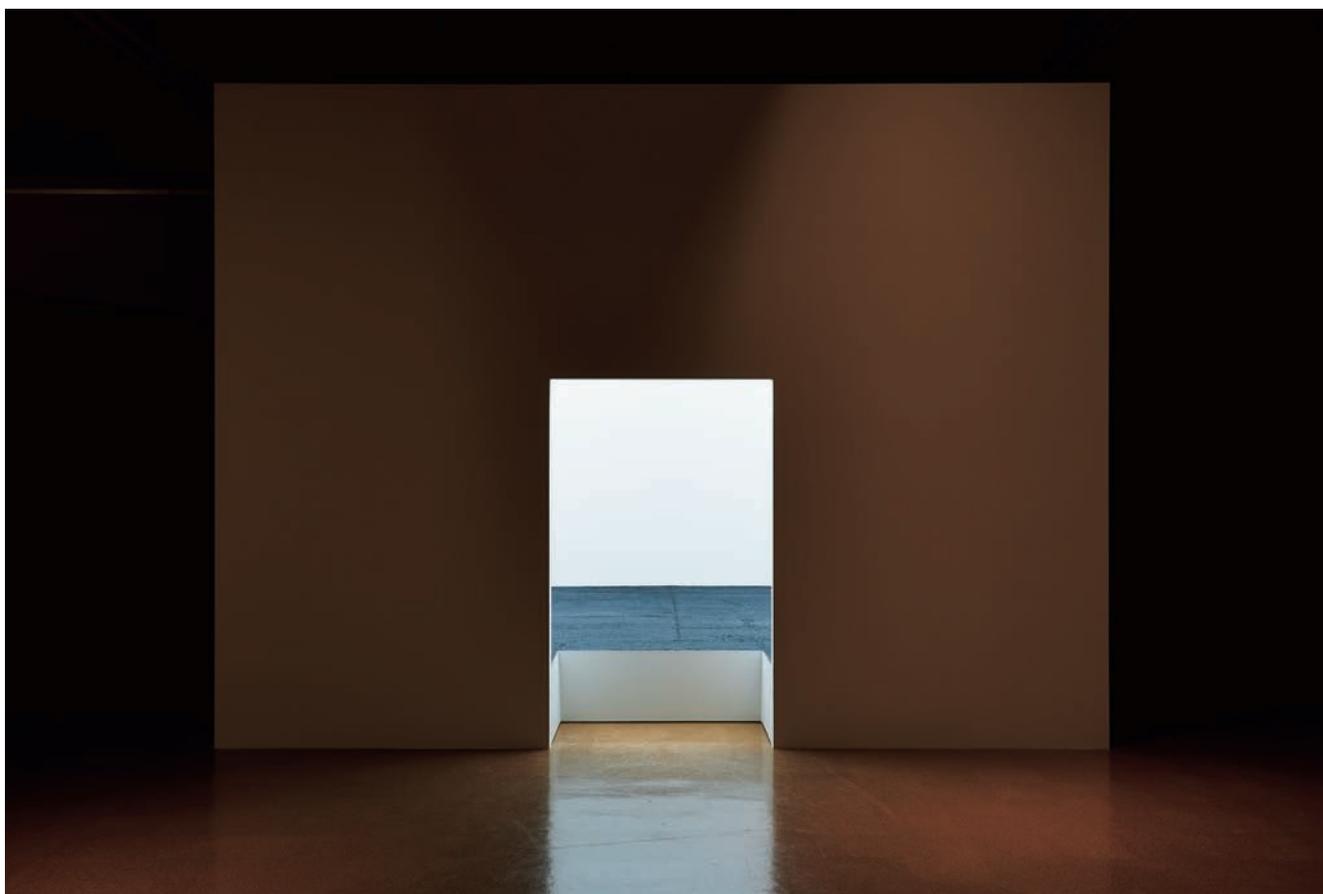
Artist

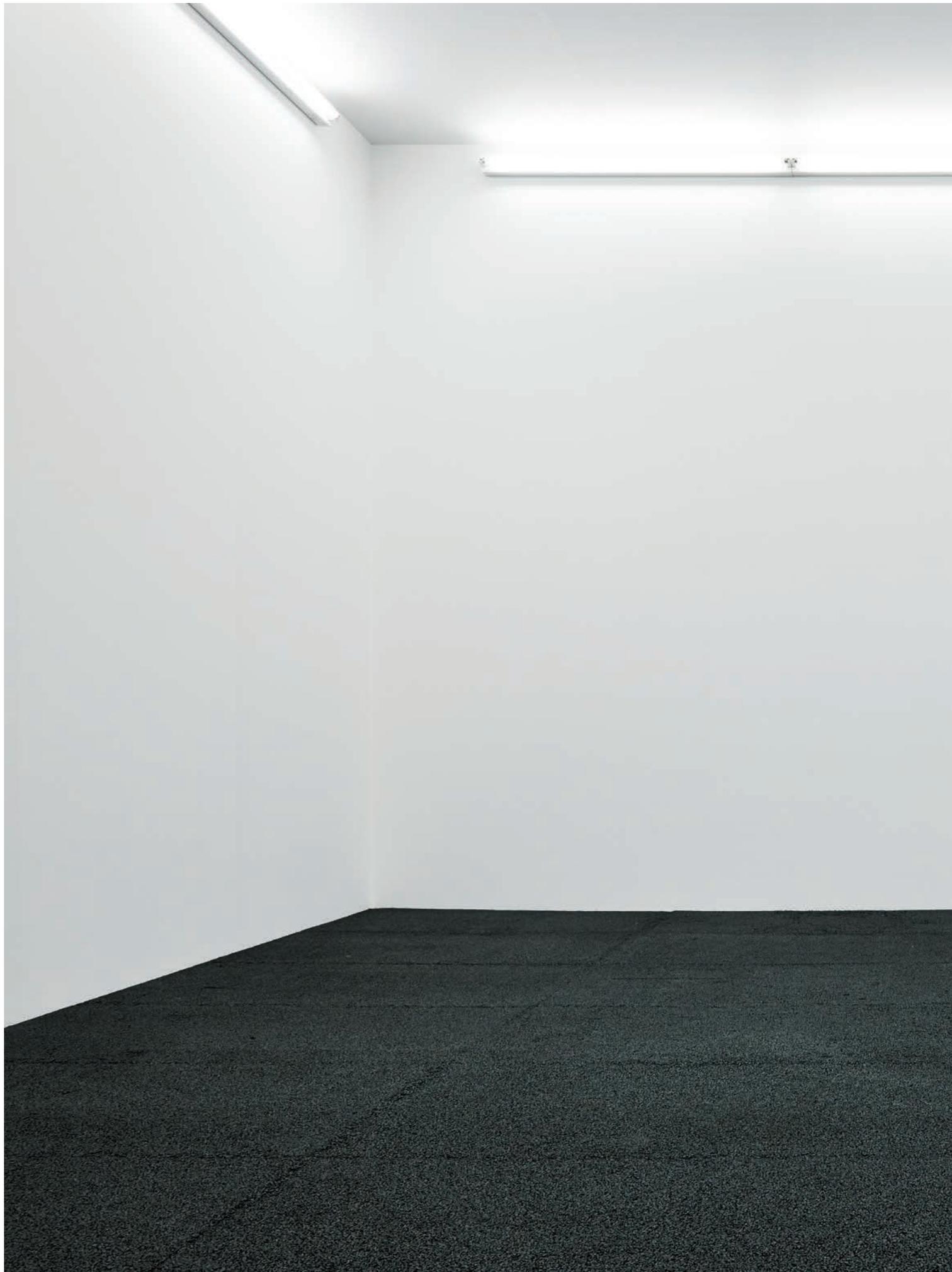
宮原 嵩 広

MIYAHARA Takahiro

鑑賞者は、アスファルトを敷き詰めた空間に裸足で入り、身体で作品を感じ取ります。かつて、人間社会と自然の関係を象徴する素材として捉えられたアスファルト。その象徴性が失われつつある現代において、再びアスファルトを使って、人間と物質の関係を再定義します。

Visitors walk barefoot into a space paved with asphalt to experience the work in a bodily way. Asphalt was formerly regarded as a material that symbolized the relationship between human society and the natural world. As this symbolism is being lost today, this work uses asphalt to redefine the relationship between human beings and materials.









宮原 嵩広
MIYAHARA Takahiro

1982年埼玉県生まれ。埼玉県拠点。

Born in Saitama Prefecture in 1982 / Based in Saitama Prefecture

バンタン映画映像学院特殊メイク科卒、東京藝術大学美術学部彫刻科卒、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修士課程修了。

2015-2016年 カリフォルニア大学パークレー校 GTU ビジティングスカラー。

2013/物質と彫刻 近代のアポリアと形見なるもの / 東京藝術大学美術館陳列館 / 東京都

2015/missing matter sculpture's dogma (個展) / 川口アートファクトリー / 埼玉県

2017/SIDE CORE -STREET MATTERS-/BLOCK HOUSE/ 東京都

Artist's Comment

「ジャンル不問で様々な作家があつまったのは良かったと思います。企画展示の形式をとるのであれば、展覧会を最終的にどこへ向かわせるのか批評性を煽るフックは必要で、審査員や作家以外の人を呼び賛否させるなど多層的な展開があってもよかったのではないのでしょうか。一つの展覧会を作り上げる以上必要なまとまりではありますが、入選者決定以後うちに向かってしまった感がありました。今後もAAICの過去入選者などをからめるなど、県などの足かせを外した純粋な企画を期待しています」

Title**cranky wordy things**

cranky wordy things

Artist**ミルク倉庫 + ココナッツ**

mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts

外部から得たと思っていることは、本当は、自らの内から呼び覚まされたものなのではないでしょうか。人の寝入りばなの実験の記録映像と、勝手に動く道具や物で構成された空間が、感覚を揺さぶり、物や身体に対する認識を変えていきます。

What we think has come from the outside may actually have been awakened from within us. Constructed from experimental video recordings of people going to sleep and tools and objects that move by themselves, this space stirs up our perceptions and changes our awareness of objects and our bodies.









photo:Azumi Kajiwara

ミルク倉庫+ココナッツ mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts

2015年結成。東京都拠点

Formed in 2015 / Based in Tokyo

6名のアーティストによる「ミルク倉庫」とアーティストデュオ「ココナッツ」によるユニット。

[ミルク倉庫] 2009年結成。メンバーは宮崎直孝、瀧口博昭、吉田和司、坂川弘太、篠崎英介、梶原あずみ。

[ココナッツ] 2015年結成。メンバーは松本直樹と西浜琢磨。

2015/ ミルクイースト パブナイト -イン・タヴァン・エールハウス/milkyeast/ 東京

2016/3331 Art Fair 2016 -Various Collectors Prizes-/アーツ千代田 3331/ 東京

2017/「家計簿は火の車」 3331 ART FAIR recommended artists exhibition/アーツ千代田 3331/ 東京

Artist's Comment

「これまで取り組めなかったタイプの作品に、じっくり取り組むきっかけを与えてもらったこと、美術館での展示や、外部の施工業者との制作が経験できたことも良かった。また、担当学芸員の方から様々なお引き合わせをして頂いたことにも感謝している。ボランティアには、搬入等に関して、補助してもらえて助かったし、作品説明のためのヒアリングなど、積極的に話しかけて頂けて嬉しかった。ボランティアはじめ、他作家やテクニカルアドバイザー、ボランティアとの交流会などがもう少しあっても良かったように思う」

Title**Mimesis Insect Cube**

Mimesis Insect Cube

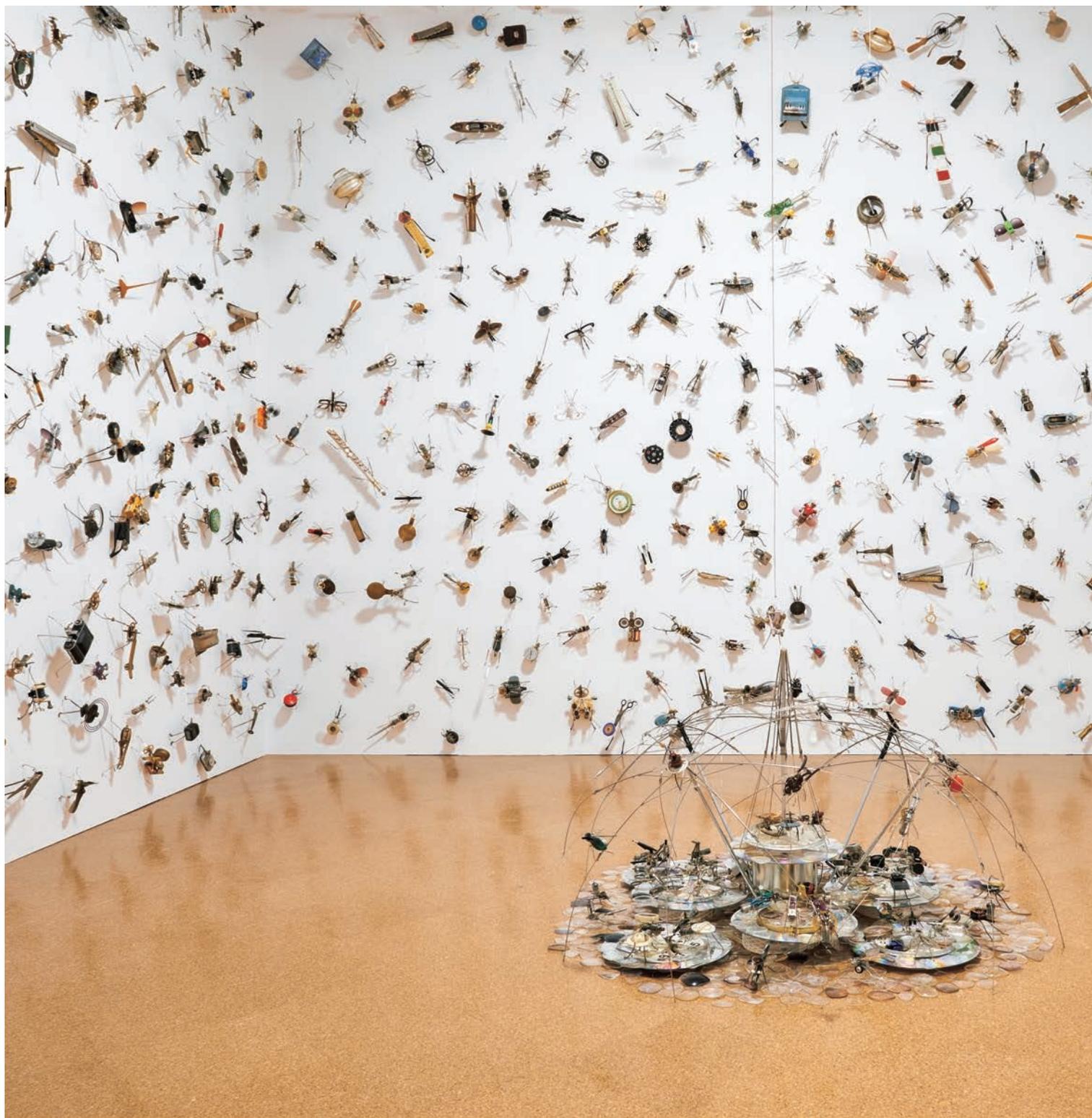
Artist**森 貞人**

MORI Sadahito

昆虫の擬態をヒントに、ムシ型オブジェを制作し、時代の漂流物となった「ガラクタ」に命を吹き込みます。身体のゆくえを問う丈六空間で、人は、無数のムシが解き放たれたキューブの中央に座し、モノに残る思念を感じ取ります。

Taking a hint from insect mimesis, the artist creates insect-shaped *objets d'art* by breathing new life into thrown-out pieces of scrap. Visitors can sense the thoughts that are still inherent in these objects as they sit in the center of a cube scattered with countless insects, creating a space of the same dimensions as the stature of the Buddha in which to question the whereabouts of the body.









森 貞人 MORI Sadahito

1950年愛知県生まれ。愛知県拠点。

Born in Aichi Prefecture in 1950 / Based in Aichi Prefecture

イラストレーターとしてEXPO'90（国際花と緑の博覧会）、マレーシア航空カレンダーなどを制作。現在はCG・立体オブジェとジャンルを越え活動中。

2004/ 空想昆虫博物館（個展） / 国際デザインセンターギャラリー / 名古屋

2005/ 第9回文化庁メディア芸術祭 審査委員会推薦作品 / 文化庁 / 東京都

Artist's Comment

「アートというジャンルで、作品を発表していく自信となった。今回の企画自体が新しく画期的だったので、継続が重要だと思います。社会に対するアートの位置に変化を与えられるかは、今後の問題だと思う。テクニカル・アドバイザーの佐野誠氏と考え方として共通する部分も多くあり、やり取りや制作がとても楽しかったです。耳のないマウスの松田さんが個人で参加している長野市での展示が、かたつむりがテーマだったので、お誘いいただき、数点、出展することになりました。AAICのご縁に感謝です」



Title

THE MAUSOLEUM 一大霊廟—

THE MAUSOLEUM

Artist

安野 太郎

YASUNO Taro

ケーブルで繋がれた12台の自動演奏装置は、エネルギーが供給され続ける限り、永遠に情報を交換しながら「ゾンビ音楽」を生み出します。それは、人類が減じた未来で、永久に人類を送葬し続ける霊廟で鳴り響いている音楽なのです。

Twelve automatic performance devices connected by cables will continue to exchange information for ever, and to create “zombie music” for as long as their energy supply is continued. This is the music that would play in the mausoleum to eternally humanity’s funeral rites in a future where humankind has perished.



photo:Yasunori Ikeda





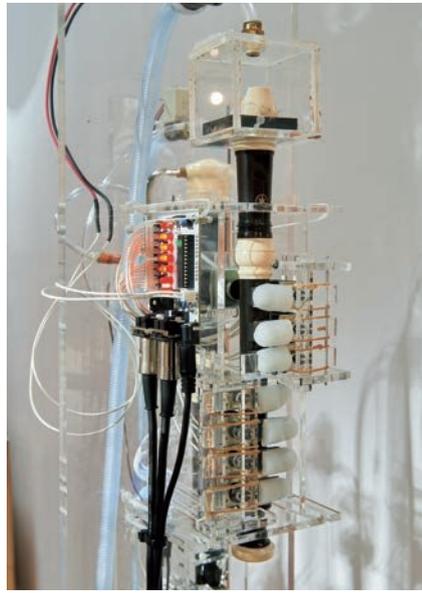
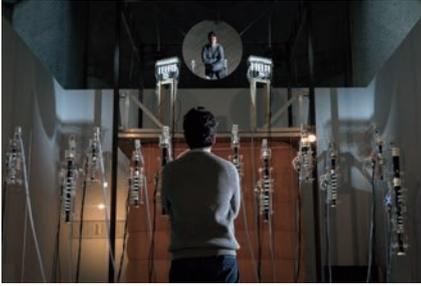


photo:Yasunori Ikeda

安野 太郎 YASUNO Taro

1979年東京都生まれ。埼玉県拠点。

Born in Tokyo in 1979 / Based in Saitama Prefecture

作曲家。ブラジルと日本のハーフ。東京音楽大学作曲科卒、情報科学芸術大学院大学修了。

代表作にゾンビ音楽。Pboxxレーベルより、2枚のCDをリリースしている。

2013/ 第17回文化庁メディア芸術祭 アート部門 審査委員会推薦作品 / 東京

2015/ フェスティバル/トーキョー15 (ゾンビオペラ「死の舞踏」) / にしすがも創造舎 / 東京

2017/ 大霊廟II / BankART studio NYK / 横浜

Artist's Comment

「作品作りというのは賞レース云々や人からの評価とは本質的には関係がないと思いつつも、賞をとるつもりで制作して熱くなってしまいました。結果を待つ間はすごく緊張した(笑)。イベントの時、企画委員が、『わけのわからないもの』と僕らの作品を評しているのを知り、逆に、『絶対に彼らが認めざるを得ないものを作ろう』と奮起しました。長期に渡って展示する作品は初めてで、ピンチが何度かありましたが、その都度、やりとりしながら解決をしていきました。今度横浜でやるイベントに耳のないマウスのメンバーも出演者として参加するなど、AAICを通じた作家同士のつながりもできました」



Chapter

2



展評

Review

キューブのゆくえ

島 敦彦(金沢21世紀美術館館長)

今回の展覧会は、厳密には立方体ではないものの、大きな箱であるキューブ(4.8m×4.8m×高さ3.6m)を応募者それぞれがどう受け止め、作品として展開するのか、その独自性を問われた公募展である。キューブを、いわゆる「ホワイトキューブ(装飾を排し、均質な光に満たされた真っ白な純粋空間)」にとらえるのか、その枠組み自体を作品の一部に取り込むのか、そのアプローチの仕方にさまざまな違いが見られた。その多様性は、多彩な審査員の目の反映とも言えるし、同時代の表現の縮図とも言えるだろう。

入選作15点のうち、屋外に1点、館内の多目的ホールに1点、照明を落とした展示室に7点、明るい展示室に6点と分けて展示された。

暗い展示室では、キューブの重厚な存在感を気にせず箱の内部のみに集中して鑑賞できる工夫がなされた。というよりも、作品の性格が暗闇を求めたのである。たとえば、佐藤雅晴の「HANDS」はアニメーションと実写を巧みに混在させた秀逸な映像で33台のiPadから漏れるささやかな音の集合は、作者も語るように巨大なスピーカーの箱となって暗闇に響いていたし、平野真美の「蘇生するユニコーン」は、存在しない動物の命を生命維持装置で繋ぎとめるという荒唐無稽とも思われる物語だが、観客はまるで薄暗い病院の通路を抜けて集中治療室を訪ねる見舞客のような気持ちにさせられたはずだ。三木陽子の「Conduit(導管)」や耳のないマウスの「移動する主体(カタツムリ)」も、闇の中で妖しい魅力を発散していた。

一方、明るい部屋では、キューブの内と外とが関連づけられた作品を中心に、箱それ自体の存在が印象づけられた。特に、ミルク倉庫+ココナッツの「cranky wordy things」は、題名が示すように不安定で、おしゃべりなモノたちの競演であると同時に、寝入りばなの人たちの映像が何ともユーモラスかつ不穏に融合して、観客の心身を揺さぶった。また、松本和子の「透明の対

話」は、フレスコ画という壁に依存する技法によってキューブの壁と相対し、中村潤の「縫いの造形」は、刺繍によって大きな紙とキューブの壁とを大胆に関係づけた。

多目的ホールに設置された安野太郎の「THE MAUSOLEUM-大霊廟-」は、リコーダーを自動演奏させるとどこか懐かしさを覚える原初的な機械で、音の響きに滑稽さと荘厳さとが同居していて素直に楽しめた。その点では、明るい部屋に展示された水無瀬翔の「DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店」は、デモをする液晶パネルのその覚束ない足取りが、ビデオ・アートの創始者ナムジュン・パイクが1963年に路上で動かした初期ロボットを想起させ、メディア批評の原点を見るようだった。さらに、屋外に設置された三枝愛の「庭のほつれ」は、東日本大震災後に入手できなくなった福島の椎茸栽培用の原木にまつわる作品で、素っ気ないベニヤ板の箱の一角にできたてのおがくずを設えた。外見だけ見ていると、東京電力第一発電所の建屋のミニチュアを見ているような錯覚に陥り、展覧会の導入部として妙に印象に残った。

公募展は、時代を映す鏡でもあり、継続してこそ意味がある。次回以降も大いに期待したい。

清流の国からの問いかけ

住友文彦（アーツ前橋館長、東京藝術大学准教授）

中村潤の《縫いの造形》、耳のないマウスの《移動する主体（カタツムリ）》、森貞人の《Mimesis Insect Cube》、安野太郎の《THE MAUSOLEUM-大霊廟-》を見るだけで私は十分にこの新しい芸術祭を見に行った価値を見いだせる。もちろん、他にも優れた受賞作品と一緒に見られることの意味は大きいし、審査員の数や賞金の額に現れる本気度もこの企画を魅力的なものにしている。実際にはじめて送られてきた案内を見たときのインパクトは大きかった。そのいっぽう会場で、個人的な記憶が折り畳まれた細い線を視線で迎えること、見ることとの不確かさによって心が揺さぶられること、繰り返される日常のなかに創造性を見いだす喜び、それから身を置いた空間自体がまるで生き物のように変容する不気味さを先の4作品から感じ取った記憶は今もまだ残っている。

つまり、大規模な展示事業であればあるほどひとつの作品は小さな構成要素になってしまうが、展示のキューブを丁寧に配置してそれを使う展示は思いのほか各作家と向き合う鑑賞経験を可能にしていたように思える。芸術愛好家たちはじつに熱心にどの地域の美術館にも芸術祭にも出かけるが、その事業の企画性ではなく個別の作品を見る経験を記憶に刻んで持ち帰るものである。

実際、現代は世界的な規模で都市が文化による競争に駆り立てられている時代である。それが植民地主義や経済競争よりもましなのは、はっきりとした勝ち負けが生まれにくいところだ。しかし、そのため本当に独自性のある文化戦略を持っている都市が多いわけではない。その点で岐阜県が県展を全国公募によって県外への発信性の高い事業にしたのは驚いた。戦後の文化振興策として社会教育的な目的を持っていた事業が大きな変わり目を迎えているのは岐阜だけではない。そこには人類共通の財産を扱う美術館の役割や自治体の境界線とは一切関係ない文化の有機的な交流からの問いかけ、そして素人と専門家を切

れ目のないグラデーションではなくはっきりと区別させ近代的な芸術家像を確立させようとする傾向とが見え隠れする。つまり、これもまたグローバリゼーションと言われる波のなかから生まれた芸術祭なのである。この不可逆的な大波を浴びた後、あえて元の価値観に立ち戻るのか、うまく波乗りをこなして新しい芸術振興策が成果を結ぶのか。芸術祭やアワードが一定の認められた価値を生み出すのには最低十年はかかると思う。目的意識がはっきりせず、中長期の視点が欠落した事業は当然成功しない。

私たちは脱成長時代の新しい芸術振興の目的をどのように設定すべきなのだろうか。おそらく、そのような問題意識を持つ人たちが岐阜県の外からも数多くこの事業の行く末を注視しているのではないだろうか。ぜひ、今回の成果をもとに次回へ向けて岐阜に留まらない社会の転換期を意識したメッセージを生み出してほしいと願う。

県展のゆくえ—岐阜モデル

中村政人（アーツ千代田3331ディレクター、東京藝術大学教授）

全国の県展は、今後どのように拡充していくのであろうか？
県という行政区域でとどまっているのではなく新たなビジョンを掲げ、全国区で県展を改革していく時期に来ているのではないだろうか？

私論だが、従来の県展の領域を遥かに超えているのが2つある。1つは、「山口県美術展覧会」と岐阜県における本展である。

山口県美術展覧会の作品応募の規格には、「搬入・展示が可能なものであれば、形式・寸法・重量・材質などは問いません。」と記載されている。どれだけ大きくても、重くても、扱いにくい材質でもOKなのだ。実際に審査員を何回かさせていただいた事があるが、トラック数台分の廃材の山を搬入していたり、パフォーマンスをし続ける作品であったりと斬新な作品もあれば、萩焼の壺や書が大量に並んでいたり従来の作品も多く出品されている。しかも県外からの応募もOKなので現代美術系のアーティストも狙って応募する。ユニークなのが審査方法。審査員が〇×の札を持ち公開で作品一点一点の前で、瞬間に〇×を上げて決めて行く。3人の審査で2つの〇が上がると二次審査に進む。巨大な作品でもバツサリと落選する。応募規定が自由な分、審査も遠慮なしに目の前で厳しく審査していく。大賞には、美術館の一室での個展の機会が与えられる。ちなみに私が審査した時、優秀賞になったのは、今年のヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表の岩崎貴宏さんだった。山口の県展は、この何でもありの応募規格に変えたことにより、若手から常連作家の意識改革が進み明らかに成果を出してきている。

そして本展の「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE」展である。前身の岐阜県美術展は、平成27年度で終了し2つの方向に分かれた。1つが本展（3年に一度開催）であり、もう一つが「ぎふ美術展」（残る2年に開催）である。あいちトリエンナーレが隣県で3年に一度開催されるという状況もあり、岐阜県としても新しい表現をするアーティストが増えてきたことや

県内の地元作家だけではない交流人口を増やしていく必要があったと思われる。そして、関係者らが強いビジョンにより新事業をけん引していった。本展の公募規定や審査方法を見ると、特徴的なのがキューブの設定である。ホワイトキューブから来ているキューブである。作品を最もニュートラルに見せ、その空間にどんなモノを置いたとしても余計な情報を与えることなく作者の表現行為を純粹に見せる白い空間である。既存の美術館の壁面は、作家が直接描いたり加工したりと自由にアプローチができない。その理由もありこのキューブを前提に作品プランを組み立てるという事は、アーティスト側から見て自由度が高く制作意欲が沸きチャレンジしやすい。実際に入選した作品は、キューブに窓を開けたり、ペイントしたりと相当自由度高く内側と外側を上手く使っている。また、アーティストへの支援も大きな特徴だ。入選者には、制作支援として、制作費50万円、展示に関するテクニカルな相談、制作に関しての外部協力者の紹介、制作サポートのボランティアスタッフの派遣もしてくれる。至れり尽くせりである。しかも、大賞は500万円。第一線を走る豪華審査員とくるとチャンスを狙う若手アーティストにとっては、そそられる条件ばかりである。近い将来、本展から出てくる次世代のトップアーティストに期待したい。

アーティストの時代を見つめる視点や表現衝動をいかに伝えることができるのか？ そのためには、県展で裾野を広げ、全国、海外へとその先に進む道をつくらなくてはならない。全国の県展は、この岐阜モデルのように多様な価値観を受け止め進化していく方向を見定めてほしい。

清流のさざめきから大きなときめきへ

馬場駿吉 (名古屋ポストン美術館館長、美術評論)

近年、美術展という従来の概念も多様化を続け、現代美術を総合的に展示するトリエンナーレと名付けた芸術祭が各地に次々と誕生している。

それぞれ特徴を持たせる工夫がこらされているものの、作家たちに新しい作品発表の場を用意し、それを一般の市民にも広く共有してもらおうという純粋な目的ばかりではなく、地域起こしなどの意図が露骨で、いささか食傷気味な一面も感じられるようになって来た。そのような状況の中で、本年4月から6月にかけて、岐阜県美術館を会場として創設、開催された「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」は清澄な自然環境がほどよい都市空間に溶け込むこの地域の特性を大切にしつつ全国的に公募の扉を開いたあり方が、とても新鮮に感じられた。先端的、実験的な志向を持つ作家に経済的な支援をする賞金が用意されているところにも、新しい創造性を刺激しようという目的意識を明確に見ることが出来る。また、選考委員も美術専門の他に、身体表現、作曲、哲学、文学などの最前線に立つ多彩な表現者が加わり、様々な観点から審査が進められたことも特記すべきことだろう。

今回あらかじめ設定されたテーマは「身体のゆくえ」。与えられた展示スペースは4.8m×4.8m×3.6mの白い壁を持つ方形の空間。応募790点から選ばれたのは15作品(13作品:個人、2作品:グループ)すべてがインスタレーション作品だった。さて、ここであらためて今回のテーマが「身体のゆくえ」とされたことにふれておこう。美術は発祥の原始時代以来、現代に至るまで、何らかのかたちで、身体に向き合ってきたことは美術史に照らしても明らかである。だが、今や人工知能をはじめ、様々な臓器もその機能を代用する人工装置が開発され、さらに万能細胞による再生医療もいよいよ本格化しつつある。従って自己の認識、生死の概念さえも、もう一度見直す必要に迫られる事態となった。ゴーギャンの代表作に「我々はどこから来

たのか、我々は何者か、我々はどこにゆくのか」があるのは周知のとおりだが、今回のテーマは、その永遠の課題にまたあらためて立ち戻ることを促すものと言えよう。選考委員の田中泯さん(ダンサー)は選考の所感の一端として「不在や不明にそそぐ愛こそが表現の基本だ」と述べているが、入選・受賞作家たちのそれぞれの作品にも定かならざる身体のゆくえを追う眼差しが感じられ、その行為に愛を注いでいる姿を読みとることが出来た。今回選出された作家たちも表現の基本ラインには乗っているのだ。今後さらに清流のさざめきを大きなときめきに変える存在となってほしい。

医療の現場に永年立ち合い、身体そのものの実体を身近にしてきた筆者には佐藤雅晴《HANDS》、谷村真理《この部屋とダンス》、平野真美《蘇生するユニコーン》、三木陽子《conduit》、耳のないマウス《移動する主体》などに特段の魅力を感じた。





Chapter

3



記録

Document

募集から審査までの記録



I. 募集規定（簡略版）

1. 募集期間

2016年4月11日(月)～7月8日(金)

2. テーマ：「身体のゆくえ」

社会を写す鏡である現代アートは、コンセプト、素材、表現方法などあらゆる要素について既存の枠を取り払い、複雑化、多様化の一途をたどっています。アートはあらゆる可能性を追求すべきですが、その展開のあまりの速さ、広さに、多様化そのものが目的化されているのではないかとさえ思われます。今一度、人間そのものである自らの「身体」に着目し、その中に何を発見し、何が生まれるのかを問いたいと考えます。そこで生成される情熱や才能が、キューブという空間を通して発露される結晶体(作品)を、大いに歓迎します。

3. 応募資格

Art Award IN THE CUBE 2017の趣旨を理解し、選考された場合には作品の完成まで責任を持って取組める方(個人、グループ、年齢、国籍を問いません)

4. 作品規定等

作品は、未発表のものに限ります。1名・1グループにつき1作品までとします。

5. 作品寸法等

4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)の空間(直方体のキューブ)内で展示できること

6. 審査料

1点につき5,000円(税込)

7. 賞・賞金

- ・1次審査入選者
賞金50万円/15作品程度(作品制作時に支給)
- ・制作された入選作品のなかから以下を選出

大賞	賞金	500万円 / 1点
審査員賞	賞金	100万円

II. 募集説明会

審査員をゲストに、東京・名古屋・京都・岐阜でトークイベント/説明会を開催した。各会場とも、想定以上の人数が詰めかけ、さまざまなチャンスが多い都市部においても、岐阜で始まる新しいアートアワードへの注目と期待がうかがえた。

開催記念トークイベント in 東京

2016年3月27日
会場：3331Arts Chiyoda, 参加者：約120名

小説家の高橋源一郎(AAIC2017審査員)、岐阜県美術館長の日比野克彦(AAIC2017企画委員)、AAIC企画委員長の桑原鏡司が、第1回のテーマ「身体のゆくえ」をキーワードに、トークセッションを行った。後半は、Art Award IN THE CUBE 2017の応募の条件や方法、多彩な顔ぶれの審査員や賞金等について発表し、4月の公募開始に向けて、機運を盛り上げた。

Art Award IN THE CUBE 2017 開催記念トーク in 京都

2016年6月5日
会場：MTRL KYOTO, 参加者：約80名

美術家の中原浩大(AAIC2017審査員)を迎え、第1部では、身体刺激から呼び起される感覚に焦点をあてた中原の作品制作についてトーク。第2部は、展覧会施工技術者でスーパーファクトリー代表の佐野誠(AAIC2017テクニカルアドバイザー)が加わり、IAMAS教授の安藤泰彦(AAIC2017企画委員)が聞き手となって、作品制作・施工の技術支援が現代美術の水準を上げていくことが語られた。第3部では、公募要項の説明が行われた。

Art Award IN THE CUBE 2017 開催記念トーク in 名古屋

2016年5月28日
会場：Minatomachi POTLUCK BUILDING, 参加者：約100名

画家のO JUN(AAIC2017審査員)を迎え、第1部は、O JUNの公募展出品にまつわるエピソードや創作について、名古屋芸術大学教授の高橋綾子(AAIC2017企画委員)が聞き手となってトーク。第2部は、名古屋の港まちをフィールドにしたアートプログラムに携わる、吉田有里・野田智子・青田真也が加わり、「アーティストはサバイブする」をテーマにディスカッション。第3部では、公募要項の説明が行われた。

会場見学・説明会 in 岐阜 アートの新たな源流を求めて

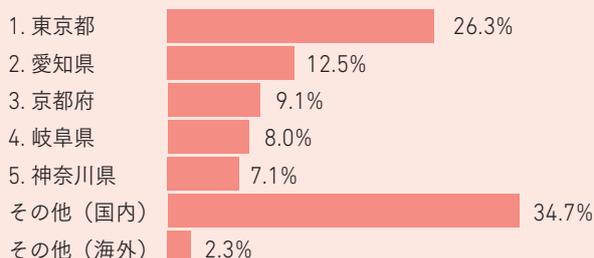
2016年6月19日
会場：岐阜県美術館, 参加者：70名

情報科学芸術大学院大学[IAMAS]教授で作曲家の三輪眞弘(AAIC2017審査員)が、「身体こそ“わたし”を証明する唯一のものではないか」と投げかけた。第2部では、屋外展示場の実寸大フレームを見学。第3部は実際にCUBEが設置される展示室を見学。「1980年代に設立された地方美術館の現代美術との関わり方からも、AAICに期待と関心を寄せています」との副館長のメッセージに、参加者は思いを新たにした。

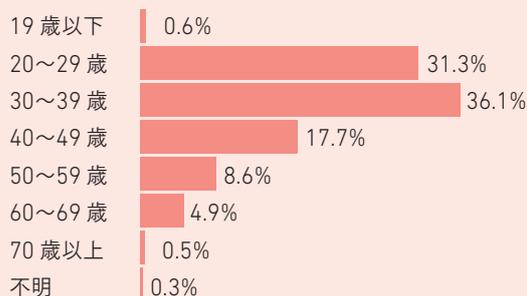
III. 応募状況

海外9カ国を含む各地から、想定を大きく上回る790件の応募があり、全体の67%を20～30代が占めた(平均年齢36.4歳)。新鋭作家の年代を中心としつつも、10代から70代まで幅広い年齢層が応募しており、ジャンルが限定されたコンペや従来型公募展の枠組みから自由になったアワードが歓迎されたことがうかがえる。

地域



年代



IV.1次審査

2016年8月1日
会場:ソフピアジャパン(大垣市)

予想を超える応募数に、審査員たちは、「ぜひ全ての応募に目を通したい」と、急ぎよ全企画書を事前審査。推薦する作品企画を一人50~80件程度選定した。

一次審査当日は、7人の審査員全員が集結。広い会場には790件全ての企画書が並べられた。事前に審査員が推薦した企画書には審査員ごとに色分けしたシールが貼られ、シール付きの企画書を中心に、映像、マケットもあわせ審査した。なお、

美術館内での展示において調整が必要なプランや実現可能性に検証が必要なものは、別途目印を主催者がつけておいた。

名前入り付箋(一人15票)による第1回投票で64件に絞られ、続く投票と厳正な審査を経て、15の作品企画が入選となった。なお、1次審査を通し、応募者の名前・略歴等は伏せて実施した。

V.2次審査

2017年3月28日
会場:岐阜県美術館(岐阜市)

審査員は、まず、作品鑑賞を行って、評価記入シートに大賞・審査員賞推薦作品をチェックした。次に、各審査員の推薦作品をホワイトボードに集計・掲示し、それを見ながら議論を行った。以下は、各審査員のコメントの抜粋である。

0 JUN 「寸法の限定に作家がどう反応したのか、そこを見たい」

大樋 「アートとは自分にとってなんなのかということを再度自覚して、コンセプトだけで考えないようにして、決めなければ」

高橋 「規定を守ることと、作品が良ければそれでよいという二つが、相反するときがある。個人的には規格を超えたものも出てきてほしい。全体にキューブの表現、身体のゆくえ、作品の良さがバラバラ。各審査員がどこを重要視するのかという話になる」

田中 「どんな条件でも感覚が開かれるのがプロフェッショナルだ。テーマ『身体のゆくえ』に、桁外れの広がりがあると思っていたが、『私の身体』というものが多かった印象。具体的な身体を扱っているものは、追求が甘いように感じた」

中原 「キューブという空間をまったく意識しない制作が、作品にマイナスになるとは限らない。ルールをどう扱ったかはそれぞれで、それが『どのように印象づけられたか』だ」

三輪 「500万円を誰に渡すのか、という観点も必要(アーティストの育成という目的もある)」

鷺田 「『身体のゆくえ』『キューブ』を別個のものと考えず、その二つをどのように重ねあわせて冒険させているかで評価をしたい」

議論を経て、15作品から一人1票で投票し5組が残った。票の入った5組を対象に、一人2票で再投票し、票数が突出して多かったミルク倉庫+ココナッツが大賞に決定。次に、各審査員がそれぞれの審査員賞を決定した。

■ 作家支援

Art Award IN THE CUBE 2017 では、これまでの実績を問わない審査方法で、新しい才能を発見することができた。一方で、1次審査を通過した15組の作家は、アイデアや試作の段階から、もう一步踏み込んだ作品制作と完成度の高さが問われる。

AAICでは、キューブのスケール感や構造、美術館展示や法令に伴う制約、プランの実現化において、困難を感じる作家の制作をさまざまな面から支援した。また、岐阜産の素材や、現地取材、滞在制作、教育プログラム経験の機会を作るなどのコーディネートを行った。

1. 入選者には制作費を入選賞金(50万円)として支給
2. 作品制作・展示に関わる技術的な相談事への支援
(テクニカルアドバイザー、ファクトリーチーム、学芸員によるサポート)
3. 出品者の作品制作・展示に関わる外部協力者(岐阜県内企業・団体など)の紹介等
4. 岐阜県美術館での作品設置に関わるボランティアの制作補助

2016年9月28日、10月1日、10月15日、美術館見学会

入選作家を5組ずつ岐阜県美術館に招き、企画委員からの開催意図説明、美術館見学、ファクトリーチームとの面談、事務局との協定等の確認などを行った。特にキューブ設計に関わる打ち合わせや、作品制作における課題のヒアリングでは、技術者、テクニカルアドバイザー、学芸員とイメージ共有を丁寧に行った。

2016年10月13日 岐阜大学応用生物学部獣医学科・愛知木曾馬牧場の見学

平野真美〈蘇生するユニコーン〉から寄せられた、「馬や畜産の専門知識を有する大学や機関からのアドバイスがほしい」という相談に対応。科学者・牧場主とアーティストの対話は、哲学的な問いも含み、科学・社会学・芸術などの異なった文化や思考が結びつく時間となった。



2016年10月21日 佐野誠（AAICテクニカルアドバイザー、スーパーファクトリー代表）のテクニカルアドバイス

耳のないマウス（移動する主体）から、“手”の素材と関節部の処理について、また、這う人形の動きの補正について相談。佐野からは、豊富な経験と専門知からのアドバイスがあった。「考えて止まるよりまず作れ」という佐野の激励に、作家としてユニークな感性をもつ松田が触発されていった。



2016年11月28日 カネ利陶料（瑞浪市）の見学、多治見工業高等学校での滞在制作

谷本真理（この部屋とダンス）から寄せられた、「美濃産の陶芸粘土を使いたい」「滞在制作をしたい」という二つの相談に対応。生産者を訪ねて原料を知り、ワークショップで5種類の美濃産粘土を調合することになった。子どもたちがワークショップで使ったあとの陶土を再利用し陶芸の専門機関でAAIC出品作を制作する中で、釉薬を使うという、谷本にとって初めての作品が生まれた。



2016年12月8日 撮影協力

水無瀬翔（DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店）で展示されるロボットの「顔」のモデルについての相談に対応。十数人の職員が協力し、iPadで再生する顔の映像を岐阜県庁で撮影。「肖像権使用同意書」についてもアドバイスを行った。



2017年6月初旬～15日 漆喰パネル譲渡のプランとコーディネート

松本和子（透明の対話）と、作品の撤去やAAICのあとの展開を相談していくなかで、「漆喰パネルは、茫漠とした美しさや質感がある。大量すぎて全ての保管はできないが、今後再び、このような大規模作品を作る機会はないであろう。破棄したり作家の手元で永遠に日の目をみないよりも、誰かの元に残ったら」と思いで一致した。また、剥離と記憶を主題とする作品の断片が誰かの手元に残っていく、というもふさわしく、パネル譲渡のコーディネートを行ったところ、多くの希望者が現れ、松本作品がこの地に残ることとなった。

上記のほか、柴山豊尚（ニョッキ）の鏡の素材と張り方のアドバイス、三枝愛（庭のほつれ）のキューブプランに伴う建築基準法や消防法との調整、宮原嵩広（Missing matter）のアスファルト設置に際して発生した匂いのダクト強制排気などの対応を行った。

■ 関連プログラム

Art Award IN THE CUBE では、作品制作や作家育成など、様々な面から作家をサポート。その一環として、リサーチを兼ねるワークショップやトークイベント等を行った。会期中には、作家が作品や作品コンセプトを伝えるワークショップやイベント、審査員の講演会、ボランティアによる活動、学芸員解説などの関連プログラムを実施。また、作家インタビュー動画などにより、鑑賞・参加や作品情報について多くのバリエーションを設けた。

プレワークショップでは、飛騨圏域・東濃圏域で入選作家のワークショップを実施した。県内遠隔地の子どもたちが、作家との交流を通して、現代アートの発想や表現を体験した。

ART AWARD
IN THE
CUBE 2017



01

プレワークショップ - アートの手ざわり -
堀川すなお
「もの、どのように感じてる? 伝わってる?」

日 時 | 2016年12月17日
会 場 | 飛騨・世界生活文化センター(高山市)
講 師 | 堀川すなお
参加者 | 12人

中のモノが見えない状態にした箱の穴のなかに手を入れ、中のモノを触って分かったことを言葉で書く。次に、となりの人と紙を交換し、言葉どおりに、絵に描く。最後に、自分の書いた言葉がどう伝わったのか、想像で絵を描いたのはなぜか、話し合うワークショップ。

箱を開け、中のモノが、大きなカボチャと洗濯ばさみと分かった時には歓声ができ、人はどのようにモノを見て理解しているか、コミュニケーションの背後にある複雑なメカニズムを子どもたちは感じ取った。堀川にとっては作品制作のためのリサーチであり、小学生を対象とした初めてのワークショップであった。堀川は高山市に数日間滞在し、その調査と考察をもとに制作を進めた。



参加者コメント

「見ずにさわるだけで、言葉をりかいて、図をかくことがちょっとむずかしくて、でも言葉で分かった図とほんものはまったくちがったことが不思議でした」「さわることと見ることのちがいが分かったのしかった」



02

プレワークショップ -アートの手ざわり-
谷本真理
「つくって投げて! 体で楽しむ陶芸粘土」

日時 | 2016年12月24日
 会場 | 岐阜県現代陶芸美術館(多治見市)
 講師 | 谷本真理
 参加者 | 16人

ワークショップに先立ち、粘土の製造会社に相談し、美濃の土を原料に特別配合した陶芸粘土を使用。まず、子どもたちが粘土に慣れるため、数種の粘土を丸めたり混ぜたり、細長くしたり積み上げて遊ぶ。「蹴り飛ばそう!」「敷き詰めよう!」と谷本から次々に声がかかり、身体全体を使って粘土を投げるとバシッと音がしたり、壁にくっついたりして、子どもたちは大盛り上がり。最初はヒンヤリしていた粘土が、温まって練れてくる頃には、次第に個性が表れ始めた。すっかり粘土に馴染んだ頃、目を瞑って、粘土の温度や弾力を感じながら今までで一番気持ち良かった動きで、思い思いのカチチを創った。



講師コメント

「子供達の自由な発想に刺激をうけました。あれくらいパワーに溢れた空間を私も作らねば!」

参加者コメント

「ねんどのしゅるいがわかった」「ぺたぺたしてきもちよかった」「ねんどのやわらかさがちがいました」「こねこねしたのがきもちいい」



03

プレイベント
日比野克彦×山口裕美(アートプロデューサー)
「アート楽しく観る秘訣」

日時 | 2017年2月12日
 会場 | 岐阜県美術館・講堂
 参加者 | 100人

午前中は、館長室にて“日比野ゼミ”。入選者たちは、ライバルでありつつ、ともに展覧会を創っていく仲間として語り合った。クロストーク第1部では、来場作家全員がステージに上がり作品プランを紹介。選ばれし者としての緊張感とともに、モチベーションの高揚も伺えた。第2部では、山口がアートマーケットの動向や「現代アートは今を表現し、少し先の時代も示す」とレクチャー。日比野は、「AAICは、コンペティションでありつつ、アーティストを育てようという意識をもつ。作家たちはグループショウの一員として大切にされる。岐阜からアートシーンをつくっていこう」と呼びかけた。参加作家：佐藤雅晴、柴山豊尚、平野真美、堀川すなお、三枝愛、耳のないマウス、宮原嵩広、ミルク倉庫+ココナッツ、森真人、安野太郎

参加作家コメント

「(質問で)『入選作が理解できない』と言った人が何も言えなくなるくらい圧倒的なものを作ろうと気持ちを新たにしました」(安野太郎)

参加者コメント

「様々な角度から現代アートについて話を聞くことができた」「受け身だけでなく、自分から作品に向かっていくことを楽しむことが大切なんだろうと感じました」



第1部 | 出演：大賞 ミルク倉庫+ココナッツ

中原は、「テーマ『身体のゆくえ』の“ゆくえ”の、可能性を感じられるところを評価した」と評し、ミルク倉庫+ココナッツは、「790点の中から選ばれたという責任を感じる。広い振幅で仕事ができる大きなきっかけ」と応じた。

第2部 | 出演：審査員賞 三枝愛、柴山豊尚、谷本真理、耳のないマウス、
水無瀬翔、森貞人、安野太郎

三枝・谷本・森は、最初のプランからの変化の過程を、耳のないマウスと水無瀬はキューブ内外に広がる作品構造を、柴山と安野は制作の原動力を語った。「搬入期間が約2週間と長くありがたかった」「新作だったので、ファクトリーチームのアドバイスで助かった」など作家を大切にするAAICの姿勢に評価があった。審査員二人は、「新しいアートの象徴的な作品が選ばれた。みなさんの“ゆくえ”を楽しみにしている」とエールを送った。



参加者コメント

「おもしろかったです。まだきちんと見れていない作品もいくつかあるので、またじっくり見に来たいと思います」(女性/岐阜)、「作家の生の声が聴けて良かった」

“東京藝大特別講義”。日比野は、森には「虫が生まれる感じに任せて」、宮原には「アスファルトの持つ都会性や暴力性が感じられる」、三木には「疎密など空間に落差をつけても良かった」、平野には「リアルさの点で夢に誘いきれないノイズ感が次の課題」、安野には、「作品と対峙し、次の作品を考える時間が大事」、松本には「発表の場によって、作品のあり方を考えることも必要」、水無瀬には「アートは社会の隙間について問題解決をしていくことができる」、ミルク倉庫+ココナッツには「これまでは応援される期間、これからは自主的に岐阜で何かやるといい」など作家と対話。強みを見出された作家も、ヒントを投げかけられた作家も、AAICの作家支援の思いや働きかけを、次に繋げようとする面もちであった。



参加者コメント

「作品制作についてトークを聞いてから見て、楽しいと思いました」(50代/女性/岐阜)

06

森村泰昌講演会「身体のゆくえ」

日時 | 2017年4月23日
会場 | 岐阜県美術館・講堂
参加者 | 150人

美術史の知見を背景にした作品制作や芸術祭ディレクターなど多岐にわたり活動する森村。冒頭、「一つひとつのCUBEが、それぞれの作家の身体のように見えた」と、AAIC全体を評した。

動物行動学者の著書とカフカという、約100年の間隔で発行された書物を紹介しつつ、「転用・ズレ・一からでないやりなおし」が環境と身体とのセッションを生み出すこと、『変身』は、家族にとって“有害な存在”となった主人公がカフカ自身の抑圧の反映であったと講演。最後には、カフカに扮した自身の作品画像を背景に、『変身』終章を朗読。「転用・ズレ・一からでないやりなおし」は、森村の創作活動を投影したものか。明かされない謎と余韻を残した。



参加者コメント

「自分の作品や体験や考えていることをむすびつけておられ、講演内容も『作品』だと思いました」「今迄岐阜になかったこんなすばらしい開かれたアートが誕生したことに感謝です。生きる事をつきつめていくとアートになるのかな〜？」

07

谷本真理公開制作
「粘土のインスタレーション」

日時 | 2017年4月29日
会場 | 岐阜県美術館・展示室
参加者 | 45人

粘土を投げ、それが落ち、変化する。粘土を伸ばして輪にし、輪投げを楽しむ。身体的喜びを発する谷本の自然な様子に、固唾をのんで眺めていた来場者たちも、リラックスしていく。谷本は、子どもたちに粘土を渡して投げるようながし、飛び入り参加の「共同公開制作」となった。会期序盤に行われた公開制作であるが、その後も展示期間を通し、陶が割れたり動いたりして、“部屋”の様子が変化し、ドローイングや粘土がキューブになじんでいく作品であった。



参加者コメント

「粘土を壊す快感に共感した。今まであった企画展示の中で一番おもしろかった。もっと他の作品もみたい」（女性/岐阜）

08

平野真美 「ユニコーン公開メンテナンス」

日時 | 2017年5月3日
会場 | 岐阜県美術館・展示室
参加者 | 50人

作品設置後、約1か月たったこの日、ユニコーンを開腹して重要な内部構造である肋骨や内臓の状態を確認し、ラテックス製の胃を全摘して、より柔らかく弾力がある軟質樹脂製の胃に交換する公開手術（修復・メンテナンス）を行った。平野は、制作記録の写真・映像・文章を用意し、来場者と会話をしながら、外側に現れた「姿」に固定されがちな視点を、「内部」や「構造」へと移行させ、「存在」を成り立たせている本質・意識を問いかけた。実は、会期中には、血液循環装置のチューブの劣化により“血液”がチューブ外に漏れたり、肺と心臓につないだ生命維持装置の不調が起こったりしている。平野はメンテナンスを通して、「モノとしての作品の死」の意味を問うことに興味を移していった。



参加者コメント

「自分の想像とは全く違う作品でとても刺激的でした」（19～24歳/男性/埼玉）、「かわいい作品なのに残酷性にびっくり。夢と社会のつながり、夢の義務みたいなものを感じた」（30代/男性/岐阜）

09

青空トーク

日時 | 2017年5月6日
会場 | 岐阜県美術館・屋外ステージ
参加者 | 150人

美術館庭園に設置された実寸大キューブフレームを舞台に審査員と入選者がカジュアルトーク。

14時～ 11代大樋長左衛門 × 柴山豊尚、三枝愛、三木陽子、宮原嵩広

自然素材を扱うという共通点がある5人。大樋は、入選者の制作動機などをきっかけに、通常の制作発表では交わることが少ない、陶芸・彫刻・インスタレーション・クラフトなどの表現者のトークを引き出した。

15時～ 三輪真弘 × 佐藤雅晴、ミルク倉庫+ココナッツ

テクノロジーやメディアを扱うという共通点の3組。身体と動きの隙間、今後の表現について、和やかに話した。屋外での開催が危ぶまれた午前中の小雨が、「青空トーク」のときには涼しい日差しとなりゴールデンウィークの爽やかな屋外イベントとなった。



参加者コメント

「1部2部共、リードされるお二人の先生方がうまく話を進めていた。作家や審査員の方々、支える方々が色々な方法で深くかわり合ってイベント全てを創り上げ、とてもすばらしいと思います」「美術館庭園はゆったりしていて五感を休めるのにぴったり。時にこうして刺激的なイベントがあると楽しいですね」「アーティストのお話、大変興味深かったです。今日は白川村から来ました。なかなか普段『文化』に触れる機会がないので、岐阜県全体で楽しめるアートのイベントがあるといいです」

10

アーティストワークショップ
中村潤「裁縫鳥になろう!」

日時 | 2017年5月7日
会場 | 岐阜県美術館・庭園
講師 | 中村潤
参加者 | 35人

クモの糸などを使って葉っぱを縫い合わせる実在の鳥「裁縫鳥」から発想し、身体が納まるような巣を紙と糸で縫って、その中で寛ぐというワークショップ。縫うことの身体性を提示し、既知の行為のサイズを変えると、中村の出展作にちなみ、大きな段ボールや和紙の上で「丸くなったら気持ちいい」「狭くて落ち着く」など、心地いい身体の状態を探す。次に、紙を好きなかたちに切り取りとっ

て、毛糸や美しい色のリボン、中村の作品で使った紐、糸などで縫う。巣の中に入って内側から縫ったり、絵を描いたり、発想は自由。完成したら、庭園の好きな所へ巣を運び、木陰や岩の上などでのんびりする。手づくりの巣があまりに心地よくてスヤスヤと眠ってしまう子も…。



参加者コメント

「のんびりするときに楽しかった（子）／子どもが自由に楽しんでるのが、みていて楽しかった。芸術に気軽に触れる機会をありがとうございます（親）」
「自由に作ること、また『巣づくりして中でのんびりしてみる』というコンセプトが良かった（親）」
「さいほう鳥になったきぶんになりました」（子）

11

安野太郎「ゾンビ音楽演奏会」

日時 | 2017年5月13日
会場 | 岐阜県美術館・多目的ホール
出演 | 安野太郎
参加者 | 113人

始まりもなければ終わりもない、機械が生成する音楽をBGMに、作品のバルーン上に座った安野が、「2003年 IAMAS 在籍時、ゾンビ音楽の元となるアイデアが生まれる。2012年 産業革命から150年、IT革命から20年。電子工学を独学。2017年 AAIC2017で高橋源一郎賞受賞。2022年 ゾンビ音楽発祥の地日本から、楽器の伝来を逆に辿る、シルクロード逆走ツアー。2033年 長女がロボットの軍事利用に反対する団体、ZEALDsを立ち上げる……」と4001年まで続く『ゾンビ音楽史』を朗読。美術館恒例の「ナンヤローネアートツアー」では、「音の印象と合うコネクターを選び、絵にする」という新しい鑑賞活動が試みられた。

参加者コメント

「規則性があるようで決してループには聞こえない一方で、永遠に一つのメロディが形を変えていくような…、しかしそれはゾンビ音楽を聴いている“私”が変化しているのか…と様々な想いと考えをめぐらせることが出来る素晴らしい演奏会」「大変退屈な演奏会で、ゾンビ音楽の醍醐味を味わうことができた。『ゾンビ音楽史』も作品として一体性があり、アイロニーに満ちた内容で、大変笑わせて頂きました。これからも応援しています」



12

田中泯講演会
「田中泯はどのように美術に関わってきたか？」

日時 | 2017年5月20日
会場 | 岐阜県美術館・講堂
出演 | 田中泯 聞き手 | 高橋綾子
参加者 | 230人

田中は、講演を通し、長年の鍛錬と生き方によって、即興に真実を紡ぎだす身体と言葉のあり方を見せた。

『身体ゆくえ』とは、人類が身体をどのように扱ってきたか、始末してきたか、死をどう見極めてきたかの問題」と投げかけ、「今の世界には言葉があふれているけれど、口から出る言葉は、常に身体が頷く言葉であってほしい。僕たちは身体から出ていけない。自分の言葉とどう生きていきたいのか、身体がくっついていく言葉を探してください」と語りかけた。

最後に「美術館は、建物がすごいじゃなくて、人と出会わせてくれるからいい。それ以上でもそれ以下でもない。ライブ感こそがどんな表現にも必要」と美術館関係者や作家にも、メッセージをおくった。



参加者コメント

「身体から発せられる声を見せず、目で見えることだけにまどわされず、この自分の身体という殻をまとって生きていきます」「自分が言葉を使うときの身体のありよう。常に身体を意識して生活してみたい」



13

アーティストワークショップ
耳のないマウス「アート×テクノロジー」

日時 | 2017年5月21日
会場 | 岐阜県美術館・スタジオ
講師 | 耳のないマウス
参加者 | 10人

作家のユニークな自己紹介や場の造りこみで、子どもたちはテクノロジーアートの世界に引き込まれていく。まず、明暗や振動といった様々な条件を感知する小さな電子機器（MESH）を使ってiPadで簡単なプログラミングを体験。次に、段ボールや包装紙、風船、ひもなど身近な素材を材料に、プログラムと関連づけて「暗くなると鳴くライオン」「音に反応して目が光る」などアイデアあふれる動物を制作していく。「さあ、動物園にしよう」という作家のかけ声の下、子どもたちはそれぞれの動物にピッタリの場所に動物を飾る。全員でまわる“動物園ツアー”で、芸術と科学技術の複合という難しいテーマを楽しく体験した。



講師コメント

「グループとしては初のワークショップ。可能性を感じられるものになって、今後に生かせそうです」

参加者コメント

「プログラミングは、むずかしいと思ったけど、とてもかんたんで、楽しかった」

14

アーティストワークショップ
松本和子「フレスコ画ワークショップ」

日時 | 2017年5月27日 - 28日
会場 | 岐阜県美術館・スタジオ
講師 | 松本和子
参加者 | 10人

自然素材をベースとする世界最古の絵画技法フレスコ（湿式法）を漆喰づくりから水溶性顔料による描画まで経験する貴重なワークショップ。まず、消石灰に水を入れクリーム状にしたものに、砂を入れてゴムベラとボウルでクリーム状になるまで練り漆喰を作る。次に、描く部分だけを、ウレタンフォームにコテで漆喰を均一の厚さに塗り付けていく。漆喰の水気が飛ぶのを待つ間、下絵にそって目打ちで穴をあける（スポロヴェロ）。絵が染み込み、乾くと定着。

柔らかな幕、光や空気感が広がる松本の制作過程には、身体的な作業と化学変化があることを体感した。2日目には、フレスコの彩色層を膠の吸着力によって麻布等に貼り引きはがすストラッポ技法の公開実演も行った。



講師コメント

「岐阜は、石灰の生産地。AAICの後、岐阜のどこかの建物や公共空間に長く残る壁画を描いてみたいです」

参加者コメント

「材料を練ったり土台から作っていく作業が簡単ではないところが、逆に新鮮（フレスコだけに）」

15

高橋源一郎講演会「芸術の未来」

日時 | 2017年6月3日
会場 | 岐阜県美術館・講堂
参加者 | 300人

高橋にとって初めての美術展の審査の感想を交えながら、一次審査では最も興味を惹かれたという平野真美の作品をはじめ15の入選作品全てを講評。ラジオのパーソナリティとして鍛えられた話術で、ユーモアを交えながら現代社会を論じた。第2部では、「高橋源一郎賞」の〈THE MAUSOLEUM—大霊廟—〉安野太郎と対談。批評性のあるやりとりで、会場からは笑いが起き、2時間が短く感じられるほどだった。高橋の目を通した作品解釈と思考に触れ、来場者は講演会終了後、再度、展示室に向かっていた。

講演後、高橋は、ミュージアムショップで森真人の「虫」のオブジェを購入。選んだのは、作家らしく、“万年筆の擬態虫”だった。

参加者コメント

「独自の切り口での作品評論がおもしろい」「各展示の意図や解説が聞け、理解が深まった」「少し難しい印象の作品もありましたが、高橋先生の話聞いてもう一度観てみたいと思いました」



16

アーティストワークショップ
森真人「ムシの日に虫をつくらう！」

日時 | 2017年6月4日
会場 | 岐阜県美術館・庭園
講師 | 森真人
参加者 | 70人

カラッとした風が吹き抜ける絶好の“ムシ日和”。「人間は、自分の都合に合わせて環境を変えてきたけれど、ムシたちは、周りの自然に合わせて自分を変えてきました。今は使われなくなった道具を使って、想像のムシをつくらう」と、森が今日のテーマを伝える。さっそく、画用紙にむかって、思い思いのムシを描き始める子どもたち。虫を描いたら、切り抜いたり組み合わせたりして、アルミの洗濯ばさみを取りつける。洗濯ばさみが足になったチョウチョや毛虫、カブトムシと怪獣が合体した架空の虫などが次々に出来上がった。“虫博士”少年は、ワークショップの合間に美術館庭園で次々に本物の虫を発見！観察力と発想力が羽ばたき、創造性に結び付く機会となった。



参加者コメント

「子どもの自由な発想をそのまま表現させるおもしろさを知りました」「屋外で作るところが良かったです」「いろんなむしがつくれたのしかったです」

17

学芸員によるCUBE TOUR

日時 | 2017年4月21日、5月19日、6月10日
会場 | 岐阜県美術館
担当学芸員 | 鳥羽都子
参加者 | 30名、25名、35名

担当学芸員が「15のキューブを巡りながら、『身体のゆくえ』の多様な受け止め方を観ていきましょう。もう一つの共通項である『キューブ』に、アーティストたちがどのように挑んだのかも見どころ」と導入後、作品解説を行った。〈Mimesis Insect Cube〉は、「CUBEが虫かごのようにも見える。本来、虫は虫かごから外へ逃れようとするが、擬態虫は中に集まって、時代を越えて生き続けられるCUBEに入りたがっているよう」など、親しみやすく紹介。「ほの暗い第1展示室には、異世界や異空間を想起させる7つのキューブを集めた。それぞれ少しずつ連鎖しており、幻想的な〈蘇生するユニコーン〉は展示室に入ったときから遠くに見え、横たわる白い生物に近づいていく」と会場構成の意図を話した。参加者からは積極的に質問も出していた。



参加者コメント

「見るだけではない体験。アートに興味がない人にもお伝えしたい!!と思いました」(20代/女性/岐阜)、「とてもおもしろかった。アーティストさんと作品を作り上げていくという行為は素晴らしい」(50代/女性/愛知)、「この先も、この企画を継続されることを望みます」(50代/男性/岐阜)

最終日、各作家が“在廊”。14時からは、担当学芸員の案内で各作家を訪ねる“CUBE TOUR”を行った。〈移動する主体 (カタツムリ)〉耳のないマウスは、「アイデアの段階からこの作品を2年以上扱っているが、何回もメンテナンスに来て、今では、自分たち自身の感じ方が変わってきて明るく捉えるようになった」。〈蘇生するユニコーン〉平野は、来場者アンケートの「印象に残った作品」で常に上位。質問の一つひとつ丁寧に答えていた。〈THE MAUSOLEUM 一大霊廟一〉安野は、「空気で音を出すという点で、リコーダーは、同じ空間に設置されたパイプオルガンの原初」と解説。〈縫いの造形〉中村は、見学の小学生がひっかかって和紙が破れたところを、細かい針目で補修。「視線の定めりどころができて、かえてよくなった。そういう変化もおもしろかった」。〈この部屋とダンス〉谷本は、「壺

が落ちたりして、空間がどんどん変化した。床も粘土が散らばって、嬉しい」。〈cranky wordy things〉ミルク倉庫+ココナッツは、「それぞれのコンペで傾向があったりするけれど、ミルクココが大賞をとって、第2回の傾向が全く見えなくなりました」という学芸員のコメントに、「それは一番うれしい感想!」と笑った。〈庭のほつれ〉三枝は、屋外のインスタレーションを初めて経験し、「キューブの外側が風雨で色が変わったり、葉っぱがキューブのなかに吹き込まれたり。3月の搬入時は灰色の風景のなかに真新しい木材のキューブがあったのが、今は、こんなに青空で芝生が緑で、木が茂っていて。環境のなかにキューブがある景色の変化も含めて〈庭のほつれ〉」。それぞれの作家が、AAICの経験を吸収し、成長していた。



参加者コメント

「子供が小学校で見学し『すごかったよ!また見たい!!』と言うので家族で来ました。いろんな作品があってとても良い時間を過ごせました」(30代/女性/岐阜)、「多様な価値観の作品群にふれられて、パワーをいただき、リフレッシュしました」(50代/男性/大阪)、「2度目です。各アーティストの思い、考えを直接聞いたうえで改めて作品を観ることで、前回よりも深く感じることができました」(30代/男性/愛知)

19

アーティストワークショップ
水無瀬 翔「DEMO DEPOで働こう!」

日 時 | 会期中の土日祝
会 場 | 岐阜県美術館 展示室
講 師 | 水無瀬翔

自身の身体を使用せずとも、あらゆる欲求が表面的には満たされ、本来人間が行うはずのデモ行進までもロボットが代理する商品として流通し得る。それを批評的に表現するレンタルショップ型作品に、毎土日祝の11時から16時まで作家が滞在し、鑑賞者が、店員役・客役を体験するワークショップを行った。来場者は、「店員見習い」として、デモの受付や相談など、来客対応・店舗運営に従事する。エプロンの制服もある。また、「客」としてデモを申請することもできる。小学生が「金華山の狸として」デモを申請するなど、ごっこ遊びの延長線上で、虚構を通じてどう想像力を働かせるかが蓄積され、参加者は、役割を演じることを通し、見る鑑賞ではなく構想する鑑賞を体感した。

参加者コメント

「デモコーシンのロボットを動かさせて楽しかった」、「インザキューブ支店はキューブを店にみたくていておもしろかった」(中学生)、「発想がとてもおもしろく、もし未来にデモをしたい、でも勇気がないというような人が本当に利用しそう」(中学生)



20

3Dペンワークショップ

日 時 | 会期中の土日祝
会 場 | 岐阜県美術館
参加者 | 720名

だれでも、無料で楽しめる創作コーナーを会期中の土日祝日に解放。“空中に描けるペン”を使って、立方体のキーホルダーを作った。運営にはボランティアも協力した。

参加者コメント

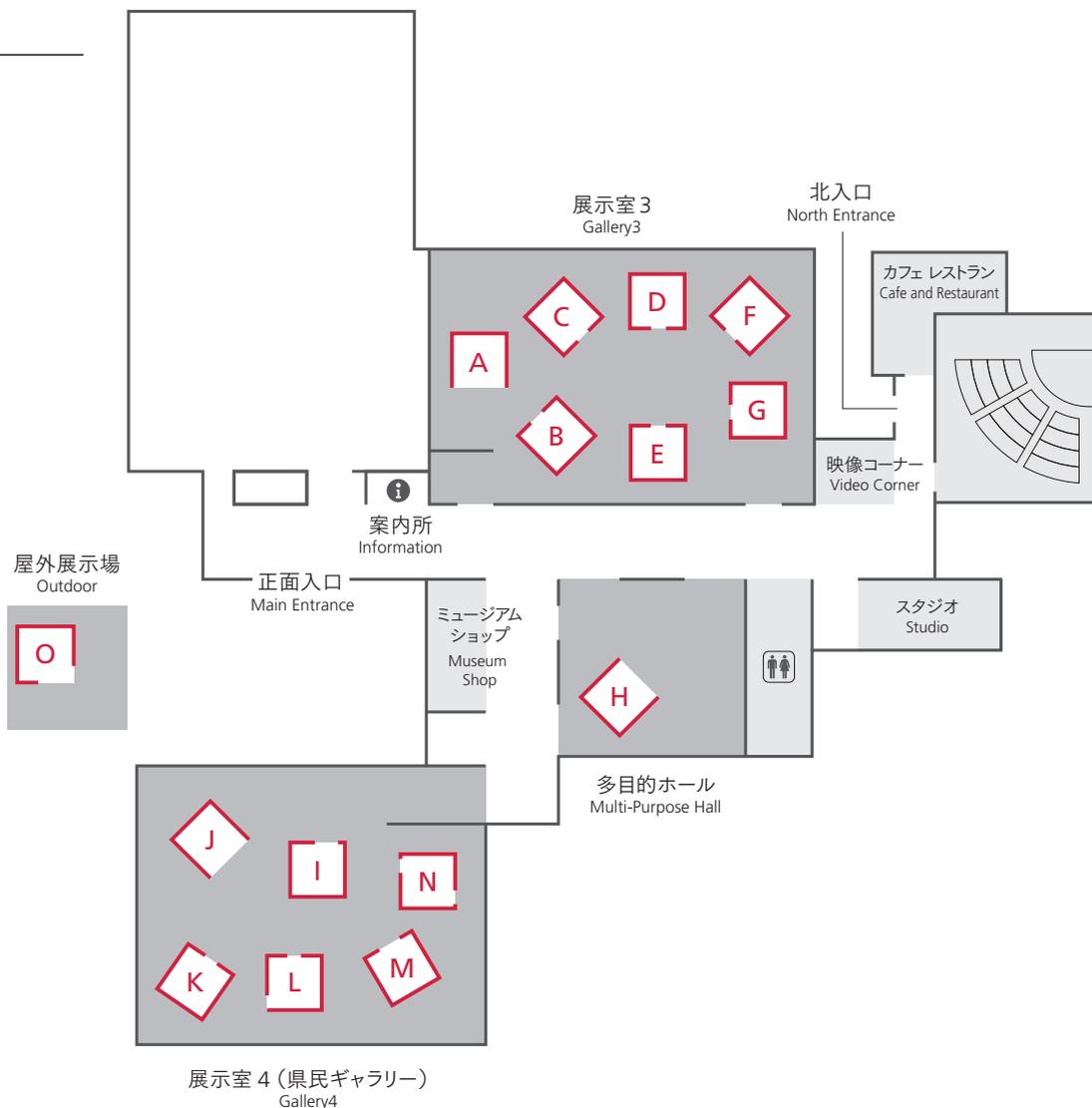
「子どもでも楽しめるコーナーはありがたいです。一緒にたのしめました」(30代/女性/岐阜)



展覧会概要

- ・会期 平成29年4月15日(土)から6月11日(日)まで(50日間)
- ・会場 岐阜県美術館
- ・来場者 37,579人

会場



A 柴山豊尚《ニョッキ(如木)2017》
SHIBAYAMA Toyohisa 《Nyokki 2017》

B 森真人《Mimesis Insect Cube》
MORI Sadahito 《Mimesis Insect Cube》

C 耳のないマウス《移動する主体(カタツムリ)》
Earless Mouth / Mouse 《Shifting Self (Snail)》

D 宮原嵩広《Missing matter》
MIYAHARA Takahiro 《Missing matter》

E 佐藤雅晴《HANDS》
SATO Masaharu 《HANDS》

F 三木陽子《Conduit(導管)》
MIKI Yoko 《Conduit》

G 平野真美《蘇生するユニコーン》
HIRANO Mami 《Revive the unicorn》

H 安野太郎《THE MAUSOLEUM 一大霊廟一》
YASUNO Taro 《THE MAUSOLEUM》

I 松本和子《透明の対話》
MATSUMOTO Kazuko 《Transparent dialogue》

J 中村潤《縫いの造形》
NAKAMURA Megu 《The shape of sewing》

K 堀川すなお《モノについて》
HORIKAWA Sunao 《About an object》

L 水無瀬翔《DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店》
MINASE Sho 《DEMO DEPOT IN THE CUBE Branch》

M 谷本真理《この部屋とダンス》
TANIMOTO Mari 《Dance with this room》

N ミルク倉庫+ココナッツ《cranky wordy things》
Miruku Souko + The Coconuts 《cranky wordy things》

O 三枝愛《庭のほつれ》
MIEDA Ai 《I'm waiting for the time,
when that field is opened again.》



■ オープニングセレモニー

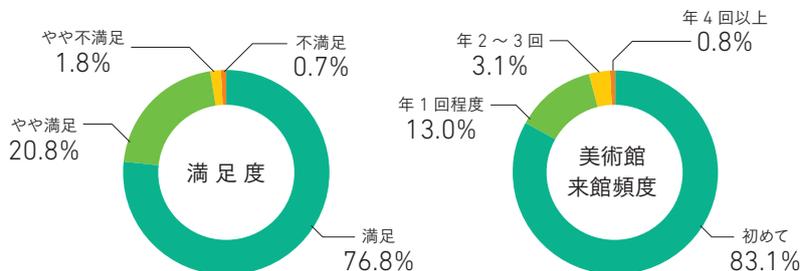
一般公開に先立ち、4月14日(金)、岐阜県美術館においてオープニングセレモニーを開催した。出品作家、審査員、美術関係者等、約150人が参加した。

- ・表彰式、テープカット 15:00-16:00
- ・内覧会 16:00-17:00
- ・交流会 17:00-18:30



学校団体鑑賞

AAIC2017の開催目的である「新たな形のアートの鑑賞機会を提供」の一環として、県内小中高等学校、特別支援学校に意向調査を行い、希望があった学校を対象に実施した。県内延べ30校、1,949人の児童・生徒がAAIC2017を鑑賞した。



対象者：学校団体鑑賞に参加した児童、生徒／調査方法：紙面によるアンケート調査／回答数：1,394件

自由記述欄抜粋

- ・私の美術館のイメージとは全く違って、とても面白かった。(小学4年生)
- ・今までは絵を描いたり、作品を作ったりしても、何が伝わるか、どこが面白いかが分からなかった。CUBEを見て、美術への考え方が変わりました。(中学3年生)
- ・「観て」「体験する」ことで、「自分で考え表現する」ということの大切さを学んだ。(中学2年生)



ボランティア

AAIC2017の開催目的である「アートに関わる人材の育成とネットワークづくり」の一環として、初開催となる本展をサポートするボランティアを募集した。作品制作補助、展覧会運営補助など、延べ220人が参加した。

AAIC終了後は、美術館のサポーターに登録する人もいた。

活動例

- ・事前研修
- ・制作補助…森真人、松本和子、中村潤、堀川すなお作品等の設営・展示補助、水無瀬翔作品のロボット組立・アイロンプリントを行った。
- ・会場運営…誘導案内や安全確保、作品の紹介を積極的に行った。
- ・学校団体見学補助…学校単位で見学に来た子どもたちの団体鑑賞に同行し、安全確保や作品保全を行った。
- ・ワークショップ補助…3Dペンワークショップの補助、松本和子ワークショップや耳のないマウスワークショップなどでは、刃物類の安全な使い方についてサポートしたり、画材などの準備や片づけを行った。屋外で行われた、森真人ワークショップや中村潤ワークショップでは、子どもたちの創作を補助した。

ボランティアの声

- ・制作、展示の手伝いをする事で、参加した感が得られ良かった。
- ・多くの人に会いました。作家の先生ともお話ができました。普段専業主婦の私にとっては貴重な体験でした。
- ・制作の現場を拝見出来たり、直接お客様から感想をお聞きする機会があったり、楽しく参加できた。
- ・今回初めて美術館でのボランティアに参加させていただきました。もともと芸術には見学者の立場から興味がありました。しかし、今回ボランティアの立場で参加して、さらに奥の深さに気づかされました。



の国ぎふ芸術祭
Award IN THE CUBE 2017

IN
THE
CUBE
2017

Chapter

4



資料

Data

■ スケジュール

2014年

5月7日(水)	岐阜県美術展一般部運営委員会 小委員会設置
10月22日(水)	新たな美術展を創設するための委員会 設置

2015年

3月～10月	清流の国ぎふ芸術祭運営委員会・Art Award IN THE CUBE 2017企画委員会設置。 美術展を「清流の国ぎふ芸術祭」と総称し、3年に1回開催する「Art Award IN THE CUBE」と、3年に2回開催する「ぎふ美術展」とした。
12月22日(火)	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会設立

2016年

3月25日(金)	公式サイト開設、公募要項発表
3月27日(日)	開催記念トークイベント「アートの新たな源流を求めてー岐阜から始まるアートアワード」 3331Arts Chiyoda (東京都千代田区)
4月11日(月) - 7月8日(金)	作品公募受付開始
5月28日(土)	開催記念トーク in 名古屋「画家のカラダ」 Minatomachi POTLUCK BUILDING (名古屋市港区)
6月5日(日)	開会記念トーク in 京都「身体のゆくえ」 MTRL KYOTO (京都市下京区)
6月19日(日)	会場見学・説明会 in 岐阜「アートの新たな源流を求めて」 岐阜県美術館
8月1日(月)	1次審査会 ソフトピアジャパン ソピアホール(大垣市)
8月31日(水)	1次審査結果発表
10月5日(水) - 12月9日(金)	ボランティア募集
11月3日(木・祝)	PRイベント「3Dペンワークショップ」 岐阜県美術館(文化の森の秋祭り)
11月20日(日)	PRイベント「3Dペンワークショップ」 柳ヶ瀬商店街(第27回サンデービルディングマーケット)
12月17日(土)	プレイベント「アートの手ざわり」第1弾ワークショップ in 高山市 「もの、どのように感じてる?伝わってる?」(講師:堀川すなお) 飛騨・世界生活文化センター
12月24日(土)	プレイベント「アートの手ざわり」第2弾ワークショップ in 多治見市 「つくって投げて!体で楽しむ陶芸粘土」(講師:谷本真理) 岐阜県現代陶芸美術館

2017年

1月21日(土)	ボランティア研修会
2月5日(日)	PRイベント「3Dペンワークショップ」 東邦ガスエネルギー館(愛知県東海市、未来ヘタイムスリップ!2017)
2月12日(日)	プレトークイベント「アートを楽しく観る秘訣」 岐阜県美術館
2月18日(土)	ボランティア研修会
3月5日(日)	PRイベント「3Dペンワークショップ」 ふれあい福寿会館(NPO・ボランティア・生涯学習<子ども・3世代交流>フェスティバル)
3月6日(月) -9日(木)	キューブ設置
3月10日(金) -23日(木)	作品搬入・設置
3月28日(火)	2次審査会 岐阜県美術館
4月3日(月)	2次審査結果発表
4月14日(金)	オープニングセレモニー開催(表彰式・内覧会・交流会)
4月15日(土)	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 開幕
	0 JUN・中原浩大×大賞・審査員賞受賞者クロストーク
	アーティストワークショップ「DEMO DEPOで働こう!」(講師:水無瀬翔)※会期中毎土日祝
4月16日(日)	日比野克彦館長による公開講評会
4月23日(日)	森村泰昌講演会「身体のゆくえ」
4月29日(土・祝)	アーティストパフォーマンス「粘土のインスタレーション 公開制作」(谷本真理)
5月3日(水・祝)	アーティストパフォーマンス「ユニコーン 公開制作」(平野真美)
5月6日(土)	青空トーク
5月7日(日)	アーティストワークショップ「裁縫鳥になろう!」(講師:中村潤)
5月13日(土)	アーティストパフォーマンス「ゾンビ音楽演奏会」(出演:安野太郎)
5月20日(土)	田中泯講演会「田中泯はどのように美術に関わってきたか?」
5月21日(日)	アーティストワークショップ「アート×テクノロジー」(講師:耳のないマウス)
5月27日(土)	アーティストワークショップ「フレスコ画ワークショップ」(講師:松本和子)
5月28日(日)	アーティストワークショップ「フレスコ画ワークショップ」(講師:松本和子)
6月3日(土)	高橋源一郎講演会「芸術の未来」
6月4日(日)	アーティストワークショップ「虫の日にムシをつくろう!」(講師:森真人)
6月11日(日)	Artists IN THE CUBE
	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 閉幕
6月13日(火) -17日(土)	作品・キューブ撤去
8月26日(土)	ボランティアミーティング

広報

会場を彩ったサインは、AAIC2017を盛り上げた。広くPRするため、ポスター、チラシの他、オリジナルグッズを作成した。



展覧会ポスター



サンプルキューブ



会場サイン



会場サイン



会場エントランス



会場ファサード



創作コーナー



美術館外看板



美術館南ポスタータワー



公募募集ポスター



開催記念トークイベントチラシ



トークイベントチラシ



トークイベントチラシ



トークイベントチラシ



プレトークイベント



ボランティア募集チラシ



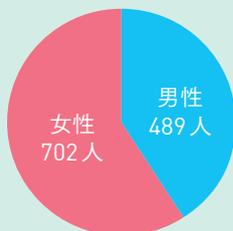
プレチラシ



グッズ(エコバック、しおり、クリアファイル)

■ 来場者アンケート

1. 性別



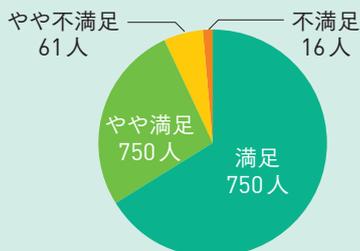
2. 年齢



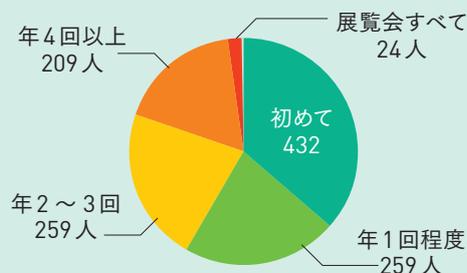
3. お住まい



4. CUBE展について



5. 来館頻度



対象者：AAIC2017の来場者(37,579名)

調査方法：会場内にアンケートコーナーを設置。紙面による任意のアンケート調査。

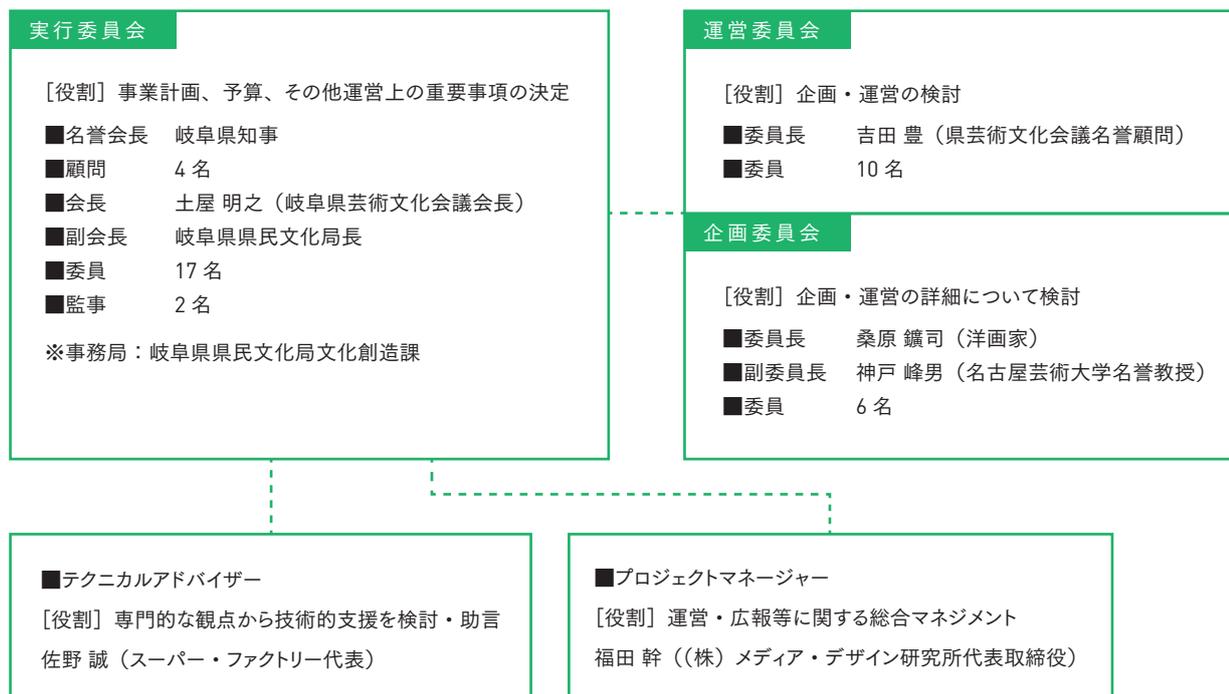
回答数：1,193件

自由記述欄抜粋

- ・人間の身体について五感にうったえるものがあり楽しかったです。
- ・深く考察する作品が多くインパクトがありました。身体とは、そのゆくえは、と自分なりに考えさせられました。テーマとのつながりが分かり難いものもあり、また来て自分なりに解いてみたいです。
- ・現代アート(?)は、あまりくわしくわかりませんが、興味を持つきっかけになったと思います。
- ・久々に心に響く作品に出会えた気がします。ほーっと思ったり、ぞくっとしたり、へーっと思ったり、感性が忙しく動きました。
- ・新しいタイプの公募展で期待していました。選ばれた作家さんたちもこれからの時代をつくっていく感じがしました。面白かったです。
- ・意味不明。理屈っぽいものが多い。無条件で、心と体に訴えるものがほしい。
- ・アートがアートでなくなっていく過程のように見えました。でも現代を捉えたものでしょう。
- ・コンセプト寄りでクオリティが追いついていないように思いました。

運営体制

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 運営体制



清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会 委員名簿

役職	氏名	所属機関・団体役職
名誉会長	古田 肇	岐阜県知事
顧問	村下 貴夫	岐阜県議会議長
	杉山 幹夫	岐阜県美術館協議会会長
	星野 欽夫	岐阜車体工業株式会社社長
	吉田 豊	清流の国ぎふ芸術祭運営委員会委員長
会長	土屋 明之	岐阜県芸術文化会議会長
副会長	桂川 淳	岐阜県県民文化局長
委員(五十音順)	阿部 和久	株式会社中日新聞社岐阜支社長
	井戸 敬二	岐阜県町村会会長
	上田 善弘	岐阜県立国際園芸アカデミー学長
	碓井 洋	株式会社岐阜新聞社代表取締役社長
	桑原 鑛司	Art Award IN THE CUBE 2017企画委員会委員長
	重森 万紀	日本放送協会岐阜放送局局長
	高木 敏彦	公益財団法人岐阜県教育文化財団理事長
	高橋 秀治	岐阜県現代陶芸美術館長
	竹本 義明	名古屋芸術大学学長
	田島 一男	岐阜県美術館後援会会長
	田中 勝士	岐阜県議会厚生環境委員会委員長
	土屋 嶋	株式会社大垣共立銀行頭取

委員(五十音順)	日比野 克彦	岐阜県美術館長
	細江 茂光	岐阜県市長会会長
	松川 禮子	岐阜県教育長
	村瀬 幸雄	株式会社十六銀行頭取
	森 保	岐阜県立国際たくみアカデミー校長
監事	加藤 誠	岐阜県出納管理課長
	大野 昌伸	公益財団法人岐阜県教育文化財団経営管理課長

清流の国ぎふ芸術祭運営委員会 委員名簿

役職	氏名	所属機関・団体役職
委員長	吉田 豊	岐阜県芸術文化会議名誉顧問
委員(五十音順)	白井 千里	書家、岐阜県世界青年友の会常務理事
	角田 茉瑳子	児童文学作家
	加藤 幸兵衛	陶芸家、(株)幸兵衛窯代表取締役
	神戸 峰男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授
	桑原 鑛司	洋画家
	宗宮 喜代子	岐阜聖徳学園大学教授
	土屋 明之	中部学院大学教授、岐阜県芸術文化会議会長
	仲居 宏二	聖心女子大学教授
	日比野 克彦	岐阜県美術館長
	廣瀬 輝	中日本高速道路(株)取締役

Art Award IN THE CUBE 2017企画委員会 委員名簿

役職	氏名	所属機関・団体役職
委員長	桑原 鑛司	洋画家
副委員長	神戸 峰男	日本芸術院会員、名古屋芸術大学名誉教授
委員(五十音順)	青木 正弘	美術評論家
	安藤 泰彦	情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授
	衣笠 文彦	彫刻家、岐阜聖徳学園大学短期大学部非常勤講師
	佐藤 昌宏	洋画家、岐阜大学教育学部教授
	高橋 綾子	名古屋芸術大学教授
	日比野 克彦	岐阜県美術館長

Art Award IN THE CUBE 2017 を終えて

桑原 鑛司 (AAIC2017企画委員会委員長)

平成27年、戦後69回を数えた岐阜県美術展を閉幕することとなり、県展に替わるものとして新たな構想の下に全国規模の展覧会を立ち上げることになった。それは他に見られないような斬新なものでなければならない。展覧会の目的、内容、手法に独自性がなければならない。平成26年5月、企画委員会の前身となる小委員会が組織され、これらを前提に議論が積み重ねられた。

目的には、未だ世に出ていない才能ある作家の発掘と育成を掲げた。となれば、推薦形式ではなく公募であるべきだ。そして作家たちの出品意欲を掻き立てるような条件を設定する必要がある。それは何か。

まず展覧会としてどのような作品を期待するか。制作に関して何らかの制限を設けるか。テーマを設けるか。これらについての議論は正規の委員会以外にも可能な限り時間を見つけて、飽くことなく重ねられた。

初めに「身体のゆくえ」というテーマと丈六のキューブを使うという2つの制約をつけることが決定された。次に、作家たちにとっても観客にとっても魅力的な展覧会にするにはどうしたらよいか、が議論となった。審査員、賞、制作のサポート(人と製作費)、展覧会の開催前の告知・広報、開催中の各種イベント(講演、トークセッション、ワークショップetc.)、ボランティアの募集、等々。これらの議題の結論、結果はそれぞれについての報告があるのでここでは重複を避けるが、審査員と制作サポートについては以下の方針で臨んだことを付け加えておきたい。

審査員は展覧会の顔とも言えるほど重要である。したがって既存の展覧会でよく見かける顔ぶれは避け、作家たちがこの審査員なら自作の評価を受けてみたいと思えるような人を、また美術の専門家だけではなく異分野の芸術家、評論家が入っていたほうがよいのではないかと、というところで意見の一致を見た。

また制作サポートであるが、どうしたら作家の助けになるかを

考えた。人に関してはテクニカル・アドバイザーとしてスーパー・ファクトリーの佐野 誠氏を招き、実際の作業については美術関係に実績のあるカトウスタチオとボランティアを配した。製作費は15点の入選作品が決まった時点で、その作家(グループ)に入選賞金として50万円を支給することとした。

最後に、次回に向けて最も重要な課題を挙げるならば、それは審査方法と、AAIC2020の存在を全国に知らしめるための広報の手法、そして海外への発信であろう。優れた作品をより多く展示することが展覧会の意義を高めるとすれば、この3つが特に肝要である。

今回は一次審査で790点の応募作品から15点の入選作を選び、二次審査で大賞、審査員賞を決定した。一次審査では書類(作品のコンセプト)、スケッチ、マケット、DVDによって審査された。実作ではない。選ばれなかった作品のなかに良いものがあったかもしれない。やむを得ない仕儀とは言え問題はここにある。より良い方法を考えなければならない。

広報の一環として公募期間中に東京、京都、名古屋、岐阜の四カ所で展覧会の概要説明、審査員参加のトークセッション、講演などを行い好評であったが、次回には開催場所をもっと増やし全国的に展開する必要がある。また、新聞、雑誌、ネット等の広報媒体の利用、大学、高校、美術関係機関への資料配布はできる限り手を尽くしたが、なお正鵠を得ていないような気がしてならない。より効果的、効率的な方法を探らねばならない。

海外への広報、公募についてはどのように臨むのか。人、作品の輸送、滞在、制作、言語、等々対処すべき事柄は多岐にわたるが、次へのステップとして欠くべからざる取り組みであると思われる。



発行年 2017年12月発行

編集 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会事務局
鳥羽都子
森田良紀

デザイン 株式会社電通名鉄コミュニケーションズ
株式会社アーティカル

写真 特に記載のない場合は、
清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会事務局
安野亨、三浦知也

印刷 サンメッセ株式会社

発行 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会

© 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
無断転載・複写を禁じます。

本書では敬称を省略しております。
また、本書掲載の肩書きは2017年8月1日現在のものです。

助成 公益財団法人田口福寿会

協賛 **OKB 大垣共立銀行**



十六銀行

All For Your Smile
140th
Anniversary



平成29年度 文化庁
文化芸術創造活用
プラットフォーム形成事業